

上沢遺跡Ⅲ

第38・46・50次調査

—都市計画道路松本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004

神戸市教育委員会

上沢遺跡Ⅲ

第38・46・50次調査

—都市計画道路松本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2004

神戸市教育委員会

序

多くの市民の暮らしを一変させた阪神・淡路大震災から9年が経過しました。大きな打撃を受けた街並みは、ようやく景観をとりもどしつつあります。

神戸市は、震災後直ちに、災害に強く安心で快適な都市を目指し、市民のご理解とご協力を得ながら、市を挙げての復興事業を推進してきました。教育委員会においても、復興事業に伴う広範開かつ緊急を要する埋蔵文化財調査の実施に、本市文化財担当職員のみならず、各都道府県・政令指定都市職員の支援を得て、全力を傾けてまいりました。

今回、報告いたします上沢遺跡の報告書は、震災復興の区画整理事業と並行して行われた、都市計画道路松本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録です。

この調査では、弥生時代後期から中世にいたる遺構・遺物が発見され、当地域の歴史を知る上で貴重な資料を提示することができました。

これらの資料が、地域の歴史を明らかにする文化遺産として、広く知っていただき、活用されれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査および本書刊行にあたって、ご協力いただきました関係各機関、各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月
神戸市教育委員会
教育長 西川和機

例　言

1. 本書は、都市計画道路松本線拡幅工事に伴い、神戸市都市計画局より委託され、神戸市教育委員会、財團法人　神戸市体育協会が平成12年度から14年度にかけて実施した、上沢遺跡の第38・46・50次の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、上沢遺跡については本書以前に別事業によるものではあるが、すでに2冊の報告書が刊行されているため、本書を「上沢遺跡Ⅲ」とする。
2. 本報告の発掘調査地点は、神戸市兵庫区松木通4丁目に所在する。
3. 第38-1、2、3次調査については、調査時には「第37-1、2、3次調査」と呼称していたが、本報告によって、「第38-1、2、3次調査」と改称する。調査時の旧次数と新次数の対照については、第1章第4節を参照されたい。
4. 各調査の担当者氏名、調査期間、調査面積等は第1章第4節に記載した。
5. 本書に掲載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集（神戸市体育協会発行）の50,000分の1神戸市全図を、詳細位置図は神戸市発行2,500分の1の地形図「長田」、「夢野」を使用した。
6. 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第V系（日本測地系）で、当遺跡では真北から30'、磁北から7°30' 東に振る。標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。
7. 本書の執筆は、第2章第1節から第6節の造構・小結は、富山直人が記述を行った。その他の部分の執筆・編集は谷正俊が行った。また、遺物の実測は、谷と中居さやか（神戸市教育委員会文化財課学芸員）が行った。第2章第8節の動物遺存体については中村大介（同上）が執筆した。
8. 第3章自然科学分析については、（株）パレオ・ラボに分析・執筆を委託した。また、造構平面図の集成・トレース作業および土器尖測図のトレース作業は（株）ジオテクノ開西に委託した。
9. 造構写真是調査担当者が撮影した。遺物写真については、独立行政法人　奈良文化財研究所　牛嶋　茂氏の指導を得て、杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影した。
10. 調査および出土遺物整理にあたって、兵庫県教育委員会　山田清朝氏にご教示いただいた。

本文目次

例 言

第1章 はじめに

第1節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第2節 既往の調査概要	5
第3節 調査にいたる経過	8
第4節 調査の実施状況	9
第5節 調査体制	10

第2章 発掘調査の成果

第1節 第38-1次調査	11
第2節 第38-2次調査	19
第3節 第38-3次調査	25
第4節 第46-1次調査	27
第5節 第46-2次調査	33
第6節 第46-3次調査	37
第7節 第50-1次調査	53
第8節 第50-2次調査	63

第3章 自然科学分析

第1節 上沢遺跡第46-1次調査出土柱材の樹種	73
-------------------------------	----

第4章 まとめ

第1節 今回の調査で発見された遺構、遺物について	76
--------------------------------	----

挿図・挿図写真目次

fig. 1	上沢遺跡の位置	1	fig. 41	調査区北壁断面模式図	27
fig. 2	周辺の遺跡	2	fig. 42	第2遺構面平面図	28
fig. 3	周辺の遺跡一覧表	3	fig. 43	第1遺構面平面図	28
fig. 4	調査位置図	6	fig. 44	S B101 平・断面図	29
fig. 5	各時代の主な遺構、遺物一覧表	7	fig. 45	S B102 平・断面図	30
fig. 6	調査区配置図	8	fig. 46	S B103 平・断面図	30
fig. 7	上沢遺跡（松本線）調査次数一覧表	9	fig. 47	S B104 平・断面図	31
fig. 8	調査体制一覧表	10	fig. 48	灰色シルト混粗砂、灰褐色砂混シルト出土土器	31
fig. 9	第38-1次調査位置図	11	fig. 49	S P246 出土土器	31
fig. 10	調査区南壁断面図	11	fig. 50	黄灰色粗砂出土土器	31
fig. 11	第2、3遺構面平面図	12	fig. 51	第1遺構面ピット、溝出土土器	32
fig. 12	S B201 平・断面図	13	fig. 52	柱穴、ピット出土柱材	32
fig. 13	第1遺構面平面図	14	fig. 53	第46-2次調査位置図	33
fig. 14	S X304、305出土土器	15	fig. 54	調査区東壁断面図	33
fig. 15	黒褐色シルト出土土器	15	fig. 55	第2遺構面平面図	33
fig. 16	S D202 出土土器	16	fig. 56	S K201 平・断面図	33
fig. 17	灰色シルト出土土器	16	fig. 57	第1遺構面平面図	34
fig. 18	灰褐色砂混シルト出土土器	17	fig. 58	第1遺構面全景（北西から）	34
fig. 19	第1遺構面ピット、溝出土土器	17	fig. 59	S P210 出土土器	34
fig. 20	S P223 山土滑石製臼玉	17	fig. 60	S K201、遺物包含層出土土器	35
fig. 21	調査区出土土鍤	17	fig. 61	機械掘削作業	36
fig. 22	遺物包含層堆積状況	18	fig. 62	遺構検出作業	36
fig. 23	遺構検出作業	18	fig. 63	第46-3次調査位置図	37
fig. 24	第38-2次調査位置図	19	fig. 64	調査区東壁断面図	37
fig. 25	調査区西壁断面図	19	fig. 65	第4遺構面平面図	38
fig. 26	溝壳状況（西から）	19	fig. 66	第3遺構面平面図	38
fig. 27	調査区平面図	20	fig. 67	S D301 遺物出土状況図	39
fig. 28	黒褐色シルト出土土器	20	fig. 68	S B201 平・断面図	40
fig. 29	灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器（1）	21	fig. 69	S B202 平・断面図	41
fig. 30	灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器（2）	22	fig. 70	S B203平面図、S K201平・立面図	41
fig. 31	茶褐色シルト混細砂出土砥石	23	fig. 71	S B101、S A101平・断面図	42
fig. 32	暗灰褐色砂混シルト出土土器	23	fig. 72	第2遺構面平面図	43
fig. 33	調査区西壁土層堆積状況	24	fig. 73	第1遺構面平面図	43
fig. 34	機械掘削作業	24	fig. 74	第1遺構面と周辺地	44
fig. 35	第38-3次調査位置図	25	fig. 75	暗黒褐色シルト出土土器	45
fig. 36	調査区東壁断面図	25	fig. 76	S D301 出土土器（1）	46
fig. 37	機械掘削作業	25	fig. 77	S D301 出土土器（2）	47
fig. 38	調査区平面図	26	fig. 78	S D302 出土土器	48
fig. 39	流路出土土器	26	fig. 79	S B201 出土土器	48
fig. 40	第46-1次調査位置図	27	fig. 80	S B202 出土土器	49

fig. 81	S X201 出土十器	49
fig. 82	S K201 出土土器	49
fig. 83	S D201 出土土器	50
fig. 84	S P132 山土器	51
fig. 85	S P113 出土土器	51
fig. 86	第46次調査検出建物配置図	52
fig. 87	調査地周辺の状況	52
fig. 88	第50－1次調査位置図	53
fig. 89	調査前の状況	53
fig. 90	調査区西壁断面図	53
fig. 91	第3遺構面平面図	54
fig. 92	第3遺構面遺物検出作業	54
fig. 93	湿地内遺物出土状況図	55
fig. 94	第2遺構面平面図	56
fig. 95	第2遺構面掘削作業	56
fig. 96	第1遺構面平面図	57
fig. 97	S K101 土器出土状況図	57
fig. 98	遺物包含層出土七器	58
fig. 99	土器群A, B 出土土器	59
fig.100	流路出土土器	60
fig.101	S D201 出土土器	60
fig.102	S K101 出土土器	61
fig.103	S P101 出土土器	62
fig.104	トライヤルウイーク実習状況（1）	62
fig.105	トライヤルウイーク実習状況（2）	62
fig.106	第50－2次調査位置図	63
fig.107	調査区配置図	63
fig.108	調査前の状況	63
fig.109	調査区南壁断面図	64
fig.110	陶衣壺？出土状況図	65
fig.111	調査区西半部平面図	66
fig.112	上坑、ピット、溝出土土器	67
fig.113	陶衣壺と考えられる土器	67
fig.114	落ちこみ状地形出土土器、陶器	68
fig.115	落ちこみ状地形出土土器	69
fig.116	調査区出土瓦	70
fig.117	調査区出土炉壁、鉛滓	71
fig.118	東半部出土土器	72
fig.119	機械掘削作業	72
fig.120	人力掘削作業	72
fig.121	樹種同定結果	73
fig.122	第46－1次調査出土柱材・材組織の光学顕微鏡写真	75
fig.123	第38、46、50次調査遺構集成図（1）	77～78
fig.124	第38、46、50次調査遺構集成図（2）	79～80
fig.125	居住域の変遷（弥生時代前期～中期）	82
fig.126	居住域の変遷（弥生時代後期～古墳時代初期）	83
fig.127	居住域の変遷（古墳時代前期～後期）	83
fig.128	居住域の変遷（飛鳥時代～平安時代前半）	84
fig.129	居住域の変遷（平安時代後期～中世）	84

写真図版目次

カラー図版 1

第46－3次調査 S D301出土土器

カラー図版 2

第50－1次調査 S K101出土土器

カラー図版 3

第46－3次調査 S D201出土土器

第50－1次調査 土器群A, B 出土土器

写真図版 1

第38－1次調査 第3遺構面全景（南西から）

第38－1次調査 第2遺構面全景（南西から）

第38－1次調査 第1遺構面全景（南西から）

写真図版 2

第38－2次調査区全景（南西から）

第38－2次調査区全景（北西から）

第38－3次調査区東半部（北東から）

写真図版 3

第46－1次調査 第2遺構面全景（北東から）

第46－1次調査 第1遺構面全景（南西から）

第46－1次調査 第1遺構面全景（北東から）

第46－1次調査 S B103検出状況（北東から）

写真図版 4

- 第46-2次調査 第2遺構面全景(南東から)
第46-2次調査 S K201上器出土状況
第46-3次調査 第4遺構面北半部(北東から)
第46-3次調査 S D301十器出土状況

写真図版 5

- 第46-3次調査 第3遺構面全景(南西から)
第46-3次調査 第3遺構面全景(北東から)
第46-3次調査 S B202全景(東から)
第46-3次調査 第2遺構面全景(南西から)

写真図版 6

- 第50-1次調査 第3遺構面全景(北東から)
第50-1次調査 第2遺構面全景(北東から)
第50-1次調査 第1遺構面全景(北東から)

写真図版 7

- 第50-1次調査 上器群A、B出土状況
第50-1次調査 S K101土器出土状況
第50-2次調査 東半部南北断ち割り

写真図版 8

- 第50-2次調査 調査区西半部全景(北東から)
第50-2次調査 溝内小疊群、遺物出土状況(北から)
第50-2次調査 胞衣壺?出土状況

写真図版 9

- 第38-1次調査 S X304、黒褐色シルト出土土器

写真図版 10

- 第38-1次調査 S D202、灰色シルト出土土器

写真図版 11

- 第38-1次調査 灰褐色砂混シルト出土土器、調査区出土土錐

写真図版 12

- 第38-2次調査 黒褐色シルト、灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器

写真図版 13

- 第38-2次調査 灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器、砾石

写真図版 14

- 第46-1次調査 遺構、遺物包含層出土土器

写真図版 15

- 第46-1次調査 杖穴、ピット出土柱材

- 第46-2次調査 遺構、遺物包含層出土土器

写真図版 16

- 第46-2、3次調査 遺物包含層出土土器

写真図版 17

- 第46-3次調査 S D301出土土器(1)

写真図版 18

- 第46-3次調査 S D301出土土器(2)

写真図版 19

- 第46-3次調査 S D301出土土器(3)

写真図版 20

- 第46-3次調査 S D302、S B201、S X201出土土器

写真図版 21

- 第46-3次調査 S K201、S D201出土土器

写真図版 22

- 第46-3次調査 S P118出土土器

- 第46-3次調査 S D301、S X201出土土器

写真図版 23

- 第50-1次調査 遺物包含層出土土器

写真図版 24

- 第50-1次調査 遺物包含層出土土器

- 第50-1次調査 土器群A、B出土土器(1)

写真図版 25

- 第50-1次調査 上器群A、B出土土器(2)

写真図版 26

- 第50-1次調査 S K101出土土器(1)

写真図版 27

- 第50-1次調査 S K101出土土器(2)

写真図版 28

- 第50-2次調査 遺構、落ちこみ状地形出土土器

写真図版 29

- 第50-2次調査 S K01、S P07出土土器

- 第50-2次調査 東半部出土土器

- 第50-2次調査 調査区出土炉壁、鉱滓

写真図版 30

- 第50-2次調査 落ちこみ状地形出土土器、陶器

- 第50-2次調査 落ちこみ状地形出土土器

写真図版 31

- 第50-2次調査 調査区出土瓦

第1章 はじめに

第1節 遺跡の立地と歴史的環境

上沢遺跡は、六甲山系南麓の神戸市兵庫区・長田区に跨る遺跡である。地形的には、今下山と称される小丘陵の裾部に形成された、北東から南西方面に下がる扇状地に立地し、現況の標高は約15~20mを測る。

六甲山系は、およそ50万年前から隆起が活発となった山系であり、現在も造山活動を続けている。そのため、相対的に南の大阪湾側は沈降し、山地と沖積地の間に急激な高低差が生じている^①。この比高差のゆえに六甲山系南麓では、小河川によって形成された扇状地地形が発達している。上記のような地理的な制約を受けて、神戸市街地は、東西方向に細長く形成されており、南北方向に相当な比高を持つという特徴がある。

また、遺跡の北側には、たびたび氾濫を繰り返して、下流に位置する兵庫の町屋に、被害を与えてきた湊川の流路を、隧道や人工流路の開削で迂回させた、新湊川が流れる。

遺跡周辺の現況は、市街地化が進み、住宅やビル、商業施設の混在する地域となっている。

周辺にはfig. 2のような多くの遺跡が存在する。

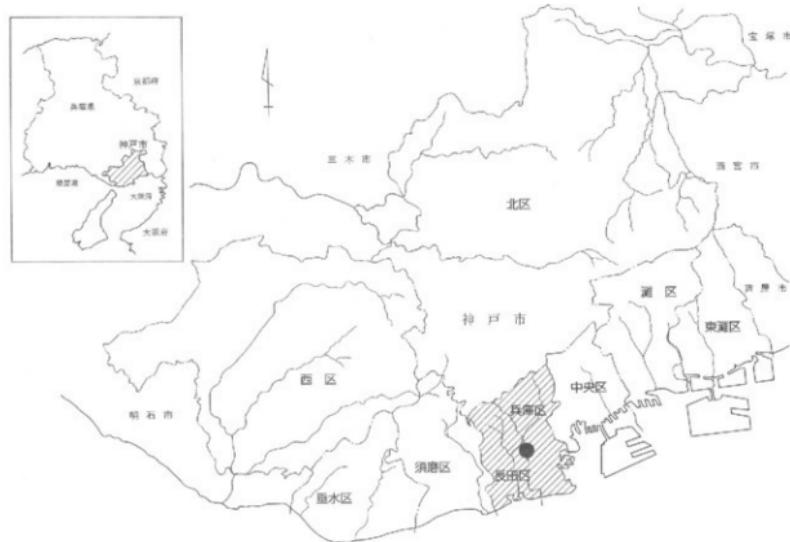


fig. 1 上沢遺跡の位置

註

- ① 藤田和夫「第3章 神戸の地形と地質 第4節 大阪層群と六甲変動」『新修神戸市史 歴史編1・自然・考古』1989 新修神戸市史編集委員会

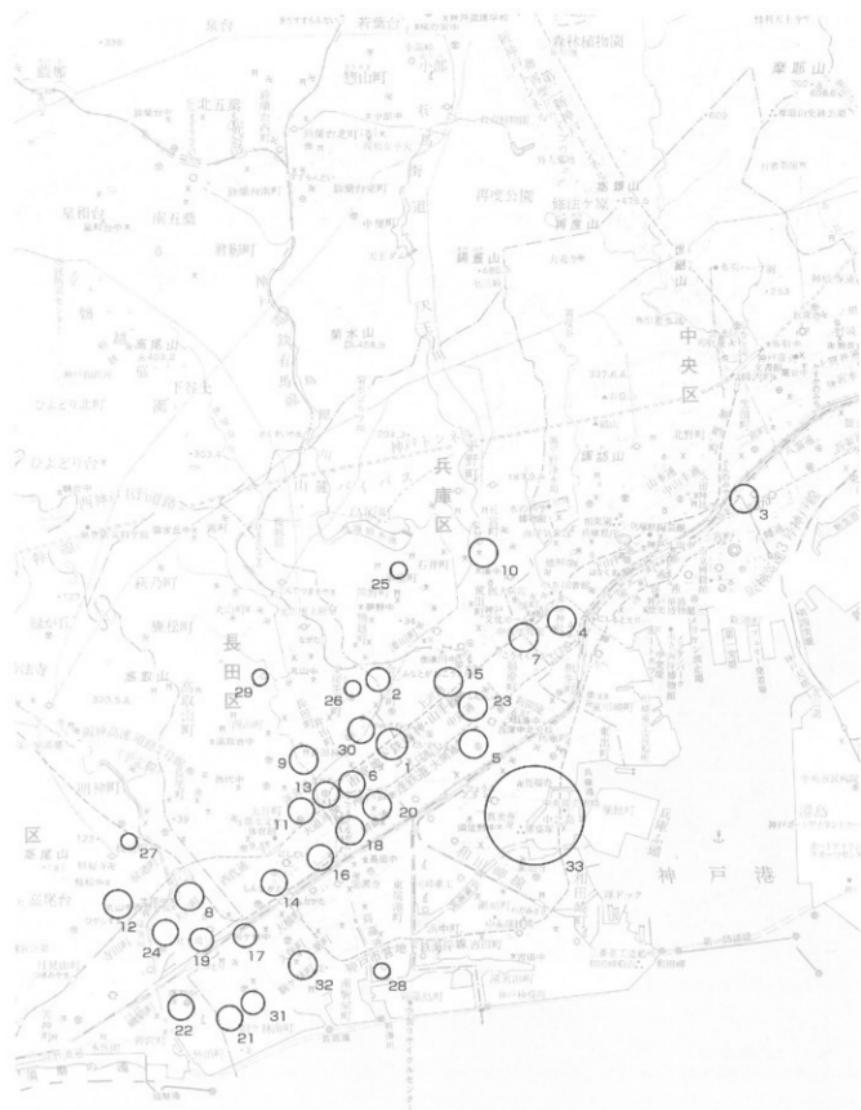


fig. 2 周辺の道路 S=1/50,000
数字は一覧表の番号と一致

大 阪 湾

番号	道 路 名	時 代	主 な 残 墓・遺 物	参考文献番号
1	上沢道路	縄文時代後期～縄文時代	(谷牛・古墳) 略穴式石室・大型造形物、石器 (奈良・平安) 猫立柱建物	1～8
2	金下山道路	旧石器時代	ナツリフ岩石器	9
3	雲井道路	縄文時代中期～弥生時代中期	(剪文空窓) 抱塗型土器・上机・集石遺跡 (奈良中和) 方形周溝墓	10, 11
4	宇治川南道路	縄文時代中期～平安時代後期	(剪文空窓) 抱塗型土器 (平安末期) 上机・陶磁器・石器	12
5	大開道路	縄文時代後期～弥生時代前期	(弥生前期) 四脚馬糞	13
6	五番町道路	縄文時代後期～古墳時代後期	土器・ビット	14, 15
7	楠・荒田町道路	縄文時代後期～扶桑時代	(新文後期) 土坑 (弥生前期) 方形周溝墓・竪穴式 (平安末期) 鉄軸油壺	16～18
8	戎町道路	弥生時代初期～江戸時代	(弥生前期～後期) 水田・竪穴住居	19～21
9	長神社境内道路	弥生時代中期～古墳時代	(弥生後期～古墳時代前期) 窪穴住居・猫立柱建物	22～25
10	桃原道路	弥生時代中期～縄文時代	(平安初期) 陶器遺構	26～28
11	御街道	弥生時代中期～適合時代	(古墳) 窪穴住居・陶土器・石器	29, 30
12	大手町道路	弥生時代中期～聖帝型時代	(弥生後期) 石・瓦片・砾石堆积	31
13	長瀬南道路	弥生時代中期～縄文時代	(弥生中期) 砂丘風景	32
14	水笠道路	弥生時代中期～縄文時代	(弥生中期) 砂・瓦片・砾石堆积	33
15	兵庫本道路	弥生時代中期～縄文時代	(弥生末期) 砂穴式土器	34
16	津森道路	弥生時代後期～平安時代	(弥生後期) 開拓 (古墳後期) 住居・猫立柱建物 (平安) 猫立柱建物	35～38
17	松野道路	弥生時代後期～縄文時代	(弥生後期) 古墳 (古墳後期) 住居・陶立柱建物・埴輪 (平安) 猫立柱建物	39, 40
18	御堂道路	弥生時代中期～縄文時代	(弥生末期) 水田・土器 (飛鳥～平安) 猫立柱建物・埴輪	41～45
19	千葉道路	弥生時代中期～縄文時代	(弥生中期～人骨) 玉置石・竪穴住居	46
20	三番町道路	古墳時代初期～奈良・吉備時代	(古墳) 窪穴住居・猫立柱建物・石・青銅器	47, 48
21	長田本庄村道路	古墳時代初期	土器・ビット	49
22	遷取町道路	古墳時代中期～後期	(古墳後期) 土器痕跡 (古墳後期) 窪穴住居	50
23	津森道路	古墳時代後期	砾石堆积	51
24	大坂町道路	古墳時代～平安時代	(古墳後期) 土器 (奈良・平安) 猫立柱建物・埴輪	52～55
25	蓼原丸山古墳	古墳時代初期	砾石堆积・円錐・竪穴式石室・墨列式埴輪・鍍金製品	56
26	会下山二本松古墳	古墳時代初期	全長35m程度の前方後円墳・砾石式石室・浮彫形石晶品・鍍金製品	57
27	梅原山古墳	古墳時代初期	砾石式石室・内装(瓦紋)・西式型埴輪	58
28	怠念山古墳	古墳時代中期	前方後円墳・砾石式石室	59
29	林山古墓群	古墳時代後期	多数の須恵器片・灰・粘土塊堆积・評定不明	60
30	室内道路	奈良時代	砾石堆积物・塑形台座・白底刷毛瓦	61, 62
31	長田野田道路	奈良時代～平安時代	鬼瓦立柱建物	63
32	二番町道路	奈良時代～飛鳥時代	桶形石器・土器・丹波	64
33	兵庫津道路	奈良時代～江戸時代	(奈良・平安) 窪穴・埴輪 (近世) 亂瓦・水器	65, 66

fig. 3 周辺の道路一覧表

参考文献

1. 上沢道路 1995 「上沢道路発掘調査報告書」神戸市教育委員会
2. 石島一和 2000 「上沢道路発掘調査報告書 第35次調査」神戸市教育委員会
3. 斎木敏也 1999 「上沢道路第3次調査」平成8年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
4. 同 2000 「上沢道路第8・16次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
5. 池田毅他 2000 「上沢道路第9次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
6. 富山寅人 2000 「上沢道路第10次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
7. 橘祐清孝他 2002 「上沢道路第32-1、2次調査」平成11年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
8. 口野博史他 2002 「上沢道路第33次調査」平成11年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
9. 神戸市教育委員会文化財課 1989 「新修神戸市史 歴史編」自然・考古・新修神戸市史編集委員会
10. 安田治他 1994 「豈井跡調査第1次調査」平成3年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
11. 丹治康明他 1991 「豈井跡調査 第1次調査」発掘調査報告書・神戸市教育委員会
12. 丹治康明他 1996 「宇治川南道路」昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
13. 前田住久編 1993 「大開道路発掘調査報告書」神戸市教育委員会
14. 松林宏典 1997 「五番町道路第5次調査」平成6年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
15. 阿部敬生 2002 「五番町道路第7次調査」平成11年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
16. 丸山潔編 1980 「楠・荒田町道路」神戸市教育委員会
17. 丸山潔 1990 「楠・荒田町道路」神戸市教育委員会
18. 黒田恭正他 1995 「楠・荒田町道路第11次調査」平成4年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
19. 山木雅和 1989 「戎町跡第1次調査概報」神戸市教育委員会
20. 同 1998 「戎町跡第19次調査」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会
21. 山口英正 1999 「戎町跡第15次調査」平成8年度神戸市埋蔵文化財年報・神戸市教育委員会

9. 長田神社境内遺跡 22. 黒田恭正編 1990 「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会
 23. 岡本敏行他 1999 「長田神社境内遺跡第7次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 24. 前田佳久他 1999 「長田神社境内遺跡第6次調査」「平成8年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 25. 藤井太郎 2000 「長田神社境内遺跡第10次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 10. 神園遺跡 26. 須藤宏 1997 「祇園遺跡第2次調査」「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 27. 口野博史 1987 「祇園遺跡第3次調査」「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 28. 富山直人 2000 「祇園遺跡 第5次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
 11. 御船遺跡 29. 池田毅 2000 「御船遺跡第2次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 30. 西岡誠司他 2001 「御船遺跡第4次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 12. 大手町遺跡 31. 中谷正編 2003 「大手町遺跡 第1～4・6・7次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
 13. 長田南遺跡 32. 池田毅 2000 「長田南遺跡第1次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 14. 水笠遺跡 33. 關野豊編 2002 「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査
 発掘調査報告書」神戸市教育委員会
 15. 兵庫本松遺跡 34. 松林宏典 2001 「兵庫本松遺跡第1次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 16. 神楽遺跡 35. 菅木宏明 1981 「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
 36. 同 1986 「神楽遺跡」「昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 37. 渡辺伸行他 1987 「神楽遺跡」「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 38. 前田佳久他 1994 「神楽遺跡第7次調査」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 17. 松野遺跡 39. 千種治編 1983 「松野遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会
 40. 11野博史編 2001 「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」神戸市教育委員会
 18. 御蔵遺跡 41. 山口清友編 2000 「神戸市御蔵遺跡第8・9・10次調査報告書」神戸市教育委員会
 42. 安田滋他編 2001 「御蔵遺跡第4・6・14・32次調査報告書」神戸市教育委員会
 43. 安田滋編 2001 「御蔵遺跡第17・38次調査報告書」神戸市教育委員会
 44. 富山直人他編 2003 「御蔵遺跡第5・7・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次
 調査報告書」神戸市教育委員会
 45. 谷正俊編 2003 「御蔵遺跡V 第26・37・45・51次調査」神戸市教育委員会
 19. 千歳遺跡 46. 山口英正 2000 「千歳遺跡第1・2次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 20. 三番町遺跡 47. 黒川恭正 1994 「三番町遺跡第3次調査」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 48. 東音代秀他 2000 「三番町遺跡第8次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 21. 長田本庄村遺跡 49. 岡田幸一他 2000 「長田本庄村遺跡第1次調査」「平成9年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 50. 大平茂編 1991 「鷹取町遺跡」兵庫県教育委員会
 22. 虎取町遺跡 51. 西岡巧次 1989 「虎取町遺跡」「昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 23. 渋川遺跡 52. 森内秀道編 1993 「神戸市須磨区 大田町遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会
 24. 大田町遺跡 53. 吉川雅彦 1994 「大田町遺跡発掘調査報告書」関西文化研究会
 54. 口野博史他 1994 「大田町遺跡第2次調査」「平成3年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 55. 山口英正他 1997 「大田町遺跡第5次調査」「平成6年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 25. 夢野丸山古墳 56. 梅原木治 1925 「神戸市夢野丸山古墳」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第二輯
 26. 会下山二本松古墳 57. 黒田恭正 1987 「会下山二本松古墳」「昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 27. 得能山古墳 58. 梅原木治 1925 「神戸市板宿得能山古墳」「兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告」第二輯
 28. 念仏山古墳 59. 菅谷美宜 1989 「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」「神戸市立博物館研究紀要」第6号
 29. 林山古墓址 60. 神戸市教育委員会文化財課 1989 「新修神戸市史 歴史編！ 自然・考古」新修神戸市史編集委員会
 30. 室内遺跡 61. 萩田香織 1974 「第4章 宗教と文化 1、寺院の建立」「兵庫県史第1巻」兵庫県史編集委員会
 62. 水口富太郎 1998 「室内遺跡」「平成9年度年報」兵庫県教育委員会
 31. 長田野田遺跡 63. 斎藤保明他 1998 「長田野田遺跡第1次調査」「平成7年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会
 32. 二葉町遺跡 64. 川上厚志編 2001 「二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会
 65. 余良へ平安時代前半の遺構・遺物は平成15年度の神戸市教育委員会の調査によって免見された。
 33. 兵庫津遺跡 66. 内藤俊哉 2001 「兵庫津遺跡第15次調査」「平成10年度神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会

第2節 既往の調査概要

上沢遺跡では、これまで50次にわたる発掘調査を行っており、造構、遺物も縄文時代から中世に至る多種多様なものが発見されている。

1. 遺跡の範囲

これまでの、発掘調査および試掘調査で上沢遺跡の範囲は、およそ東西約500m、南北約350mの範囲に拡がることが明らかになってきた。しかし、遺跡内での調査密度に粗糲の差があり、詳細な遺構の分布状況はまだ明らかとはいえない。また、当遺跡の北西に接して白鳳～平安時代の寺院跡といわれている室内遺跡（伝承では房王寺跡）が存在する。これまでに礎石らしき石材や、瓦、塑像の破片が出土しており、古代寺院址を窺わせる資料は得られているが、伽藍配置等はいまだ明確ではない。

2. 縄文時代

縄文時代後期～晩期と弥生時代前期の土器が流路中から発見され、土坑、ピット等も検出されている。付近に当該時期の集落があるようであるが、現在のところ確認されていない。

3. 弥生時代

弥生時代前期の土坑、ピット、河道が確認されている。中期・後期の堅穴住居址や水田址、後期後半～古墳時代初頭の堅穴住居址も発見されている。当該時期のなかでは、後期後半から古墳時代初頭（庄内式併行期）の造構、遺物が多いようである。

4. 古墳時代

古墳時代初頭（庄内式併行期）から古墳時代前期（布留式併行期）の堅穴住居址や、掘立柱建物址が発見されている。また、中期から後期（5世紀後半～6世紀初頭）の住居址も見られる。また、滑石製の模造品（F型玉、勾玉、管玉、有孔円板、剣形、紡錘車、ガラス小玉等）が湿地状の地形で発見され、水辺の祭祀が行われたことが推測される。また、韓式系土器や製塙土器等も発見されている。

5. 飛鳥時代

当該期の造構は、主に遺跡の西半部で確認されている。掘立柱建物や大壁造の可能性がある建物の発見や、湿地状の地形からは鶴の羽口や銅・鉄滓、焼けた粘土塊等の鍛冶関連遺物、漆の詰まった容器の出土といった工房を窺わせる様な資料が見つかっている。

6. 奈良時代～平安時代前期

この時期の造構は、主に遺跡の東半部にあり、多数の掘立柱建物址、土坑、溝などを検出している。また、井籠組の井戸からは、銅鏡や小型銅鏡が出土している。これまでの調査で、墨書き器や円面硯、金属製帶金具、銅製絞具、重圓文軒丸瓦、土馬、鐵の溶解炉片等、官衙や工房的な施設の存在を窺わせる資料が発見されている。

7. 平安時代後期～鎌倉時代

掘立柱建物址、溝、井戸等を確認している。井戸のひとつからは『南光觀世音菩薩』と墨書きされたこけら経または篠塔婆と推定される木札が出土しており、当時の信仰の一端を知る資料を提示した。また、遺跡の西半部では、平安時代前期と後期（10世紀ぐらいか？）の間で、砂礫層が堆積しているところがあり、この段階で規模は不明ながら、洪水に見舞われている可能性がある。しかし、集落そのものは放棄されることなく、存続するようである。

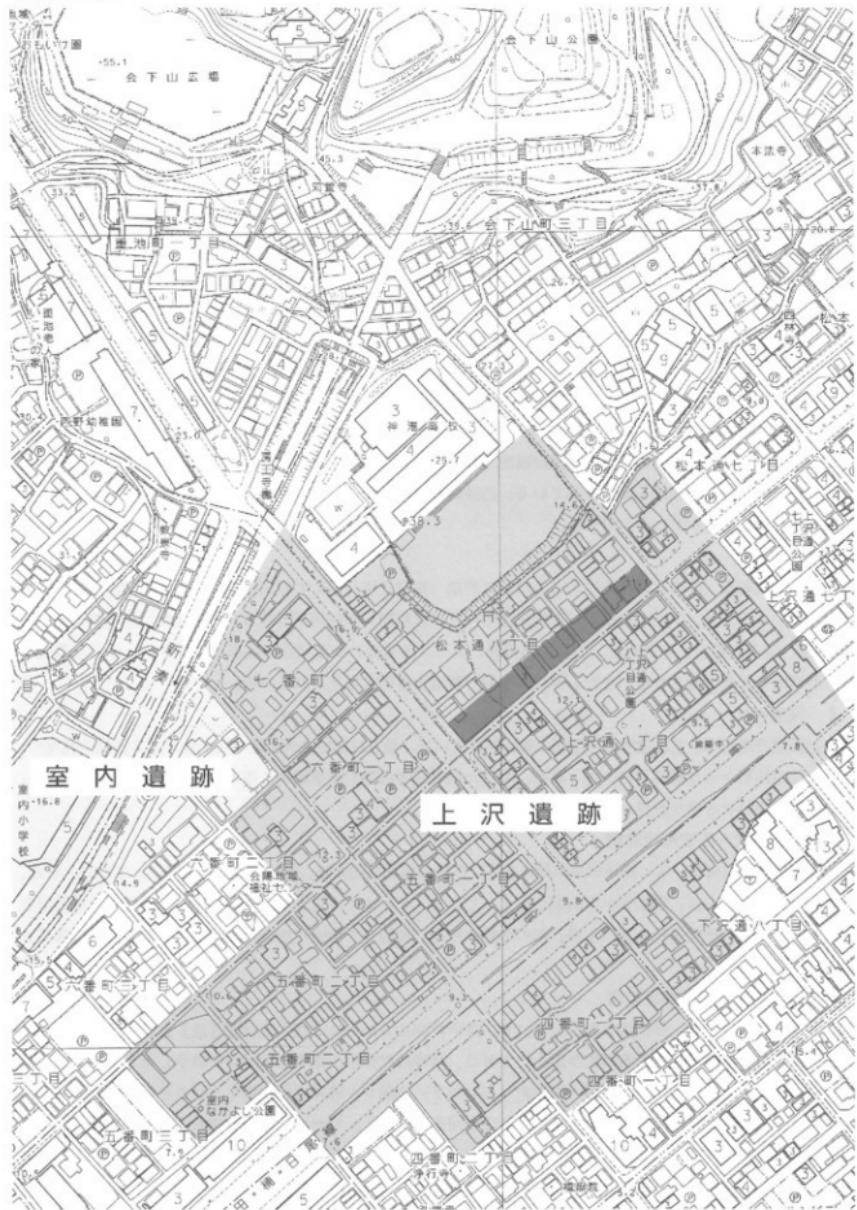


fig. 4 調査位置図 S = 1/3,000 (綺線の濃い部分が調査地)

時代	通情・達物	御賣新次数	調査回数	引　用　文　獻
縄文時代後期～弥生時代初期	陶器、土器	1	「近畿道原住民族遺跡」、1995、神戸市教育委員会	
	陶器、土器	2	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、1999、神戸市教育委員会	
	土器、ビット	4	同上	
弥生時代初期	土器、漆	5	同上	
	土器、ビット、落ち込み	8	同上	
	漆、土器、ビット	16	平成9年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
	土器、漆	21	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2001、神戸市教育委員会	
	土器、ビット	31	平成11年度神戸市埋蔵文化財年報、2002、神戸市教育委員会	
	土器	35	同上	
弥生時代中期～後期	土器、漆	8	平成9年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
	土器	10	同上	
	土器	19	同上	
	土器	24	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2001、神戸市教育委員会	
弥生時代後期～晩	土器、土器、ビット	18	同上	
弥生時代中期	土器、漆	34	平成11年度神戸市埋蔵文化財年報、2002、神戸市教育委員会	
弥生時代後期～晩	水田建	2	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、1999、神戸市教育委員会	
奈良時代前期	陶	3	同上	
	土器	7	同上	
	ビット	13	平成9年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
	土器、ビット	40	同上	
奈良時代後期	堅火灰塗、漆	8	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2001、神戸市教育委員会	
	土器	18	同上	
	土器	24	同上	
平安時代前期～中期	漆、ビット	19	同上	
平安時代後期	漆火灰塗、漆	31	同上	
	土器	9	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
	漆	10	同上	
	陶、土器	14	同上	
古墳時代初期	割合付埴輪	8	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2001、神戸市教育委員会	
	土器、漆、堅火灰塗	36	同上	
	土器、内行文埴輪	20	同上	
	漆	21	同上	
	荷葉笠埴輪、漆、土器	30	同上	
	土器	41	平成11年度神戸市埋蔵文化財年報、2002、神戸市教育委員会	
古墳時代中期	土器	44	同上	
	堅火灰塗	45	同上	
	堅火灰塗	45	同上	
	土器	45	同上	
	土器	49	同上	
古墳時代中期	漆	5	平成11年度神戸市埋蔵文化財年報、2002、神戸市教育委員会	
	堅火灰塗、滑石埴輪、漆式土器	9	同上	
	堅火灰塗	25	同上	
	漆	26	同上	
	堅火灰塗、漆、土器、ビット	36	上記「古墳角錐鏡と報告書」、第35号調査・神戸市教育委員会	
古墳時代中期～後期	土器	16	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
	路路	22	同上	
古墳時代後期	割合付埴輪	14	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
飛鳥時代	土器	5	同上	
	堅火灰塗地、堅火灰、能登、漆器類	38	同上	
	堅火灰塗地、土器、能登、漆器類	41	同上	
奈良時代	堅火灰塗、井戸	2	平成11年度神戸市埋蔵文化財年報、2002、神戸市教育委員会	
奈良～平安時代	堅火灰塗地、堅火灰塗	4	同上	
平安時代	土器	5	同上	
奈良～平安時代	土器、漆、ビット	6	同上	
	土器	6	同上	
	漆	7	同上	
平安時代	堅火灰塗	7	同上	
奈良時代	堅火灰塗地	8	平成9年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
奈良～平安時代	堅火灰塗地、土器、凹面鏡	9	同上	
	堅火灰塗地、漆	10	同上	
	土器、ビット	14	同上	
	土器、漆	14	同上	
	堅火灰塗地瓦	8	同上	
平安時代	井戸	18	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2001、神戸市教育委員会	
	土器	19	同上	
	土器、堅火灰塗	20	同上	
奈良時代	堅火灰塗地、土器、落ち込み	19	同上	
	堅火灰塗地	24	同上	
	堅火灰塗地、土器、堅火灰塗	25	同上	
	堅火灰塗地、土器、堅火灰塗地	30	同上	
平安時代中期	堅火灰塗地、ビット	32	平成11年度神戸市埋蔵文化財年報、2002、神戸市教育委員会	
	漆、ビット、削製器具	36	同上	
平安時代後期	井戸、漆、小型陶器、兩頭	31	同上	
	ビット	34	同上	
奈良～平安時代	堅火灰塗地	42	平成12年度神戸市埋蔵文化財年報、2003、神戸市教育委員会	
平安時代後期	ビット、漆	3	平成15年度神戸市埋蔵文化財年報、1999、神戸市教育委員会	
奈良時代～鎌倉時代	ビット、漆	8	平成9年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
	土器、漆	8	同上	
	土器、漆、井戸	8	平成9年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
平安時代後期	ビット、漆	10	同上	
	井戸、堅火灰塗	8	平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、2001、神戸市教育委員会	
鎌倉時代	井戸、堅火灰塗	8	同上	
平安時代後期～鎌倉時代	堅火灰塗地、土器、こびり繩	19	同上	
鎌倉時代	堅火灰塗地	20	同上	
平安時代末～鎌倉時代	堅火灰塗地、土器	23	同上	
鎌倉時代	土器	25	同上	
	堅火灰塗地	35	同上	
	堅火灰塗地	37	同上	
平安時代末	土器、堅火灰塗	39	平成12年度神戸市埋蔵文化財年報、2003、神戸市教育委員会	
	堅火灰塗地	50	同上	
	堅火灰塗	43	平成12年度神戸市埋蔵文化財年報、2003、神戸市教育委員会	
鎌倉時代	堅火灰塗地	43	平成13年度神戸市埋蔵文化財年報、2004、神戸市教育委員会	
中世	堅火灰塗地、土器、堅火灰塗	10	平成19年度神戸市埋蔵文化財年報、2000、神戸市教育委員会	
	ビット、土器	11	同上	
中世後期	土器、竹	12	同上	
中世	堅火灰塗地	12	同上	
	堅火灰塗	16	同上	
	堅火灰塗	16	同上	
	土器、ビット	22	同上	
	土器	23	同上	
	土器、漆、井戸	30	同上	

Fig. 5. 各時代の主な遺構・遺物一覧表

第3節 調査にいたる経過

1. 遺跡の発見

上沢遺跡の調査は、平成元年3月に開始された都市計画道路房王寺線の拡幅事業に伴う発掘調査（第1次調査）が端緒となった。この調査では、数条の流路、土坑、溝が検出され、その堆積土内から突堤文土器を中心とした縄文時代後期～晩期の土器、弥生時代前期・後期の土器群が出土した。また、落ち込み状の遺構や遺物包含層からは、古墳時代後期、平安時代後期～末期の土器が発見され、当遺跡が、各時代にわたる継続的な集落であることを窺わせる資料を得た。

2. 阪神淡路大震災と復興事業に伴う発掘調査

平成7年1月17日未明に発生した阪神淡路大震災は、六甲山南麓を中心とした神戸市街地に甚大な被害を与えた。上沢遺跡の所在する兵庫・長田区北半部一帯もその例外ではなく、家屋の倒壊や、延焼火災により多くの市民の方が亡くなり、あるいは負傷し、家を失った。

神戸市は、震災からの早期復興と、災害に安全で快適な街づくりを進めることを目指し、上沢地区周辺の区画整理事業を計画した。その一環として、遺跡の南側を貫く、山手幹線の拡幅工事が行われる事となり、平成8年より、調査が行われた。その結果、弥生時代～古墳時代の竪穴住居址、大壁造りの建物、奈良時代～平安時代の掘立柱建物群、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物、井戸等多くの遺構、遺物が発見された。一連の調査によって、当遺跡が、弥生時代後期以降中世までの拠点的な集落であることが明確となった。

また、震災復興による家屋の建て替え、新築工事に先立つての小規模な調査や、区画整理に並行して行われた公園整備に伴う事前調査等によって、遺跡の範囲や状況が徐々に明らかになりつつある。

なお、発掘調査については調査面積が膨大で、しかも迅速な調査が要求されたため、神戸市教育委員会の文化財担当職員だけでは対応することができず、文化庁の働きかけで、兵庫県、全国の都道府県、政令指定都市からの職員の応援を得て、これに応ずることが可能となったことを、付記しておきたい。

3. 松本線の新設に伴う発掘調査

区画整理事業の進捗と並行して、上沢地区を先述の山手幹線と平行に走る道路建設（松本線）が進められた。この道路は既存の道路を拡幅する様に計画された。この拡幅事業に伴う発掘調査は、平成12年度より既存建物の撤去作業の進捗状況に応じながら、その都度実施され、14年度に現地調査が完了した。



fig. 6 調査区配図

第4節 調査の実施状況

1. 調査の方法

現地での調査は、平成12年度～14年度の3年間にわたって実施した。また、区画整理の進行状況に応じて調査が行われたため、調査地が細分化された。そのため、次数毎の調査地点の位置、面積は一定ではない。

また、調査地毎に国土地理院第V系に基づく、基準点測量を実施し、周辺の調査との位置関係の整合性をとった。各調査は、同一年度毎に同じ次数を用い、地点毎に枝番を付した。

なお、神戸市では平成13年度より、新しい規定による次数付与の方式を採用したため、平成12年度の第38次調査は、遺物の註記、図面、写真については、旧次数（第37次調査）で収載している。また、この調査の概要は「平成12年度神戸市埋蔵文化財年報」に掲載されている。

調査年度	新次数	旧次数	東西面積	遺構面数	伝統面積	調査期間	調査担当者	備考
平成12年度	38-1次	37-1次	162m ²	3面	480m ²	20000125～20000905	高山正人	遺物註記・記録紙は37次で記入
"	38-2次	37-2次	126m ²	1面	126m ²	20000613～20000714	"	遺物註記・記録紙は37-2次で記入
"	38-3次	37-3次	110m ²	1面	110m ²	20010109～20010123	"	遺物註記・記録紙は37-3次で記入
平成13年度	46-1次	同上	201m ²	2面	406m ²	20010914～20011026	"	
"	46-2次	同上	56m ²	1面	56m ²	20011023～20011112	"	
"	46-3次	同上	100m ²	4面	400m ²	20011113～20020115	"	
平成14年度	50-1次	同上	80m ²	3面	240m ²	20021009～20021120	谷正俊、阿部功	
"	50-2次	同上	290m ²	1面	290m ²	20021015～20021026	"	
合計				1,128m ²	2,116m ²			

fig. 7 上沢遺跡（松本線）調査次数一覧表

2. 基本層序について

調査範囲が東西に細長く、複数の年度にわたって細分化された調査であること。また、微高地や地表下に埋没した小規模な谷地状地形（湿地状の地形を含む）、小河川を横断した状態で調査していることから、堆積層の状況は非常に複雑であり、各調査における層名が統一できていない。そのため、次章の各節では、それぞれの調査担当者の表記方法に基づき記載する。

また、ここでは、微高地の標準的な層序と層名の概略を以下に記すが、この付近が近代以降、宅地として利用されていた関係上、建物基礎等によって、遺物包含層の深さまで、著しく損壊されている場合が多く、各層が完存している方が、むしろ少ないと言える。

- ① 表土・整地土層
 - ② 灰色～黒灰色系砂質土（近代耕作土）
 - ③ 黄褐色系砂質土（床土、旧耕作土）
 - ④ 灰色系砂質土（中世耕作土）
 - ⑤ （黒・暗）褐色系砂質土～シルト（弥生時代末～鎌倉時代の遺物包含層）
 - ⑥ 黄色～黒灰色系極細砂～細砂（シルト）
 - ⑦ 部分的には、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物を含む流路（青灰色細砂～粗砂層）が確認される。
- 押し並べて、①～⑤層までは、約1m前後、⑦層までは2m前後の深さがある。

3. 遺構分布

現況の地形を観ると、北側の丘下山から派生する丘陵末端に、遺跡は位置する。遺跡の中心部が一番高く、東西方向に徐々に下がる状況を呈するが、実際に発掘調査を行うと、埋没した小規模な谷地形や小河川がいくつも確認され、「上沢」という地名のとおり、水との関わりが深い土地柄である事が明らかとなる。

遺構の分布について概観すると、概ね、縄文時代晩期～弥生時代前期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代前期～後期、飛鳥時代、奈良～平安時代前期、平安時代後期～鎌倉時代の時期に区分され、それぞれの時期において中心となる居住域が少しずつ、移動していることが分かる。

第5節 調査体制

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導のもと、以下の組織で実施された。

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当（平成12～15年度）

榎上重光 前神戸女子短期大学教授

T.柴善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長（平成12～14年度）

大阪府立狭山池博物館館長（平成13～15年度）

和田晴舟 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度
調査の内容	現地発掘調査	同左	同左	遺物整理・報告書作成
教育長	木村良一	同左	西川和機	同左
社会教育部長	水田裕次	岩畔法夫	同左	高橋英比古
社会教育部参事				桑原泰豈（文化財課長事務取扱）
文化財課長	大藤俊一	桑原泰豈	同左	
社会教育部主幹	奥田哲通	同左（～8月）	同左	
同	波辺伸行	同左	同左	同左
同		宮本部雄（1月～）	同左	同左
埋蔵文化財調査係長	丹治康明	同左	同左	同左
文化財課主査	宮本部雄	同左（～12月）		
同	丸山潔・資本宏明	同左	同左	同左
同		千種浩	同左	同左
事務担当学芸員	山口英正	資木巖	内藤俊哉	同左
遺物整理担当学芸員	谷正俊	黒川恭正	開野豈	西岡誠司
保存処理担当	千種浩・中村大介	中村大介	同左	同左
調査・整理担当学芸員			谷正俊・阿部功	谷正俊・中辻さやか

神戸市体育協会	平成12年度	平成13年度
会長	笠山幸俊	同左
副会長	坂本昌男（守齋理事事務取扱）	同左（会長職務代行）
同	木村良一・山田隆・家治川豊	同左
相談役	加茂川守	同左
常務理事	静岡圭一	鹿井昭武
参考事務長	財田美信	同左
総務課長	前田豊晴	同左
事業係長	潮田占則	
総務係長		松田保
事業課主査	丸山潔・資本宏明	
総務課主査		丸山潔・菅本宏明
事務担当学芸員	資木巖	川上厚志
調査担当学芸員	嵐山直人	同左

fig. 8 調査体制一覧表

第2章 発掘調査の成果

第1節 第38-1次調査

1. 調査の概要

平成12年度の調査は、松本線の拡幅工事の予定地内の西半部3ヵ所について調査を行った。調査地付近は、北から南に下がる地形であり、南半では良好な遺物包含層が検出された。

2. 基本層序

上層から、近・現代の盛土層、灰黄色砂質土（近世・近代頃の耕作土）、褐灰色細砂質土（遺物取り上げは、灰褐色砂混シルト；古墳時代後期の土器を含む）、茶灰色シルト（第1遺構面、遺物取り上げは、灰色シルト；弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を含む）、黒褐色粘性砂質土（第2遺構面、遺物取り上げは、黒褐色シルト；弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を含む）淡黄褐色～淡茶褐色砂（第3遺構面）となる。現地表から第3遺構面まではおよそ0.85mの深さがある。

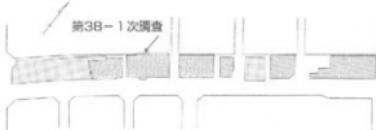


fig. 9 第38-1次調査位置図

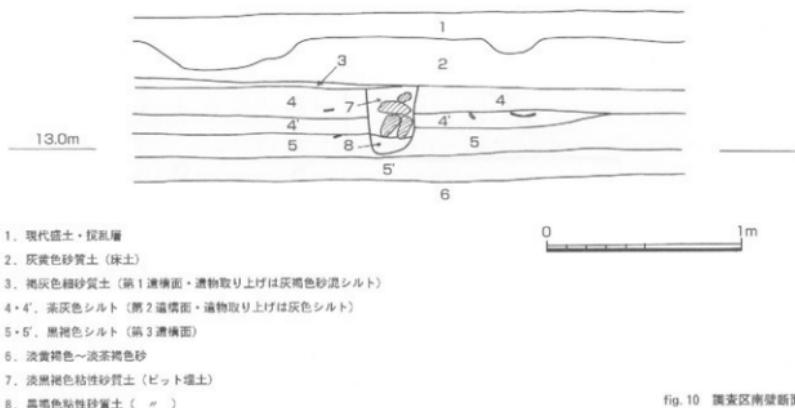


fig. 10 護堀区南壁断面図

3. 検出遺構

(1) 第3遺構面

弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものと考えられる浅い溝を確認した。また、第2遺構面で確認した耕作痕と同様のものを検出した。これについては、本来は第2遺構面で検出できた可能性が高い。このため、図面上で統合を図ったが、上下の層で重複するものとしないものがあり、合致させるのが不可能であること、また明確な時期が判らないこと等から、それぞれの検出面において描画した。

西半では大きな落込みを確認した。これについては、後世の建物の基礎工事により、周辺の地盤と共に遺物包含層が陥没したために形成された可能性があり、積極的に遺構とする証左に欠ける。

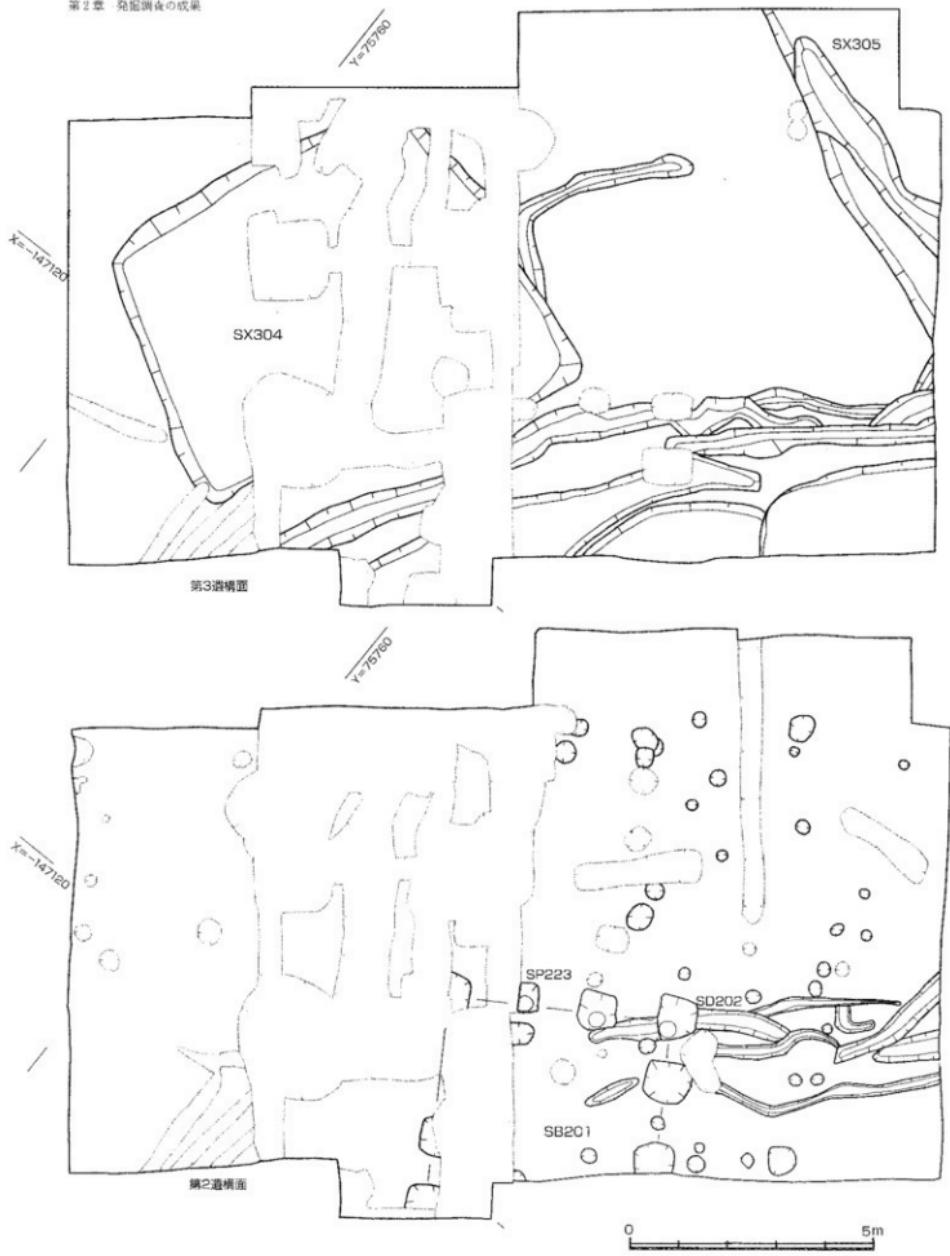


fig. 11 第2、3造横面平面図

(2) 第2遺構面

第2遺構面では、耕作痕とそれを切りこむ柱穴を検出した。

S B201

1辺0.8mの方形の柱堀形を持つ3間×3間以上の建物である。柱間は、桁行1.4m、梁行1.5mを測る。桁行は、もう1間以上伸びる可能性がある。精確な時期は不明であるが、およそ平安時代前半と考えられる。

その他、ピットを多数検出しているが、建物としてはまとまらなかった。南半では、耕作痕を確認している。埋土内からは弥生時代後期末の土器が出土したものもあるが、精確な時期は不明である。

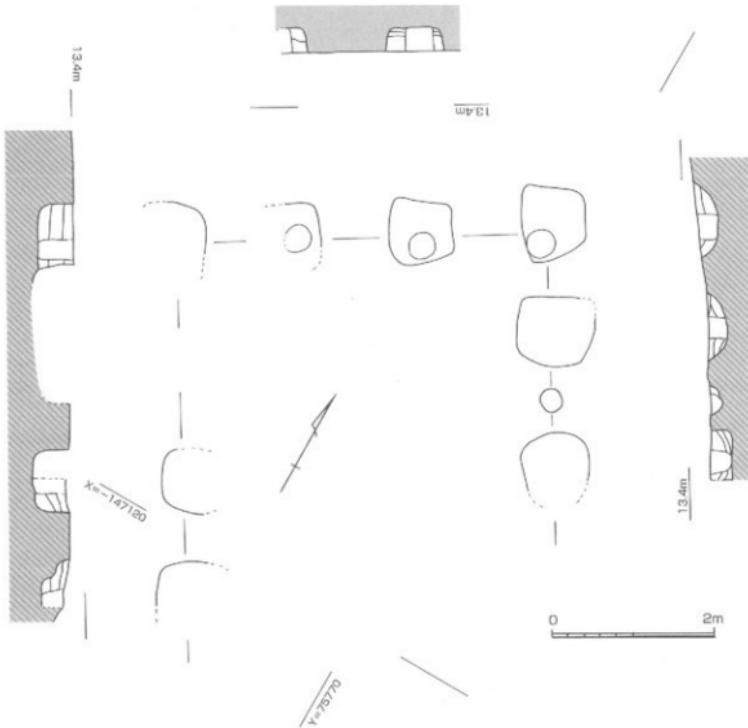


fig. 12 S B201平・断面図

(3) 第1遺構面

平安時代末期～鎌倉時代の遺構面である。ピット多数を検出したが、建物としてはまとまらなかった。ピット内には石を充填するなどの柱の掛け換えの痕跡も確認された。なお、柱には切り合ひが確認されており、少なくとも2時期は存在するようである。時期としては12世紀～13世紀にかけてのものと考えられる。

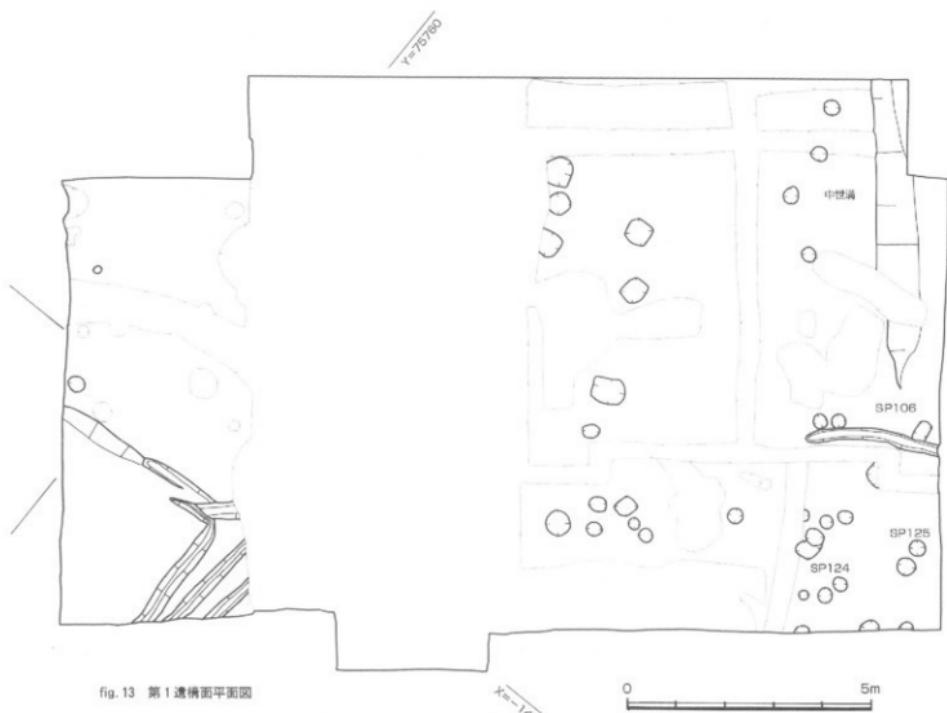


fig. 13 第1遺構面平面図

4. 出土遺物

S X304、305出土土器

S X304は第3遺構面の西半で確認された方形を呈する大きな落ちこみである。堆積土内からは、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土した。3～6は、甕である。底部は、3, 4のように底径の大きいものと5, 6のように小さいものが混在する。また、3, 4は底部から胴部にかけての立ち上がりの角度が急であり、細みの胴部を有するが、それに比べて5, 6の胴部は、楕円形または球形に近い形状を呈する。5の口縁部は緩く屈曲させて外反している。いずれも、頸部から底部外面には右上がりのタタキ目（2～3条／1cm）が施される。また、3, 4の内面は縦方向のハケ目で調整される。5, 6の内面は摩滅が著しいため、観察ができない。

S X305は、第3遺構面の東端で確認された溝状の遺構である。堆積土内からは、1, 2の土器が出土した。1は器台で、口縁端部を屈曲させて、立ち上がらせている。脚部は欠失しているが、裾広がりの脚台部を持つと考えられる。器壁の摩滅が著しいため、調整痕は観察できない。2は、直立した胴部に外反した口縁部を持つ甕で、胴部外面に縦方向のハケ目を持つ。内面は一部に横方向のハケ目が残るが、摩滅が著しいため、充分な観察はできない。口縁端部は、横方向のナデ調整を施す。弥生時代中期に適する土器ではないかと思われるが、他に当該時期の土器は出土していない。

黒褐色シルト出土土器

上面が第2造構面となる遺物包含層で、多くの土器が出土した。

7~11は甕で、7は口縁部に明瞭な端面を持つ、8も同様に小さな窪みがある端面を有する。9,10は、丸みを帯びた外反する端部を持つ。頸部から底部外面には10を除いて、概ね右上がりのタタキ目（2~3条／1cm）が施される。内面は、斜め～縦方向のハケ目で調整される。

8,9は球形に近い胴部で、器高は低い。また、9,11の外底部は、窪みを持つ。

12は高壺で、外反して口縁部に端面のある环部を持つ。内外面共に丁寧なヘラミガキを施す。脚部には四方形の円形透かしを持つ。根部内面にはハケ目を施す。

13は鉢である。外面には右上がりのタタキ目が施される。外底部には、甕11と同様の窪みを持つ。内面は器壁が荒れており、調整痕は明らかでない。

S D 202出土土器

14は、第2造構面の溝状造構から出土した甕で、外反した口縁部に梢円形の胴部を持つ。

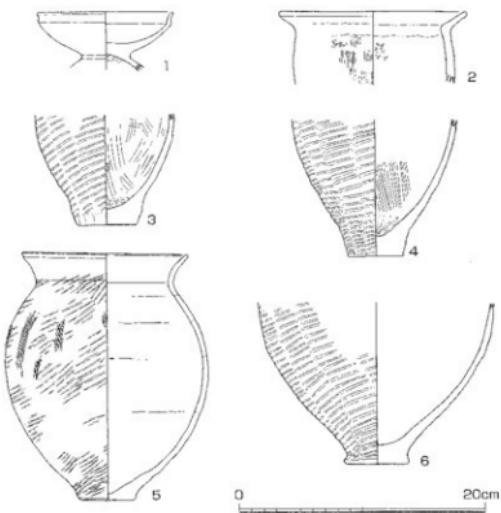


fig. 14 S X304, 305出土土器

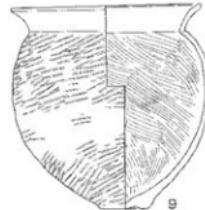
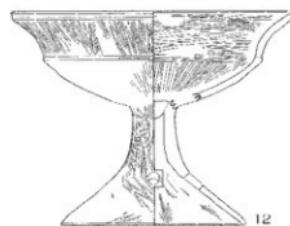
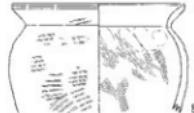
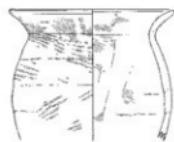
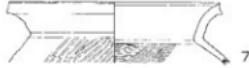


fig. 15 黒褐色シルト出土土器

底径は小さく平底である。胴部には右上がりのタタキ目とハケ目調整の痕跡が残っている。

灰色シルト出土土器

第1造構面を形成する灰色シルト層からは、多くの土器が出土した。15~22は壺で、口縁部が外反するものと直線的なものがあり、16, 17, 20のように端部に面をもつものと丸く収めるもの(18, 21)がある。外形は16を除いて球形に近い形状で、最大径が器高の中ほどに位置する。底部と胴部の境目が明瞭でなく、平底に近い状態のものが多い。また、外底面に広葉樹と思われる木の葉の圧痕を残すものがある。胴部外面は右上がりのタタキ目(2~3条/1cm)が施され、内面には継または斜め上方のハケ目が施される。

23, 24は鉢で、23は焼成前に底部に穿孔を施す。24の外底面には、木の葉の圧痕を残す。外面にはいずれも右上がりのタタキ目が残る。内面には、23は板ナデを、24はハケ目を施す。

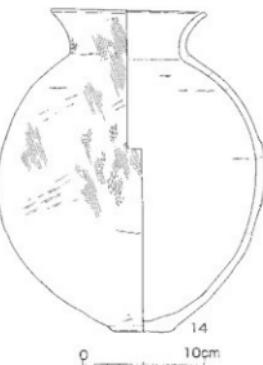


fig. 18 SD 202出土土器

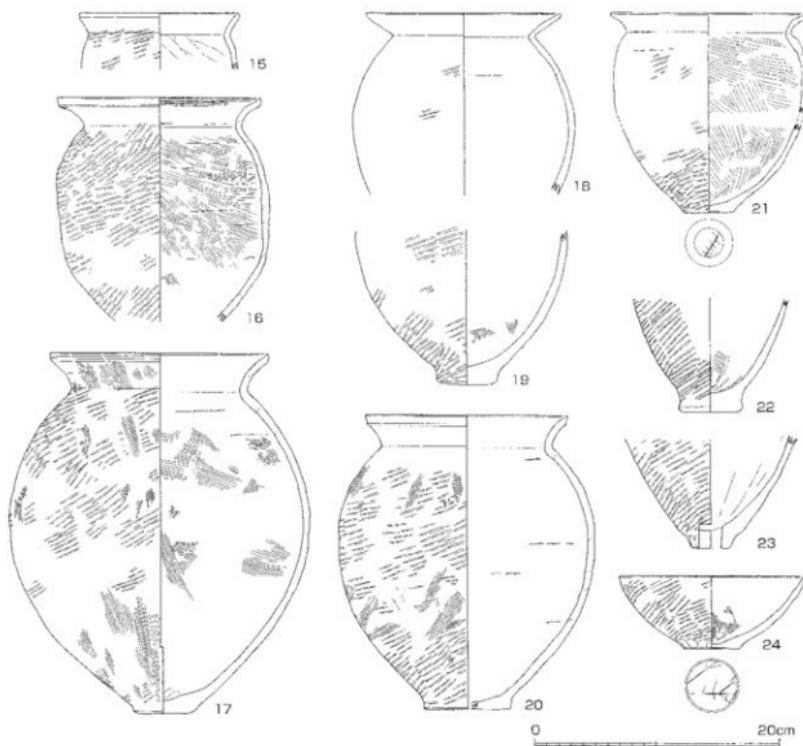


fig. 17 灰色シルト出土土器

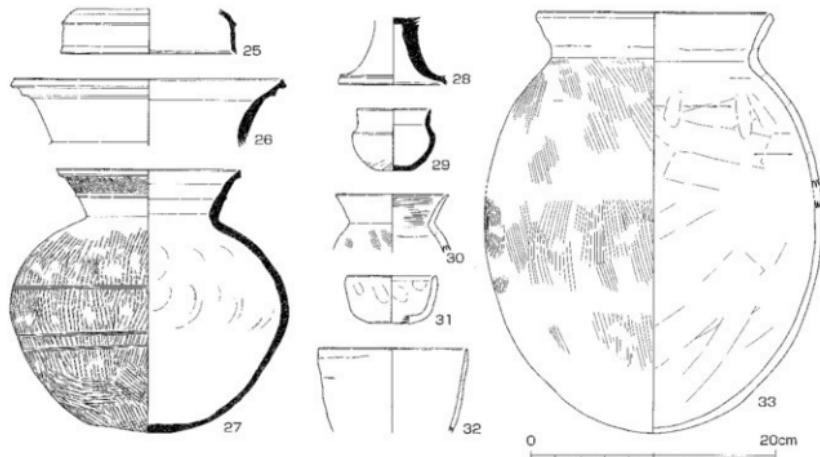


fig. 18 灰褐色砂混シルト出土土器

灰褐色砂混シルト出土土器

灰褐色砂混シルト層からは古墳時代中期の土器が出土した。25~29は須恵器、30~33は土師器である。25は壺蓋で、比較的シャープな口縁端部、稜を持つ。26, 27は壺で、27は口縁部に11条の櫛状工具で波状文を描く。肩部外面にはタタキ目とカキ目が残る。内面には同心円状の工具の痕跡が、ナデ消されて僅かに残る。28は高壺の脚部、29は小型の壺である。30は小型丸底壺、31は手捏ね土器、32は製塙土器で、器壁の内外面共に被熱で赤変している。33は壺で直線的な口縁部に長い洞を持つ。洞部外面はハケ目、内面は板ナデを施す。

ビット、溝出土遺物

34, 35は土師器、36~38は須恵器で、34はS P124、35はS P125出土の小皿、36, 37は中世溝出土の捏鉢、38は壺である。10~13世紀の遺物と判断される。

39は平安時代の掘立柱建物を構成するS P223出土の滑石製臼玉で、古墳時代の遺物が、柱掘削内に混入したものと思われる。

調査区出土土錘

棒状有孔土錘（40・擾乱層出土）、環状土錘（41, 42・灰色シルト出土）が発見された。いずれも土師質である。

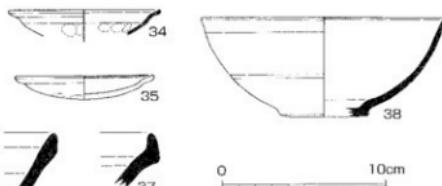


fig. 19 第1道横面ピット、溝出土土器

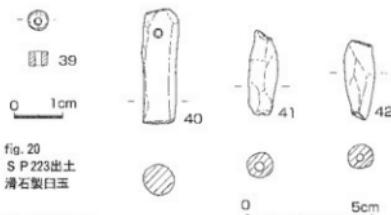
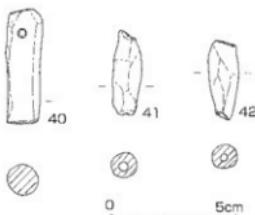
fig. 20
S P223出土
滑石製臼玉

fig. 21 調査区出土土錘

5. 小結

当該調査地では、3面の遺構面と、弥生時代後期末～古墳時代後期にかけての複数の遺物包含層を確認した。奈良～鎌倉時代にかけては、居住域として用いられ、それ以前は耕作痕や溝などから、耕作地、空閑地であったようである。しかしながら、遺物包含層からは弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が、数多く発見されており、南北いずれかの場所に当該時期の生活域が拡がっていた可能性は高い。

また、遺構および遺物包含層から出土した弥生時代末から古墳時代にかけての土器を概観すると、以下の様なことが言える。①底部が明瞭に作られたものから平底のものへという変化、②胴部の球形化という点に着目すると、S X 304⇒黒褐色シルト層・灰色シルト層出土遺物の順にそれらが緩やかに進行しているように見受けられる。しかし、遺物包含層出土の遺物であるため、混入や堆積の時期幅の問題、各資料群とともに甕の出土が主体で、その他の器形が少ない等の点から、編年資料としての分離、抽出は確実にはできない。

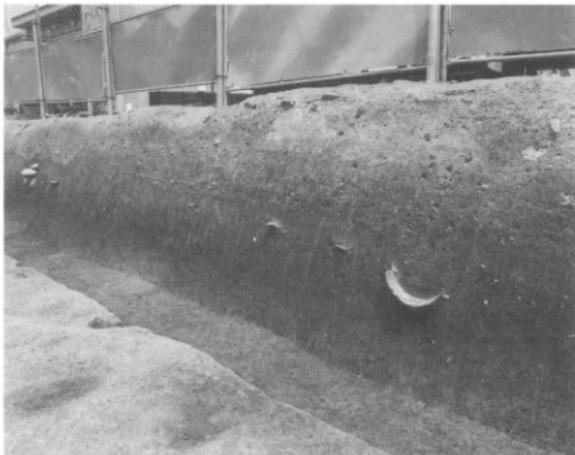


fig. 22
遺物包含層
堆積状況



fig. 23
遺構検出作業

第2節 第38-2次調査

1. 調査の概要

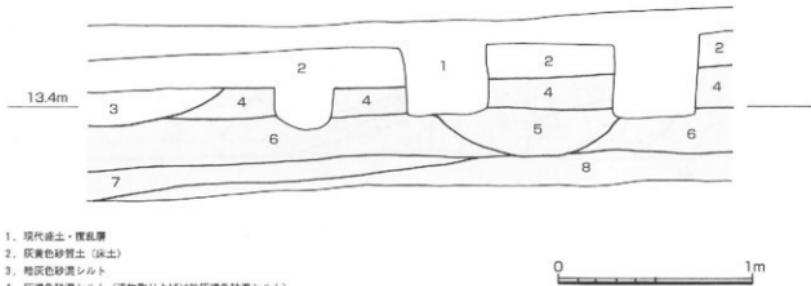
溝とピットを確認した。隣接した第38-1次調査区に比べ遺構は希薄である。ピットはきわめて疎らであり、建物としてのまとまりを持たない。

2. 基本層序

上層から、近・現代の盛土層、灰黄色砂質土（近世・近代頃の耕作土）、灰褐色砂混シルト（古墳時代後期の土器を含む、遺物の取り上げは暗灰褐色砂混シルト）、灰色シルト（弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を含む）、茶褐色シルト混細砂（弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を含む）、黒褐色シルト（弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を含む）、淡黄褐色～淡茶褐色系極細砂～シルトとなる。現地表から淡黄褐色～淡茶褐色系極細砂～シルトまではおよそ0.85mの深さがある。



fig. 24 第38-2次調査位置図



1. 現代盛土・擾乱層
2. 灰黄色砂質土（耕土）
3. 暗灰褐色砂混シルト
4. 灰褐色砂混シルト（遺物取り上げは暗灰褐色砂混シルト）
5. 純灰色砂質
6. 灰色シルト（弥生末～古墳時代初めの土器を含む）
7. 茶褐色シルト混細砂（＊）
8. 黒褐色シルト（＊）

fig. 25 調査区西壁断面図

3. 検出遺構

溝

盛土直下で検出したものである。出土遺物としては弥生土器のみであり、検出面の層位から観て、溝の時期を示しているとは考えられない。規模は、幅2m、深さ0.7mを測る。

また、遺構の検出面直下の遺物包含層（茶褐色シルト混細砂）から、多量の弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土したが、遺構等は検出できなかった。



fig. 26 溝完掘状況（西から）

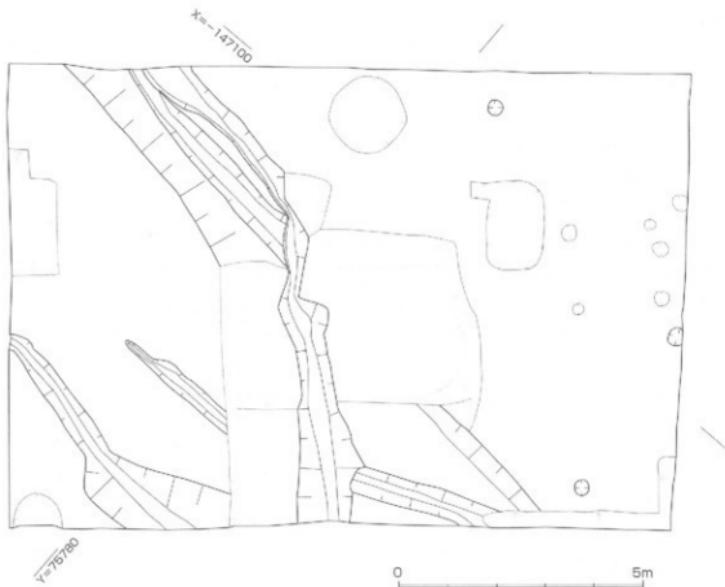


fig. 27 調査区平面図

4. 出土遺物

黒褐色シルト出土土器

黒褐色シルトは3層確認された遺物
包含層の内、最下層のものである。

43～46は壺、47～49は甕、50は鉢である。いずれも破片資料である。

壺は口縁端部に面を有する。43, 44の頸部外面には、縦方向のヘラミガキを施す。43の内面には、横方向のヘラミガキ、45, 46にはハケ目（8～12条／1cm）を施す。甕は外反した口縁部をつまみ上げるもの（47）、面を持つもの（48）がある。いずれも口縁部内面にはハケ目の痕跡が残るが、剥離しているため、明瞭でない。49は甕の底部で、外底面中央部が窪み、木の葉の

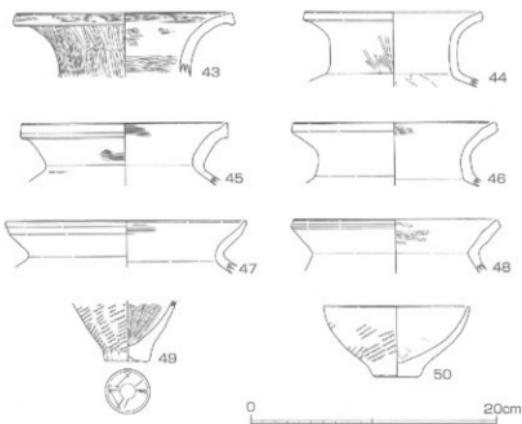


fig. 28 黒褐色シルト出土土器

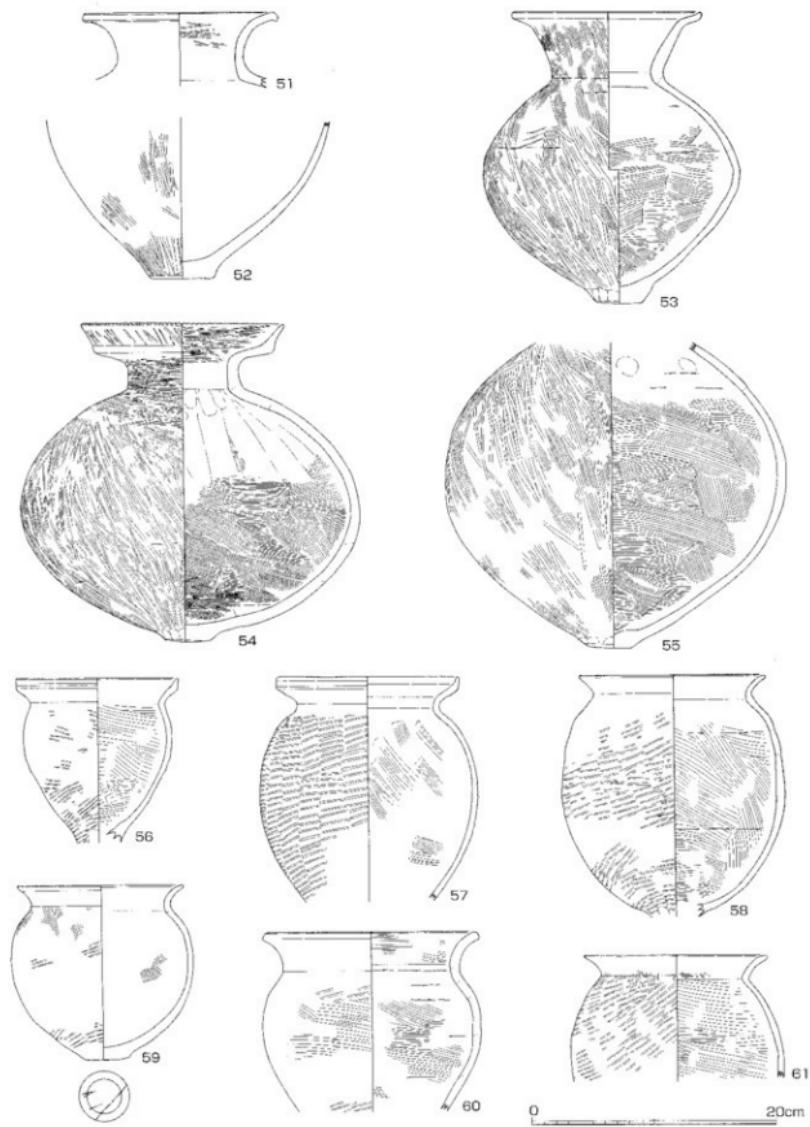


fig. 29 灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器 (1)

葉脈の圧痕が残っている。底部外面には右上がりのタタキ目、内面には横方向のハケ目を施す。

50は、内湾した口縁部と丸く収めた端部を持つ鉢である。外面は右上がりのタタキ目、内面は板ナデの痕跡が残るが摩滅しているため、明らかではない。

灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器

灰色シルト、茶褐色シルト混細砂層は弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を含む遺物包含層である。調査現場では、各層毎に遺物を取り上げたが、土器の接合、復元作業の段階で、両層の土器片が相互に接合することから、一括して報告した。

51～55は壺で、外反させた口縁端部を下げて面を作るもの（51）、上方につまみ上げるもの（53）、二重口縁で端部にキザミ目を持つもの（54）がある。底部外面には指頭圧痕を残すもの（53～55）が多い。52の外面は縦方向のヘラミガキを行う。53の頸部外面はハケ目調整、胴部下半には縦方向のヘラミガキを施す。54の頸部外面は横方向、胴部には縦方向のヘラミガキを施す。53～55の内面はハケ目調整（9～10条／1cm）または板ナデ（54）を行う。51、54の口端部内面は細かいヘラミガキを横方向に行っている。壺の形状として、底部が小さくなり、54のような器高に比して、胴部が横に張るもののが現れている。

56～61は甕で、56、59と57、58、60、61の大小に分類できる。外反させた口縁端部をつまみ上げて面を作るもの（56、57）、丸く収めるもの（58～61）がある。胴部外面には右上がりまたは平行なタタキ目を施し、部分的にナデまたはハケ目で器面を調整する。56の胴部上面については右下がりのタタキ目が見受けられる。内面は斜め方向のハケ目調整を行うものが多い。甕の形状としては、57～61のように胴部が球形または梢円形化しているものが多く、平底のもの（59）が認められる。

62～66は鉢で、63、65は小型、62、64、66は中型の部類になる。口縁部は、外反するもの（62、66）、内湾するもの（63～65）に分けられる。底部外面に窪みをもつもの（63、65）や木の葉の葉脈の痕跡を残すもの（66）がある。64の底部は焼成前に2ヵ所、穿孔されている。62、65の外面はナデ調整を行い、内面は斜め方向のハケ目を行う、62についてはその後、軽くナデ調整を行うことで器面を滑らかにしている。63の外面はタタキ板による整形の後、ナデ調整を行う。内面は板ナデを行う。64の外面はタタキ目を残しながら、その上にハケ目調整を行う。内面はハケ目を施し、底部内面はナデ調整で仕上げる。66の外面は斜め右上がりのタタキ目を残し、胴部上半および口縁部はヘラミガキによる調整を行う。内面は板ナデ調整をしている。

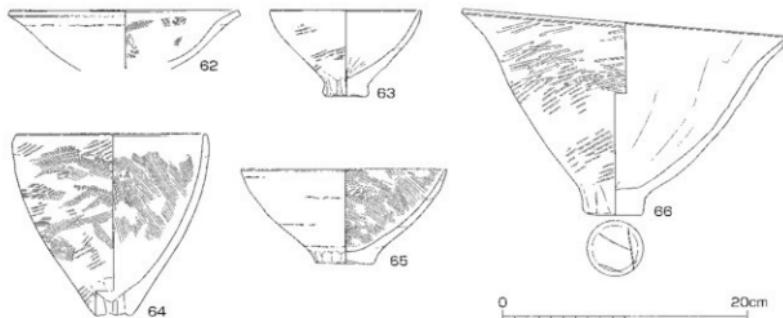


fig. 30 灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器（2）

茶褐色シルト混細砂出土砥石

茶褐色シルト混細砂層から、砂岩質の砥石が1点出土している。長方形を呈し、縦17cm、横13cm、厚さ7cm、重さ3,198g、比重は1.37を測るが、全体の約1/3程度を欠損している。また、残存部分の一部も剥落しており、本来の大きさ、重量は不明である。平らな面に幅4~5cm、残存長約6~10cmにわたる同一方向の擦過痕が、2カ所見出せる。表面が焼けて赤変、黒変している部分が破断面にも認められることから、割れて砥石としての機能が失われた後に、火を受けている。

暗灰褐色砂混シルト出土土器

暗灰褐色砂混シルトは、複数ある遺物包含層の最上層に位置する。この層からは、古墳時代後期の遺物が出土したが、当該時期の明確な造構は確認できなかった。出土遺物は多くはなく、破片資料がほとんどである。

68, 69は須恵器環蓋で、68の直径は15cm、69は12cmを計る。天上部は回転ヘラ削り、稜から口縁部、内面にかけては回転ナデで整形する。68の焼成状態は灰黒色で、堅く緻密な焼き具合なのに対し、69の焼きは甘く、灰白色を呈する。

70, 71は上師器壺で、いずれもほぼ直立する口縁部を持つ。70は小型の壺で、器壁が剥離して調整方法が明らかでない。71は比較的大型の壺で、口縁部内外面に縦方向の粗いヘラミガキを施す。

72~75は十師器高坏で、72はその坏部にあたる。これは、あまり明瞭でない稜を持ち、外反する口縁部を持つ。器壁は摩滅して、調整痕は明瞭でない。73~75は脚部にあたり、外面の軸部は縦方向のナデ、裾部は横方向のナデで調整する。また、75の裾部はハケ目で仕上げる。軸部内面は中空となつており、ヘラ削りで、器壁の厚さを調整し、裾部は横方向のナデで仕上げる。

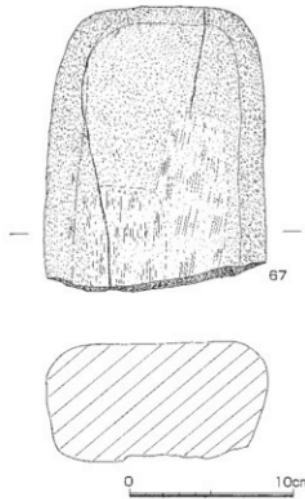


fig. 31 茶褐色シルト混細砂出土砥石

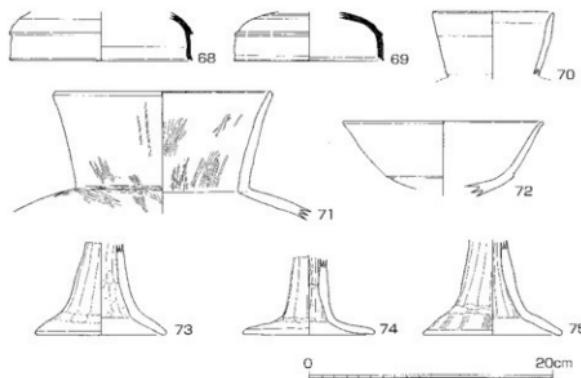


fig. 32 暗灰褐色砂混シルト出土土器

5. 小結

この調査では、溝とピットを確認したのみであった。これらの遺構の精確な時期は不明であるが、検出面の層位から観て、中世以降のものと考えるのが妥当であろう。3層にわたる遺物包含層からは、弥生時代末～古墳時代初頭の土器および古墳時代後期の遺物が出土したが、当該時期の明確な遺構は確認できなかった。

灰色シルト、茶褐色シルト混細砂層から出土した土器の特徴を述べると、壺は底部が小さくなり、器高に比して、胴部が横に張るもののが現れている。甕は、胴部が球形または橢円形化しているものが多く、平底のものが認められ、全体として、弥生時代後期より新しい傾向の上器であると判断される。



fig. 33
調査区西壁
土層堆積状況



fig. 34
機械掘削作業

第3節 第38-3次調査

1. 調査の概要

第38-1次西に隣接する調査区で、この付近では、遺構はきわめて希薄になる。

2. 基本層序

上層から、近・現代の盛土層、灰黄色砂質土（近世・近代頃の耕作土）、灰色砂混シルト、暗灰色砂混シルト、黒灰色シルト混中砂、淡黄褐色～淡茶褐色系極細砂～シルト（遺構検出面）となる。現地表から淡黄褐色～淡茶褐色系極細砂～シルトまでは約0.9mの深さがある。



fig. 35 第38-3次調査位置図

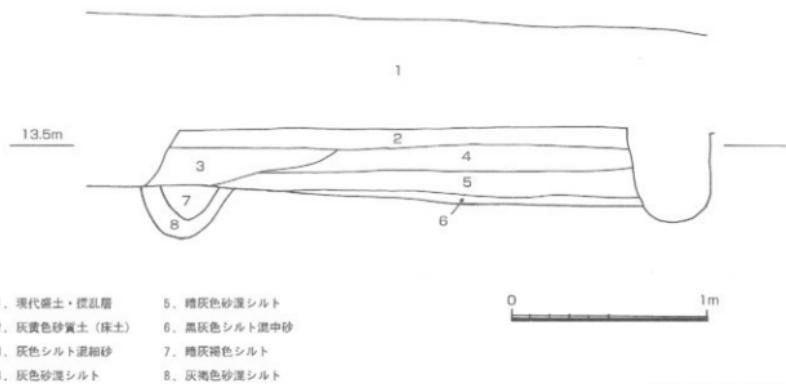


fig. 36 調査区東壁断面図

3. 検出遺構

東端付近で、わずかながら検出したピットも建物としてはまとまらなかった。その他は、ほぼ東西方向に走る耕作痕のみであった。西半は、近世の流路によって、遺構面が削り取られている。



fig. 37 機械掘削作業

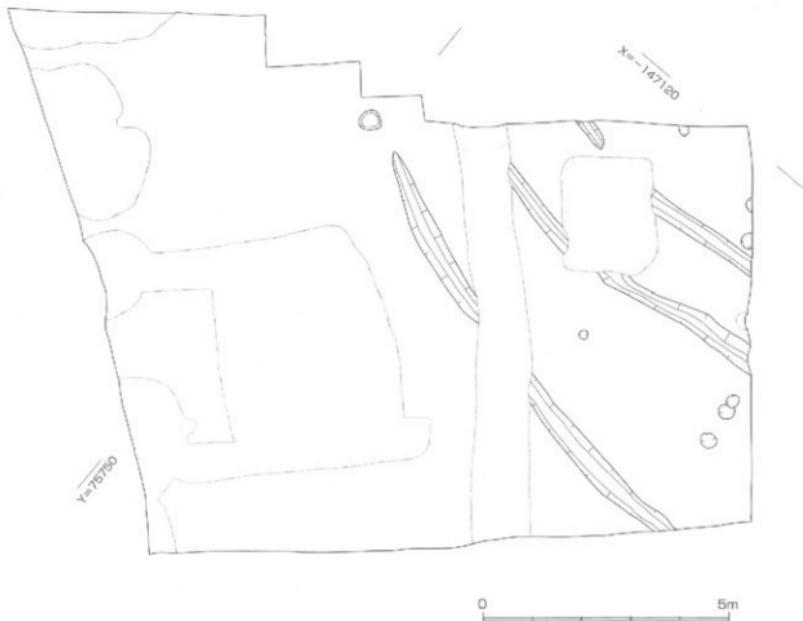


fig. 38 調査区平面図

4. 出土遺物

これまでの調査区と比べて、出土遺物は極めて少なく、図示できる資料は、近世の流路上面から出土した須恵器捏鉢の口縁部2点のみである。76は、直線的な口縁部に、斜めの端面を作る。77は、直線的な胴部に肥厚させた口縁端部を作り出す。いずれも、轆轤による回転ナデで成形する。11世紀～13世紀の束播系窯で作られた製品である。

5. 小結

この調査では、ピットや耕作痕等が確認されたのみで、西半部は近世の流路によって、遺構面が削られていた。また、第38-1、2次調査地のように、弥生時代末～古墳時代後期の遺物包含層は確認することができなかった。このように、当該地は水流の影響を受ける不安定な土地であり、生活・居住空間としてではなく、耕作地という生産空間として利用されていたものと判断される。

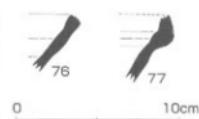


fig. 39 流跡出土土器

第4節 第46-1次調査

1. 調査の概要

前年度に引き続き、松本線道路拡幅工事に伴う発掘調査を行った。第46-1～3次調査区において、飛鳥・奈良時代・古墳時代初頭（庄内式土器併行期）、弥生時代後期末の3面の調査を実施した。

2. 基本層序

松本線の調査地区は、西から東に緩やかに下がる地形である。このあたりは宅地造成等による搅乱が著しく、弥生時代～中世に至る遺構面すべてが遺存している場合は少ない。

基本層序は、近現代の盛土層の下に灰色砂混シルト（奈良時代の遺物包含層）、灰色シルト混中～粗砂（第1遺構面・遺物取り上げは灰色シルト混粗砂、黄灰色粗砂）、暗灰褐色シルト（第2遺構面・遺物取り上げは灰褐色砂混シルト、弥生末～古墳時代初頭の土器含む）、黄灰色系シルト、黒褐色シルト（有機土壤化、弥生土器の細片が出土）、暗灰色中～粗砂（洪水砂層）、青灰色砂～シルト（自然流路堆積土、弥生時代前期の流路か？）となる。

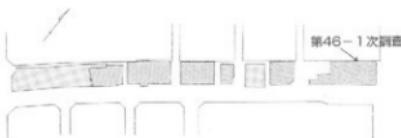


fig. 40 第46-1次調査位置図

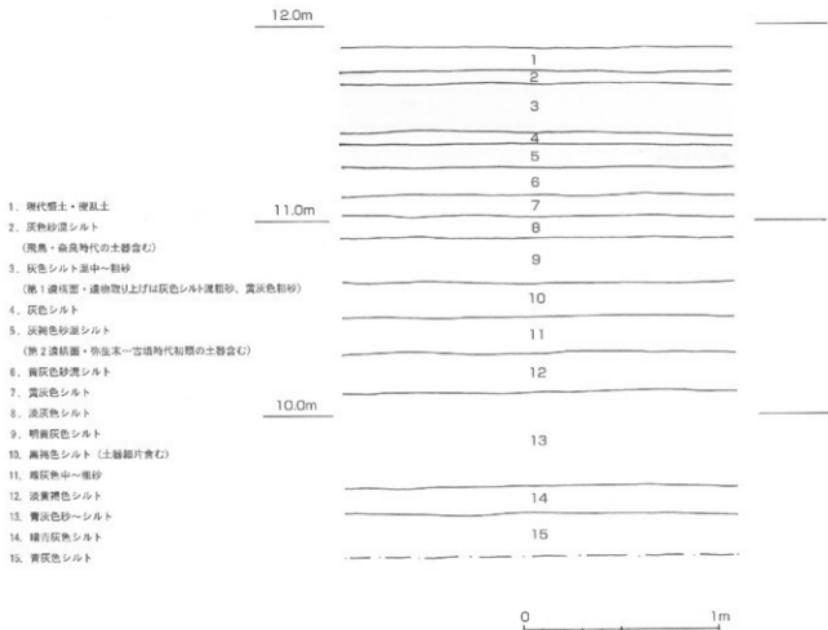


fig. 41 調査区北壁断面模式図

3. 検出遺構

(1) 第2遺構面

弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物を含む暗灰褐色砂混シルト上面で検出した遺構面である。わずかにピット等を確認したが、建物等にまとまるようなものは認められない。土器の出土量に比べ、遺構密度はきわめて、希薄な状態である。また、本来第1遺構面で、検出すべきピットの一部を同遺構面で確認した。

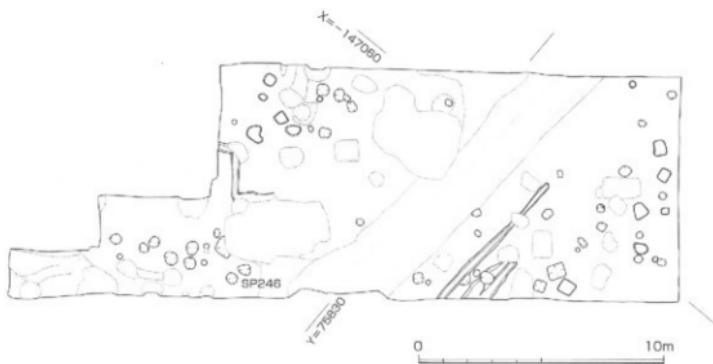


fig. 42 第2遺構面平面図

(2) 第1遺構面

第1遺構面では、柱穴の切り合いがあるものも含めて、計4棟の掘立柱建物を検出した。

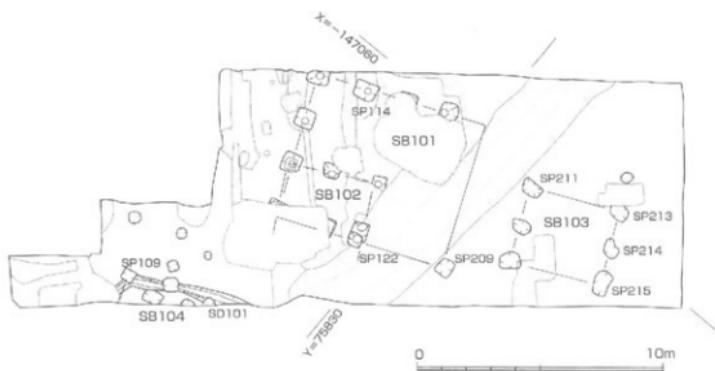


fig. 43 第1遺構面平面図

S B101

S B101は、3間×4間の大型の柱掘形をもつ側柱の掘立柱建物である。柱間距離は、1.75m～2mで、主軸は、N-22°-Eである。いずれの柱穴の柱材も、抜き取られている。柱掘形は、いずれも隅丸の方形で、1辺約0.8mを測る。柱穴の切り合い関係から見て、S B102に先行する。なお、柱掘形の埋土にそれぞれ特徴がみられ、S B101の柱の据え方が、S B102のそれより、総じて丁寧に行っている。

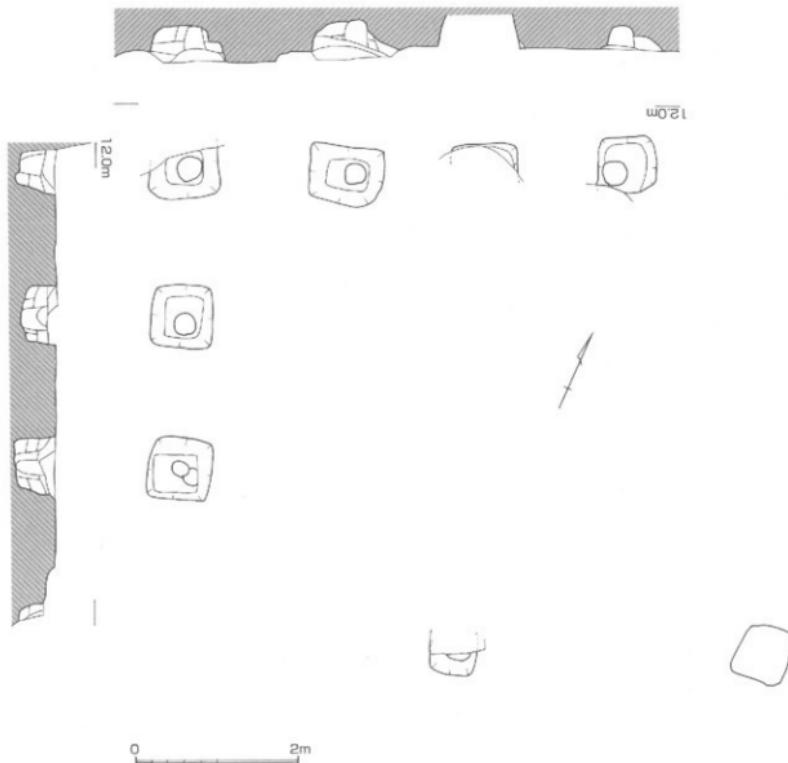


fig. 44 S B101平・断面図

S B102

S B102は、2間×1間以上の柱掘形をもつ側柱の掘立柱建物である。柱間距離は、1.7mで、主軸は、N-25°-Eである。いずれも柱材が抜き取られており、遺構面近くまで達する柱痕跡は、確認できていない。柱掘形は、いずれも隅丸の方形で、1辺約0.6mを測る。S B102の柱の据え方は、柱掘形の埋土の観察から、S B101の柱の据え方を簡略化したものと考えられる。

S B103

S B103は、2間×1間の大型の柱掘形をもつ側柱の掘立柱建物である。柱間距離は、1.6mで、主軸は、N-25°-Eである。建物の平面形は方形を呈しており、柱間の距離は、3.4mを測り、ちょうど2間分の距離と一致する。中間の柱掘形に関しては、慎重に調査を行ったが、確認できなかった。確認した柱掘形すべてにおいて、柱根を確認している。柱掘形は、いずれも隅丸の長方形で、1辺約0.5m×0.7mを測る。S B103の柱の据え方は、柱掘形の埋土の観察から、S B101の柱の据え方を簡略化したものと考えられる。

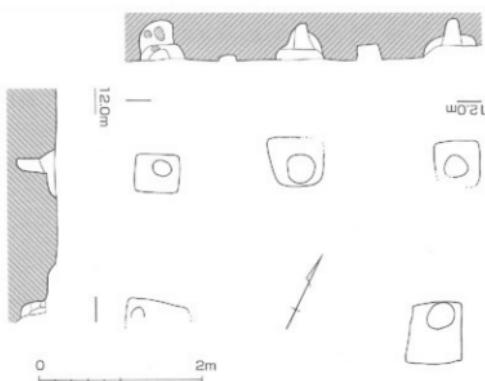


fig. 45 S B102平・断面図

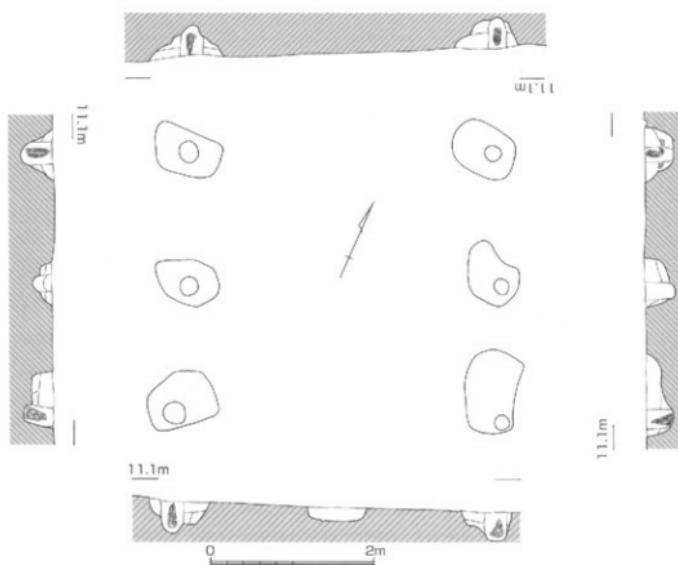


fig. 46 S B103平・断面図

S B104

S B104は、2間以上×1間以上の大型の柱掘形をもつ掘立柱建物である。一部分しか検出できなかったため、建物全体の構造については不明な点が多い。柱間距離は、1.7mで、主軸は、N-25°-Eである。東端の柱掘形を除いて、柱根を持つものは認められず、いずれも柱材が、抜き取られており、遺構面近くまで達する柱痕跡は、確認できない。柱掘形は、いずれも隅丸の方形で、1辺約0.6mを測る。S B104の柱の据え方は、柱掘形の埋土の観察から、S B101の柱の据え方を簡略化したものと考えられる。

4. 出土遺物

灰色シルト混細砂、灰褐色砂混

シルト出土土器

78, 79は壺で、外反させた口縁端部を上につまみ上げるもの（78）、端面をもたせるもの（79）がある。口縁部外面は、ハケ目調整を施す。

82は壺の底部で、外面をヘラミガキで調整する。内面はハケ目調整である。80, 81, 83は甌で、81は外面をハケ目とヘラミガキで調整し、83の底部は痕跡に近く、胴部は球形に近い。外面はタタキ目、内面は剥離のため不明瞭である。

S P246出土土器

84は鉢で、ほぼ直線的な口縁部に外底面を窪ませた底部を持つ。内外面共にハケ目調整を施す。

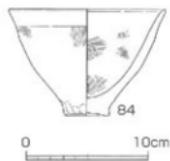


fig. 49 S P246出土土器

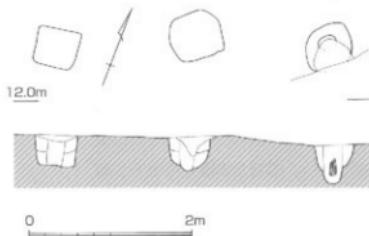


fig. 47 S B104平・断面図

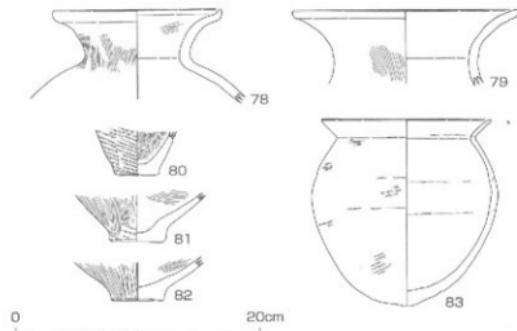


fig. 48 灰色シルト混粗砂、灰褐色砂混シルト出土土器

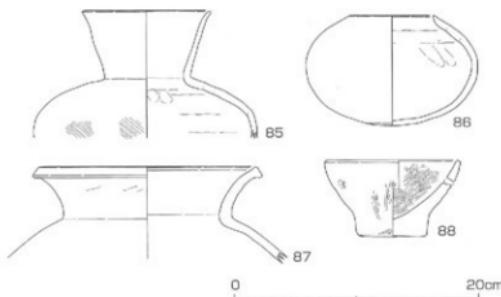


fig. 50 黄灰色粗砂出土土器

黄灰色粗砂出土土器

85は長頸壺、86は無頸壺、87は広口壺で、口縁端部が外反し、胴部外面にはハケ目の痕跡がわずかに残る。86の脇部は梢円形に近く、底部は丸底になっている。87は外側につまみ出した口縁端部を持つ。器壁が剥離しており、調整は明確でない。88は鉢で、やや内湾する口縁部を有する。外面とともにヘラミガキを行う。焼成後に穿孔を受けた個所が2ヶ所残っているが、欠損部にも、穿孔があった可能性がある。

第1遺構面・柱穴・ピット出土土器・柱材

89～92は須恵器である。89、90は環蓋で、89は内面にかえりを有する。90は端部を折り曲げて整形する。91は环身で、貼付け高台を有する。92は甌で、頭部は回転ナデ、底部は回転ヘラ削りを行う。89はS P109、90はS P122、91はS P114、92はS D101出土である。

93～98は柱穴、ピット出土の柱材で、いずれも遺存状態が悪いため、加工痕は判らない。93はS P247出土で、樹種はカヤ、94～98はS B103の柱穴出土で、いずれもコウヤマキを使用している。詳細は、第3章の自然科学分析の項を参照していただきたい。

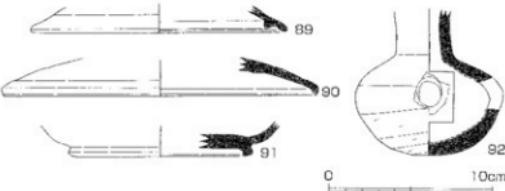


fig. 51 第1遺構面ピット・溝出土土器

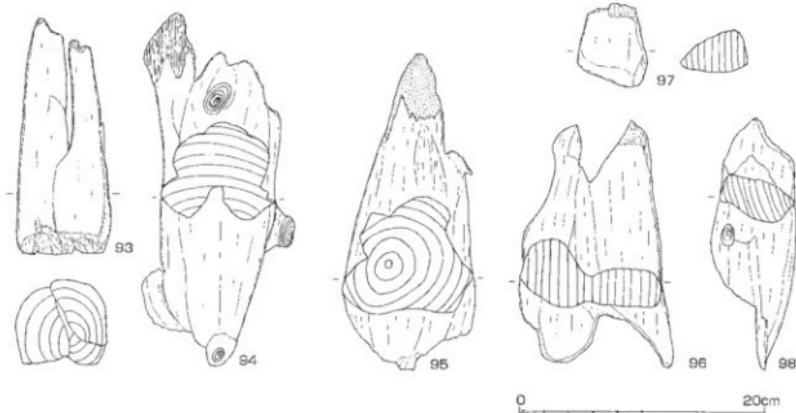


fig. 52 柱穴、ピット出土柱材

5. 小結

第46～1次調査では、奈良時代の掘立柱建物を確認した。建物の時期は切り合い関係から、新旧2時期が考えられる。いずれも8世紀前半である可能性が高い。なお、新しい建物群は、規模・方向性に規格が認められ、柱掘形にも共通性が認められる。寺院または、官衙的な性格の建物群が上沢遺跡内にあるとすれば、今回の調査における新しい建物群がそれに関わる可能性がある。

第5節 第46-2次調査

1. 調査の概要

第38-2次調査地の東側に隣接している。この部分は後世の削平が著しく、北東部では、第1遺構面まで掘削されている部分があった。

2. 基本層序

基本層序は、近現代の盛土層の下に灰色砂混シルト層（奈良時代の遺物包含層）、暗灰褐色砂混シルト層（弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物包含層、遺構検出面）となる。

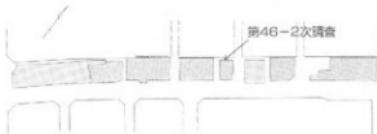


fig. 53 第46-2次調査位置図

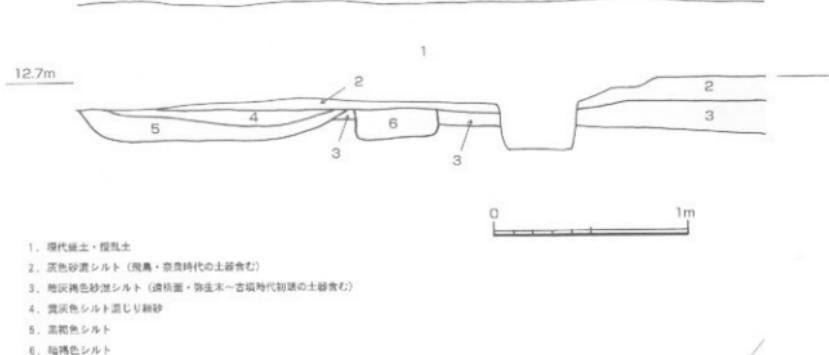


fig. 54 調査区東整断面図

3. 検出遺構

(1) 第2遺構面

SK201

調査区北東端に位置する深さ0.07m、幅1.03mを測る浅い落ち込みである。出土遺物から、弥生時代後期末と考えられる。その他ピットが散在的に検出されている。

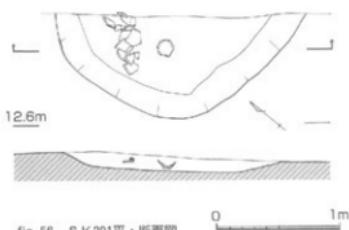


fig. 56 SK201平・断面図



fig. 55 第2遺構面平面図

(2) 第1遺構面

ピット、土坑が検出されたが分布密度は疎である。ピットは、楕円形である。出土遺物は細片であるが、遺構の時期としては、第46—1次調査地で確認された奈良時代の遺構の新旧2時期に対応させると、概ね新しい方の時期に相当すると考えられる。



fig. 58 第1遺構面全景 (北西から)

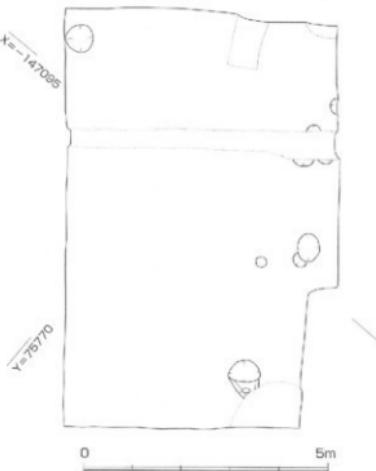


fig. 57 第1遺構面平面図

4. 出土遺物

当調査区では、暗灰褐色砂混シルト層から弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が出土した。また、ピット、土坑から少量の土器が発見された。灰色砂混シルト層からは奈良時代の土器が出土したが小破片であった。

99はS P210出土の鉢である。内面はハケ目を施し、外面はナデ調整と指頭圧痕が施されている。口縁端部は平滑化されておらず、波打っている。

100～102は壺で、100は口縁端部に2条の凹線と二重の円形浮文を施す。101は肩が張った体部を持ち、口縁部を欠失しているので確定ではないが、二重口縁となる可能性が高い。底部は突出している。胴部外面にハケ目の痕跡を残す。102は球形の体部を持ち、底部は非常に小さく、丸底に近い。底部外面は板ナデ、胴部から頸部にかけては丁寧なヘラミガキとハケ目を施す。内面には一部にハケ目の痕跡が残る。

103, 104は甕で、103は内外面共に、ハケ目を施す。布留式土器併行期に降る土器と思われる。104の外面はタタキ目が残る。105, 107は鉢で、105は外反気味の口縁部、平たい底部を持つ。外面にハケ目の痕跡がある。107は球形の胴部と二重の口縁部を持つ大型鉢で、口縁部～頸部内面は横方向のハケ目、胴部には縦方向のハケ目、外面はハケ目調整後、底部と胴部の一部にヘラミガキを施す。106は高環で、裾部に6条の擬凹線と4穴の円形の透孔を持つ。内面にはハケ目を施す。108は壺の口縁部と思われるが、小破片のため、良く判らない。端面にヘラで鋸歯文を刻み、上下に2条の沈線を入れる。109は二重口縁壺と考えられる。端面に波状文を施す。

101, 104, 106, 108は、暗灰褐色砂混シルト層から出土し、100, 109は擾乱清掃時に取り上げをしたが、おそらく、同層からの出土と思われる。102, 103は奈良時代の遺物包含層である灰色砂混シルト層と暗灰褐色砂混シルト層との間に部分的に堆積する灰色砂疊層から出土した。105はS K201出土である。

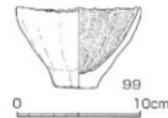


fig. 59 S P210出土土器

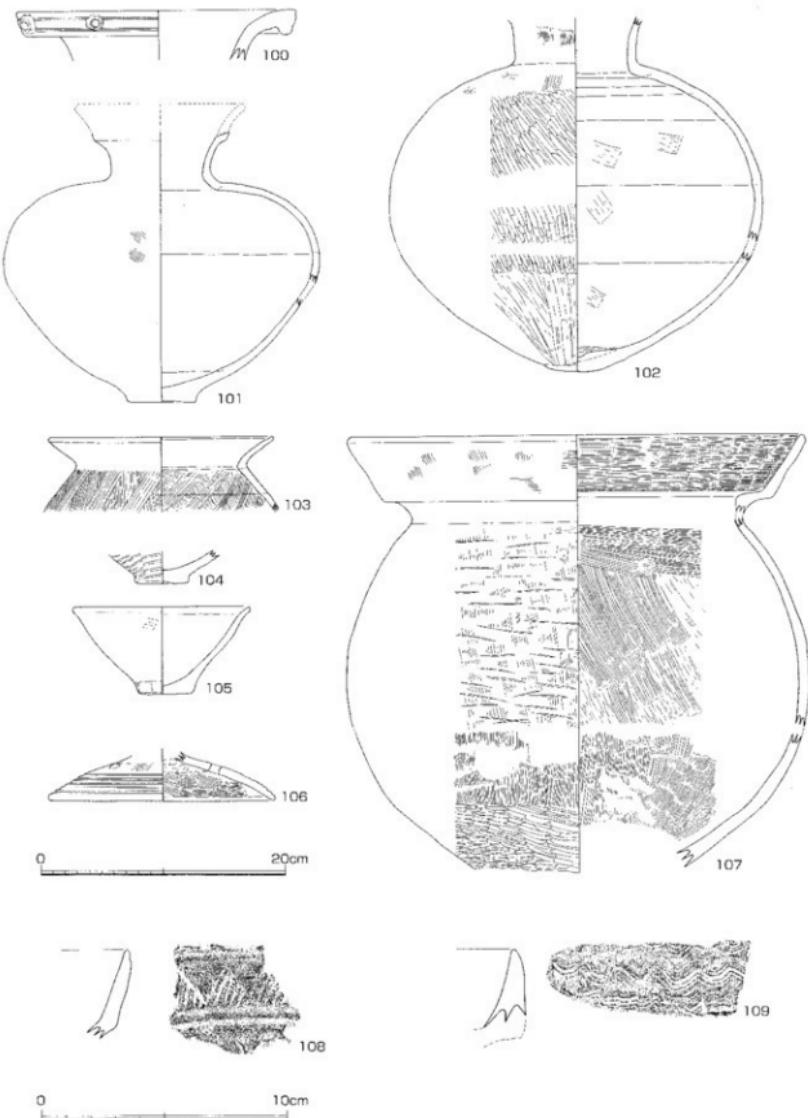


fig. 60 S K201、遺物包含層出土土器

5. 小結

第46-2次調査地は、後世の搅乱が著しく、奈良時代の遺構は一部でしか確認できなかった。遺物包含層からは、弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式土器併行期）の土器が、比較的多く出土した。出土状況を観ると、土器満まり的な状態であったことがある程度想定できる。

これらの土器は、概ね、古墳時代初頭（庄内式土器併行期）の土器が主となっていると判断される。その中には108のように、山陽地方で多用される鋸歯文を持つものがあり、当地方の交流の様子が窺える。



fig. 61
機械振削作業



fig. 62
這標検出作業

第6節 第46-3次調査

1. 調査の概要

調査区は第46-1次調査と第46-2次調査の間に位置する。比較的遺存状態がよく、西半では、中世の包含層を確認した。また、全面で、奈良時代の包含層を確認した。灰色シルト混中～粗砂上面が奈良時代の遺構面である。全部で4面の遺構面を確認した。

2. 基本層序

基本層序は、暗灰色シルト混細砂（中世遺物包含層）、灰色細砂混シルト（奈良時代遺物包含層、第1遺構面）、灰色中～粗砂（古墳時代の洪水砂、この上面が第2遺構面）、黃灰色シルト（弥生時代後期～古墳時代初頭遺物包含層、この上面が第3遺構面）、暗黒褐色シルト（弥生時代後期後半～古墳時代初頭遺物包含層、この上面が第4遺構面）である。

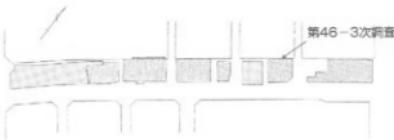


fig. 63 第46-3次調査位置図

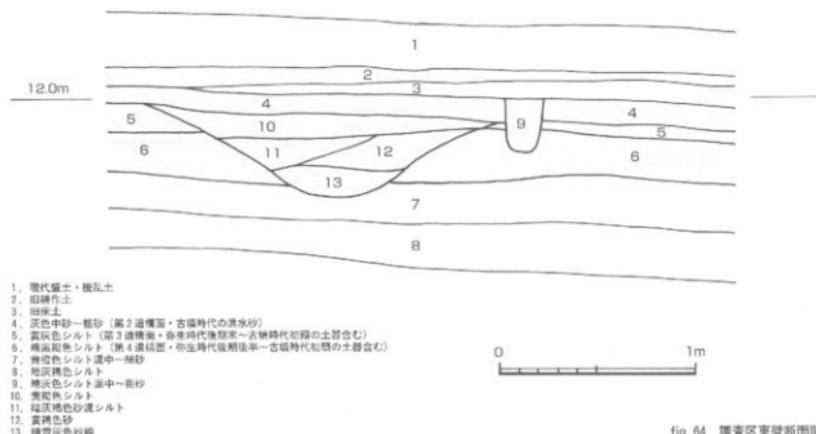


fig. 64 調査区東壁断面図

3. 検出遺構

(1) 第4遺構面

暗黒褐色シルト層の上面で検出した遺構である。

S D301

調査区北半を走る幅1.2m、深さ0.15mを測る溝である。浅い窪み状のもので、土器が多量に出土している。自然流路的な土器泡まりであると考えられる。出土遺物には弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃にかけての土器が含まれている。

S D302

調査区中央を走る幅1.6m、深さ0.18mを測る溝である。浅い窪み状のもので、土器が多量に出土している。自然流路的な土器だまりであると考えられる。出土遺物には弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃にかけての土器が含まれている。

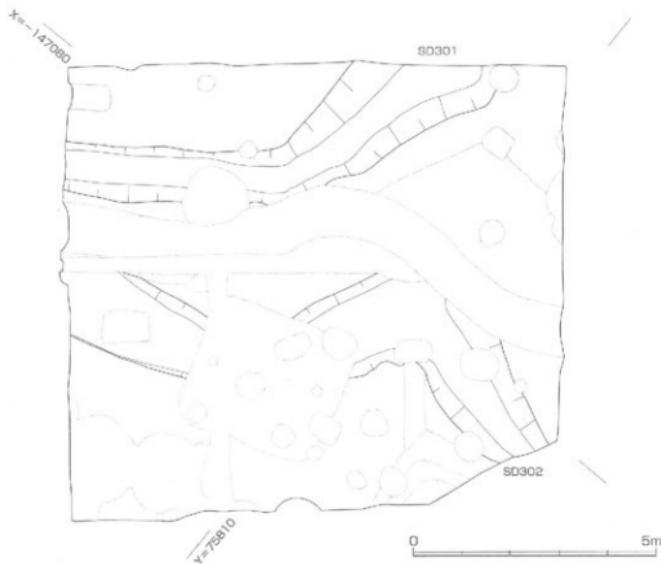


fig. 65 第4発掘面平面図



fig. 66 第3発掘面平面図

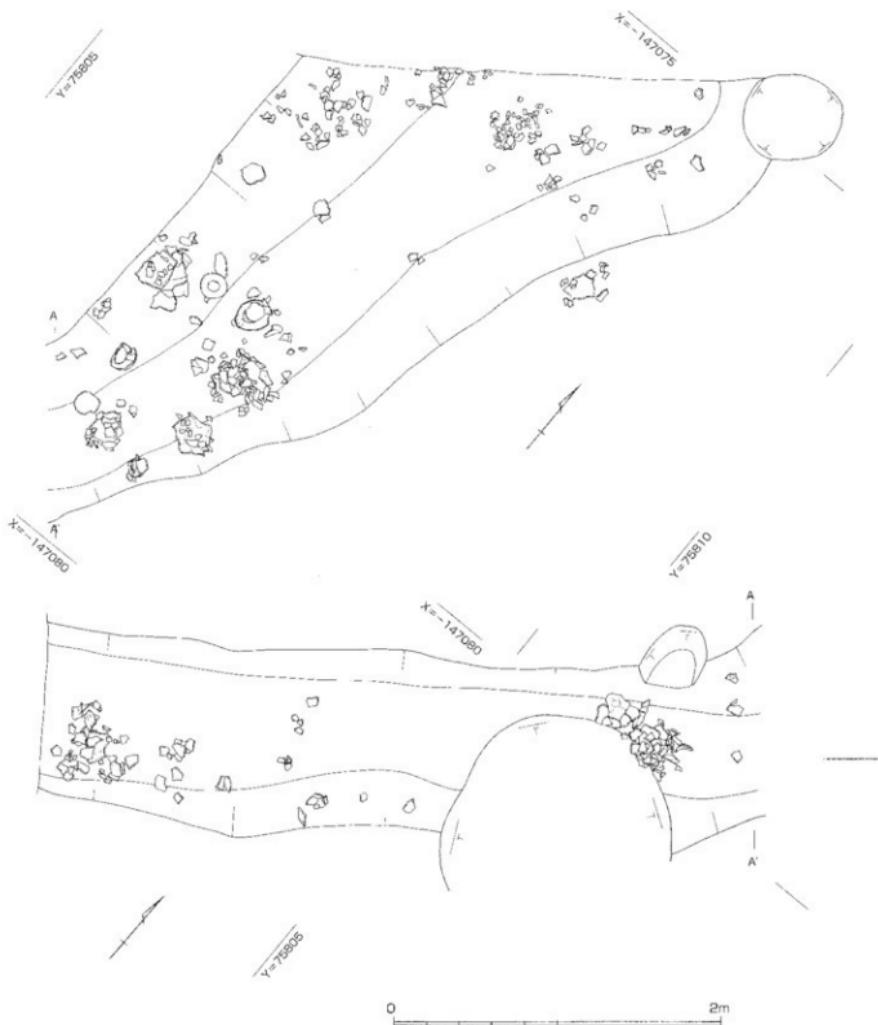


fig. 67 SD301遺物出土状況図

(2) 第3遺構面

黄灰色シルト層の上面で検出した遺構である。上層の灰色中～粗砂は、古墳時代の洪砂であるが、弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての土器を多く含む。これは、周辺の堆積層にふくまれていたものが、水流とともに押し流されてきたものと考えられる。

S B201

調査区西端で検出した一辺約3m、深さ0.2mを測る方形の堅穴住居である。幅0.12m、深さ0.06mを測る周壁溝を持つ。ほとんどが調査区外に延びるため中央穴・柱穴は、不明である。出土遺物から、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃と考えられる。

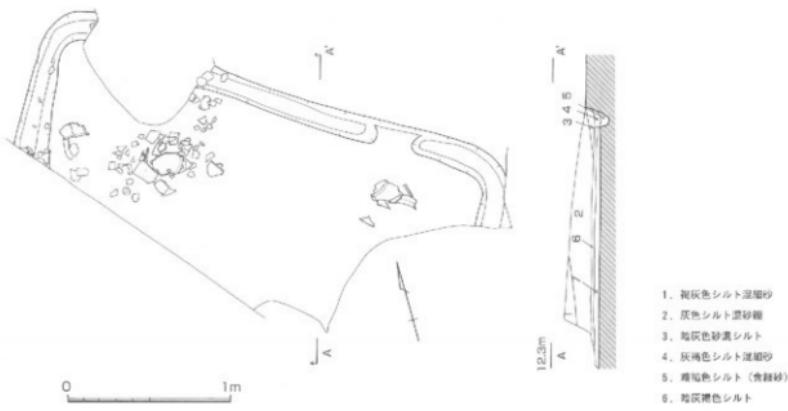


fig. 68 S B201平・断面図

S B202

調査区中央で検出した一辺約3m、深さ0.15mを測る方形の堅穴住居である。周壁溝等は検出されなかつた。出土遺物から、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃と考えられる。

S B203

調査区東端で検出した堅穴住居である。調査区外に延びるため規模等は不明である。幅0.22m、深さ0.1mを測る周壁溝を持つ。出土遺物からみて弥生時代後期末～古墳時代初頭頃と考えられる。

S D201

調査区中央で検出した幅1.2m、深さ0.5mを測る西から東に蛇行しながら流れる溝である。出土遺物からみて弥生時代後期末～古墳時代初頭頃と考えられる。

S X201

調査区東端で検出した不定形の遺構である。最大3.3m、深さ0.2mを測る浅い落ち込み状のものである。出土遺物からみて、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃と考えられる。

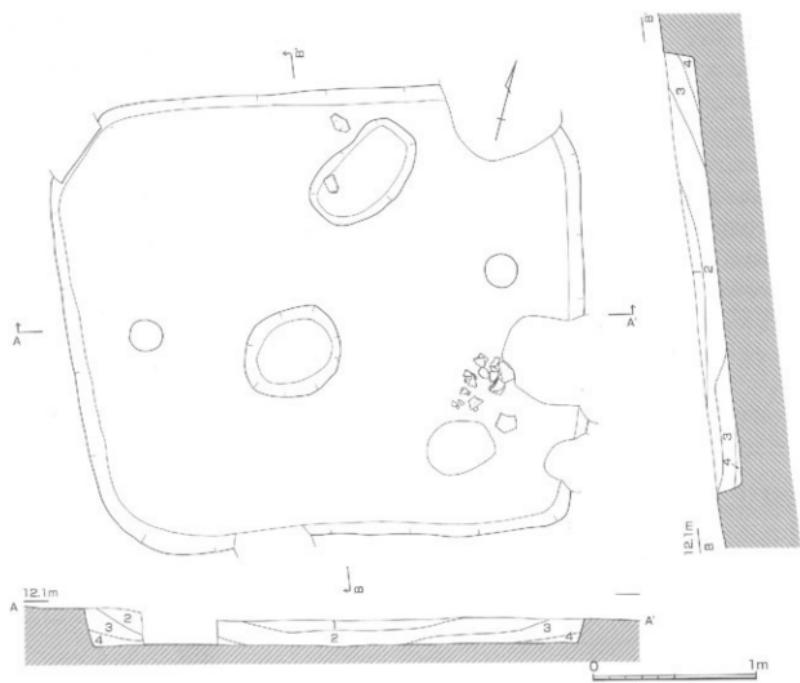


fig. 69 S B202平・断面図

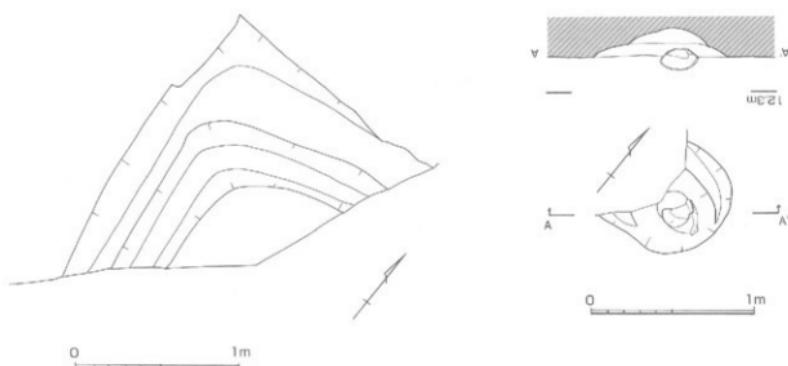


fig. 70 S B203平面図、S K201平・立面図

(3) 第2遺構面

灰色中～粗砂（古墳時代の洪水砂）の上面で検出した遺構である。

S A101

調査区の東で検出した（N-35° 55' -W）の5間以上の柱列である。調査区外に延びており、規模等は不明である。この柱列は、掘立柱建物S B101の柱穴を切っている。柱間は1.4mから1.8mと、ばらつきが認められる。埋土等からみて、第46-1次調査地で確認された奈良時代の遺構の新旧2時期に対応させると、新しい時期に相当する柱列と考えられる。

S B101

調査区の東で検出した（N-29° 06' -W）の2間以上×3間以上の建物である。調査区外に延びており、規模等は不明である。柱列S A101に切られている。埋土等からみて、新旧2時期ある奈良時代の遺構に対応させると、古い時期に相当する建物と考えられる。

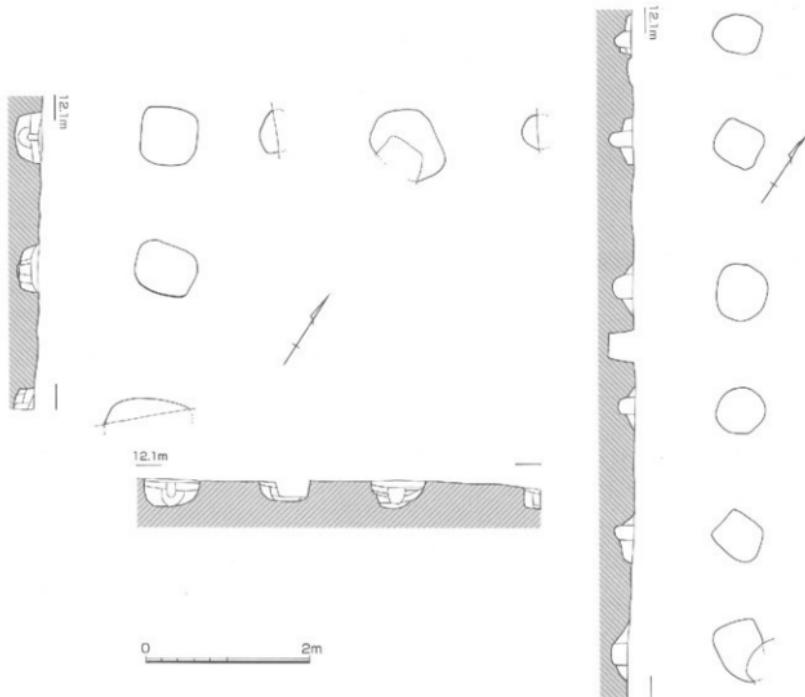


fig. 71 S B101、S A101平・断面図



fig. 72 第2連構面平面図

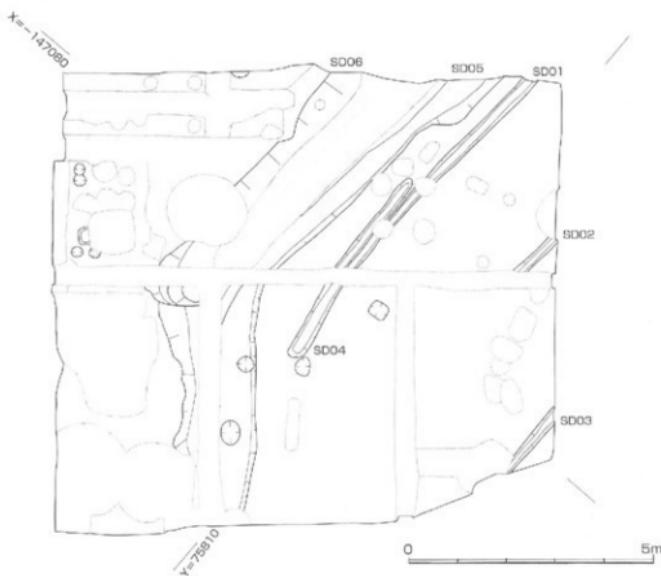


fig. 73 第1連構面平面図

(4) 第1遺構面

一部に暗灰色シルト混細砂（中世遺物包含層）が存在したものの、それ以外の区域では、ほとんどが旧耕土直下で検出したものである。耕作痕並びに浅い溝6条を検出した。

S D01：南北方向に走る幅0.25m、深さ0.05mを測る溝である。埋土より、近世の耕作痕と考えられる。

S D02：南北方向に走る幅0.25m、深さ0.05mを測る溝である。埋土より、近世の耕作痕と考えられる。

S D03：南北方向に走る幅0.25m、深さ0.05mを測る溝である。埋土より、近世の耕作痕と考えられる。

S D04：南北方向に走る幅0.3m、深さ0.05mを測る溝である。埋土より、近世の耕作痕と考えられる。

S D05：南北方向に走る幅0.5m、深さ0.07mを測る溝である。埋土より、近世の溝と考えられる。

S D06：南北方向に走る幅1m、深さ0.37mを測る溝である。埋土より、近世の溝と考えられる。

各遺構からは、遺物の出土がほとんどなかった。

なお、調査段階では、当遺構面を遺構面として捉えてカウントしていなかったため、この調査に関しては、第2遺構面=101から始まる遺構番号、第3遺構面=201から始まる遺構番号、第4遺構面=301から始まる遺構番号とすることを付記する。



fig. 74
第1遺構面と
周辺地

4. 出土遺物

暗黒褐色シルト出土土器

第4遺構面を形成する土層で、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土した。

110～113, 115は甌である。口縁部に端面を作るもの（110, 113）丸く取めるもの（111）、直立気味に立て、端部を尖らせるもの（112）がある。胴部外面は右上がりのタタキ目とハケ目で調整する。内面は、器壁が剥離しているものが多く、ハケ目の痕跡が僅かに残っているものがある。115は突出した底部を有し、外底面に木の葉を敷いた圧痕が残っている。114, 118は鉢で、114はやや内湾する体部外面に右上がりのタタキ目を施す。内面は摩滅して調整痕は残っていない。118は直線的な体部にやや外反する端部を持つ。外面にはナデと指頭圧痕が残り、内面には縦方向のヘラミガキが施される。116, 117は高杯で、116は杯部が直線的に立ち上がり、稜を有して端部は外反する。117は浅い皿状の杯部に、3方向の透かしを持つ脚が接続する。いずれもヘラミガキの痕跡が内外面ともに見受けられるが、摩滅が著しく、調整の詳細は不明である。119

は鉢または高杯と思われる。体部は丸く、内面には段を有し、その上はやや外反する口縁部を持つ。口縁端部外面と体部と口縁部の接点にそれぞれ3条の擬凹線を施す。接点やや上の擬凹線には、二重の円形浮文3個ずつを1単位にして貼り付ける。内面には、体部と口縁部の接点に明瞭な段をつける。この上器の器形は、北陸地方の土器にみられる特徴を持つと思われる。

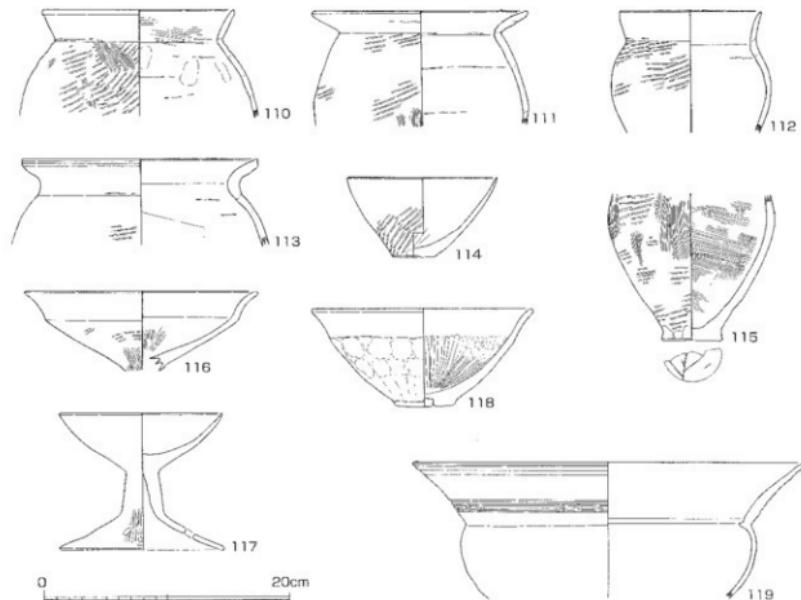


fig. 75 黒褐色シルト出土土器

SD301出土土器

第4造構面で検出された浅い窪み状の流路で、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が多く出土した。

120～122は盃で、120は球形に近い胴部を持ち、外反する口縁部端面と内面に細い竹管文状の装飾を施す。外面にヘラミガキの痕跡を若干残す。121の内面はハケ目、外面にはヘラミガキの痕跡がわずかに残る。122は盃の底部で、外面をヘラミガキとハケ目で、内面をハケ目で調整する。底部の形状は平底を呈する。

123は器台で、外反する口縁端部に、3個を単位とする細かい竹管文状の装飾を等間隔に施し、その間を波状文で埋めている。頸部には縱方向の細かいヘラミガキを施す。

124, 125は高杯で、口縁部は長く外反し、内外面にヘラミガキを施す。124の脚部には3方向に円形の透かしが開けられ、内面はハケ目調整を行い、軸部は、内側からへら削りで器壁を薄くする。

126～128は鉢である。126は小型のもので内湾する口縁部を持ち、内面にはハケ目の痕跡が残る。127は球形の胴部に外反する口縁部を持つ。外面にはタタキ目、内面にはハケ目の痕跡が残る。128は大型の鉢で、127と同様の器形であるが、底部外面にはヘラミガキ、内面にはハケ目とヘラミガキを施す。

129~140は甕で、129, 130のように口径が12~14cm前後のものと15~17cm前後のものに分けられる。口縁部は外反し、丸くおさめるものが多いが、131, 139, 140は、端面を持つ。底部は突出したものが多い。肩部の形状は上半分が最大径となるものが多いが、139は球形を呈する。いずれも外面は斜め右上がりのタタキ目で整形するが、137のように平行なタタキ目を施すものもある。また、132, 133, 136はタタキ整形の後、縦方向のハケ目で、器面を調整する。内面は摩滅しているものが多く、調整痕が残るものは少ないが、わずかにハケ目調整、指頭圧痕が残っているものがある。

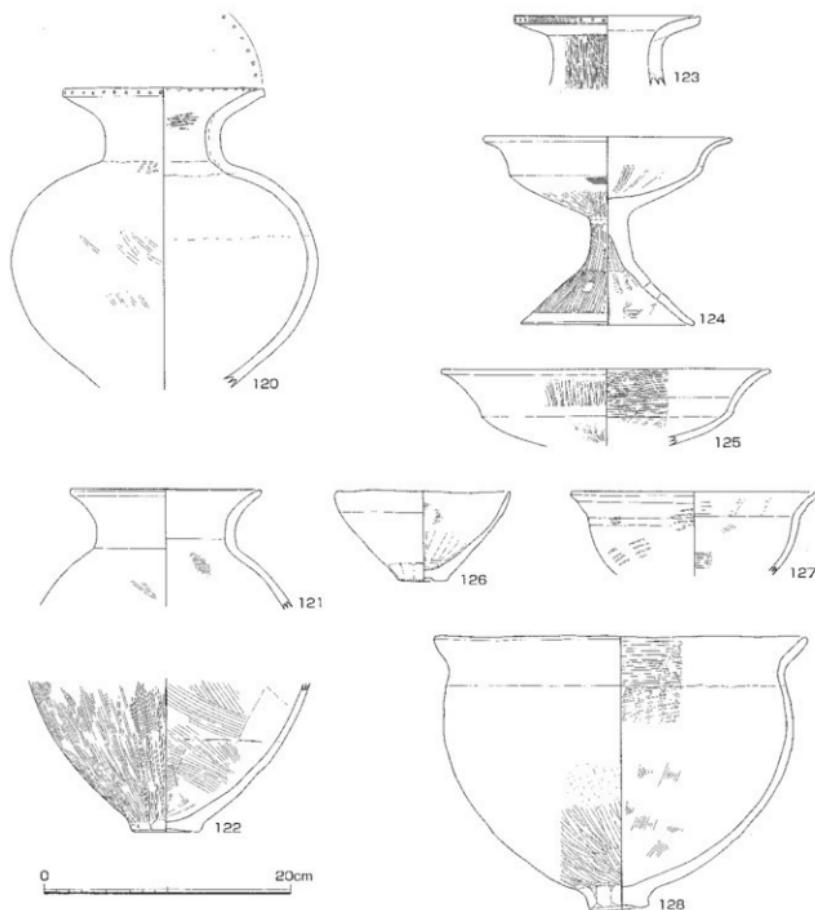


fig. 76 SD301出土土器 (1)

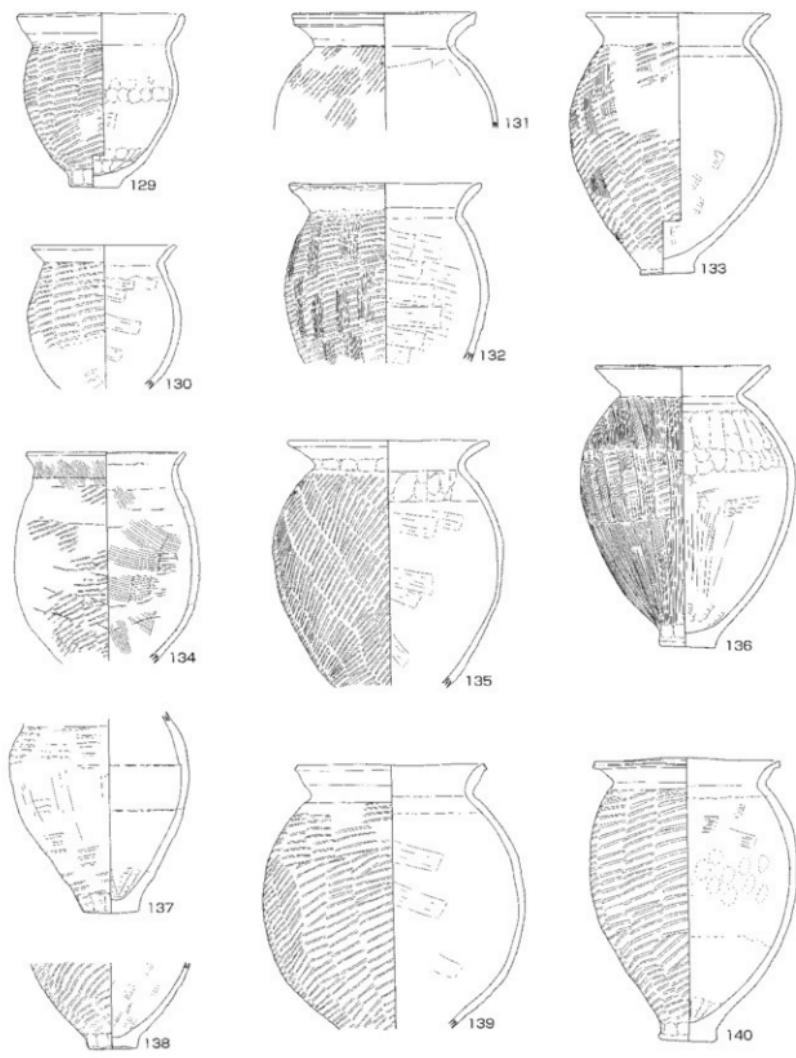


fig. 77 SD301出土土器 (2)

S D302出土土器

S D301と同様の浅い窪み状の流路で、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が多く出土したが、図化できた資料は少ない。

141～143は甕で、141の外底面は窪み、142は平底を有している。いずれも外面は右上がりのタタキ目、内面は10条／1cmのハケ目を施す。143は直線的な口縁端部を丸く收める。胴部は楕円形に近く、胴部外面は右上がりの細筋のタタキ目（3～4条／1cm）で成形され、内面はハケ目の調整を受ける。

S B201出土土器

第3造構面で検出された竪穴住居で、床面や覆土から土器が出土した。144は鉢で、内湾する口縁部を持ち、右斜め上方に施されたタタキ目を残し、内面はハケ目で調整する。145～150は甕で、口縁端部を丸く收めるもの（147, 148）、端面をつくるもの（149, 150）がある。胴部が球形に近いもの（148）、楕円形のもの（149, 150）がある。胴部外面は右上がりのタタキ目が残る。148の胴部下半部の外面はタタキ板による成形の後、板ナデを施す。内面の調整が残っているものは、斜めまたは縱方向のハケ目が認められる。

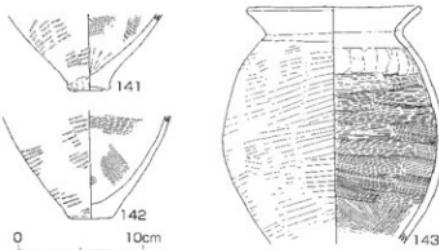


fig. 78 S D302出土土器

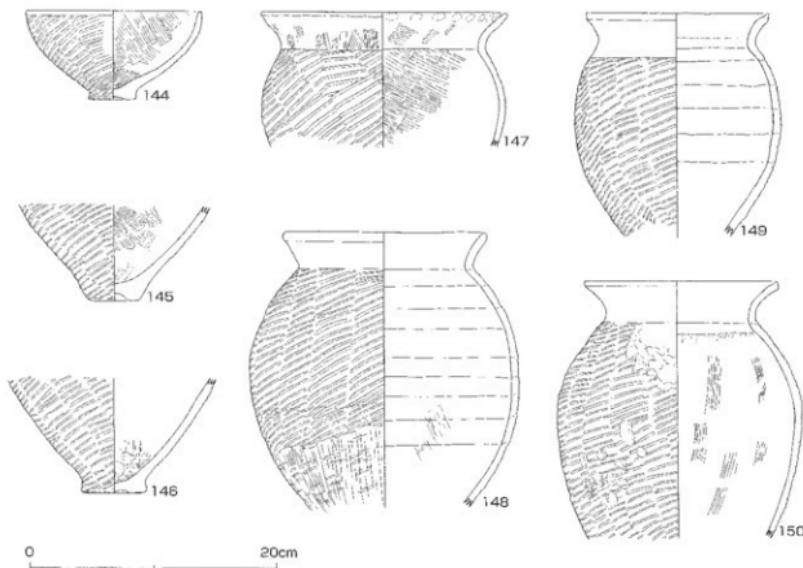


fig. 79 S B201出土土器

S B202出土土器

第3造構面で検出された竪穴住居であるが、出土遺物は少なく、破片資料がほとんどである。

151, 152, 155は甕で、151, 152は外反気味の口縁部に丸く収めた端部を持つ。器壁の摩滅が著しいが、151の外面はハケ目、内面は板ナデの痕跡が残り、152の外面は右上がりのタタキ目、内面は調整不明である。155は甕の底部で、外面には右上がりのタタキ目が残り、内面はハケ目調整を行う。

156は鉢の底部と思われ、突出した底部を窪ませる。153, 154は甕または壺の底部である。153の内外面は板ナデ、154の外面はハケ目、内面の調整痕は摩滅が激しく不明である。

S X201出土土器

第3造構面で検出された不定形な浅い落ち込みで、図示された土器が出土した。

157, 158, 160は甕で、外反させた口縁端部を尖らせて端面を作るもの（157）、まるくおさめるもの（158）がある。胴部外面は右上がりのタタキ目が残る。158の内面にはハケ目の痕跡が残る。160の底部には焼成前に穿孔がされており、外面には右上がりのタタキ目、内面にはハケ目が施されている。159は甕または鉢の底部と思われる。外面には、ハケ目調整が残る。内面は剥離しており、調整痕は残っていない。

S K201出土土器

竪穴住居S B201に接して掘られた土坑で、西半分を後世の攪乱によって削られ、本来の形状は不明である。埋土内から甕の口縁部を失したものが出土した。

161は甕で、胴部上半部に最大径を持ち、いびつな楕円形を呈する。底部は突出し、外底面は若干窪む。外面は右上がりのタタキ目で形成するが、下半部は被熱で器壁が剥離し、よく判らない。内面も、剥離して調整痕がほとんど残っていないが、僅かにハケ目と思われる痕跡を残す部分が見られる。

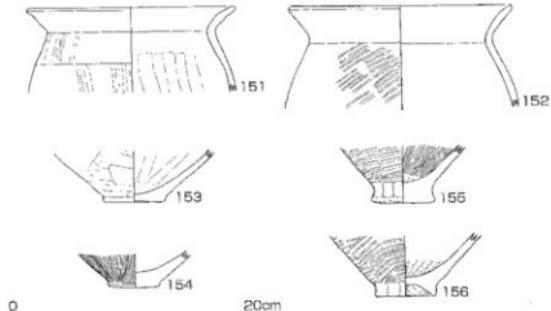


fig. 80 S B202出土土器

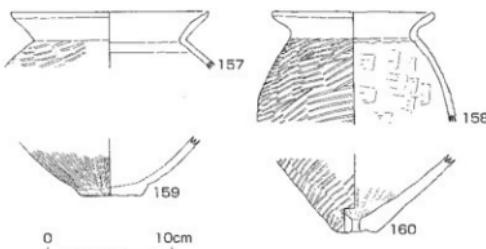


fig. 81 S X201出土土器

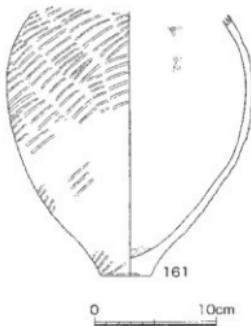


fig. 82 S K201出土土器

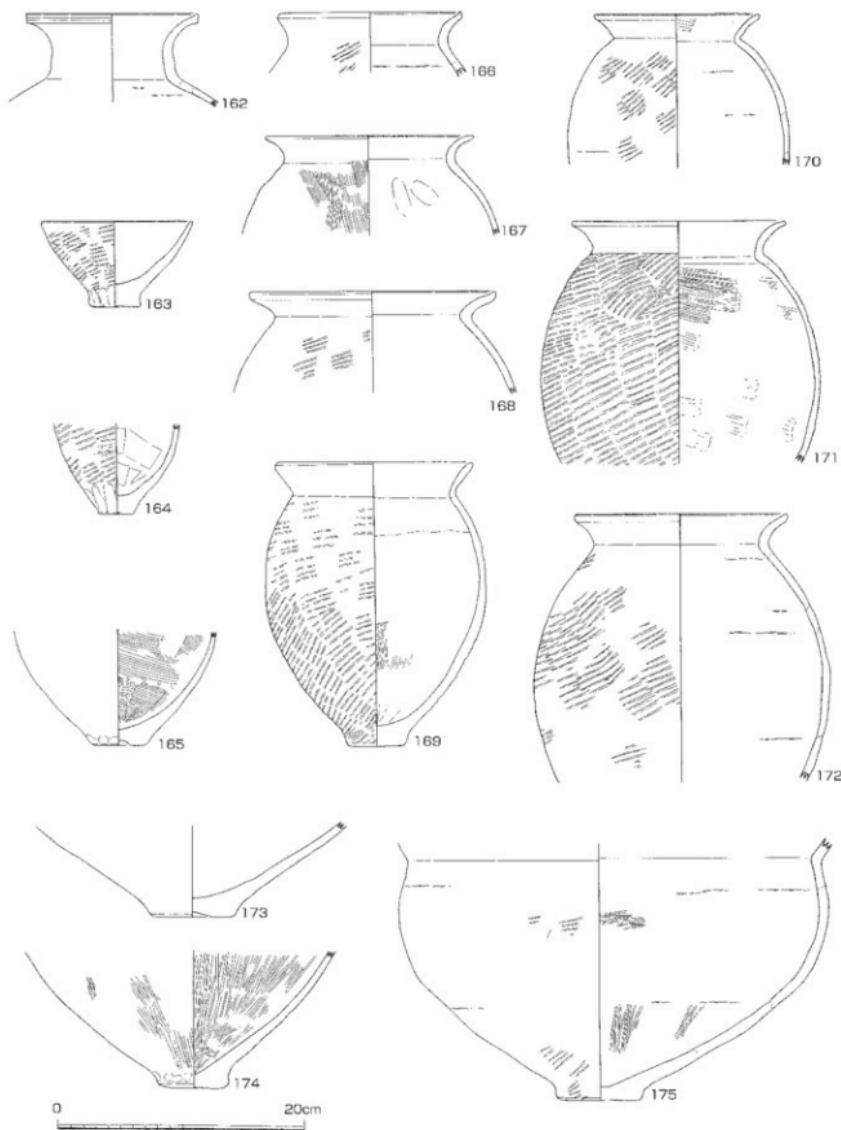


fig. 83 SD 201出土土器

S D201出土土器

第3造構面で検出された蛇行する溝で、堆積土内から土器が比較的多く出土した。これらの土器は破片となつてから、この溝に投棄されたようで、完全な形になるものは少なく、部分的あるいは底部、口縁部を欠失した状態の出土であることが、整理、接合作業を行つて判明した。

162は広口壺で、外反する口縁端部に面を作る。内外面共に摩滅して、調整は不明である。

163～165は小型の鉢で、163は直線的に立ち上がる口縁部に、外面は右上がりのタタキ目を残す。内面はナデで調整している。164の外面は右上がりのタタキ目、内面には板ナデの痕跡がある。底部には指頭圧痕が見られる。165は内面に8条／1cmほどの、ハケ日を施す。外面は摩滅して調整痕は不明である。

166～172は壺で、166、168、172は外反する口縁端部に面を作り出す。167、169、170、171は、口縁端部を丸くあるいはやや先細りに收める。鈎部が橢円形に近いものが多い。169の底部は突出して作る。外面には右上がりのタタキ目を残すものがほとんどであるが、167のようにハケ日調整を施すものもある。

173～175は大型の鉢と思われる。いずれも、鈎部下半部は直線的に広がる。175は鈎部が内湾しながら、鈎部でくびれ、口縁部は外反する。174、175の底部はやや突出している。また、173の外底面は僅かに窪んでいる。器壁は摩滅しており、調整痕は明瞭でないが、174、175ではヘラミガキが部分的に残っている。また、175の底部～鈎部外面にはタタキ目が僅かに見出せる。

ピット出土土器

奈良・平安時代の造構検出面である第2造構面のピットから、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土した。下層の土器がピット掘削時に掘り出され、埋め戻されたものである。

176は、S P132から出土した小型の台付鉢である。台部には指頭圧痕が残り、外底面は窪む。体部外面にはタタキ目、内面にはハケ目の痕跡が残る。177～179はS P113出土の土器である。177は壺の底部～鈎部と思われる。やや突出する底部に、内湾する鈎部を持つ。外面にはヘラミガキ、指頭圧痕が残る。内面は摩滅して調整は不明である。

178、179は壺で、外反する口縁部に丸く收める端部を持つ。鈎部の屈曲は緩やかである。179は突出した底部を指頭圧痕で調整し、外底面が僅かに窪む。いずれも外面は右上がりのタタキ目を残し、内面は板ナデで器壁を平滑にする。口縁部はナデで整形する。178、179については、器形や調整技法から、同一個体である可能性はあるが、接点がないため、一応、別個体として報告した。

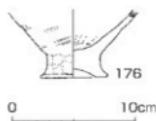


fig. 84 S P132出土土器

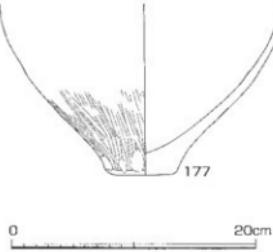
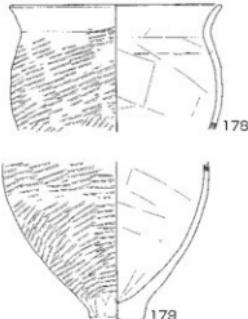


fig. 85 S P113出土土器



5. 小結

第46-3次調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭と奈良時代の遺構を検出している。

弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の遺構としては、第3、4遺構面の遺構がそれにあたる。このうち、S D301、302は堆積の状況から見て、人工的に掘られた溝というよりは、自然流路的なものと考えられる。それに対して、S D201は人工的に築かれた可能性があり、環濠の一部である可能性も考えられる。S D201の南側ではほぼ同時期と考えられるS B201・S B202・S B203を検出している。直接的な切り合い関係は無いが、S B201、S B202、S B203では建物の方向性の違いから、時期差のある可能性がある。またS D201とS B202とでは位置関係からみて、同時併存ではない可能性が高いものと考えられる。しかし、各遺構出土の遺物からは前後関係を特定することは困難である。

奈良時代の遺構であるS B101・S A101の切り合い関係は、S A101がS B101を切っているが、第46-1次調査の建物群と、S A101の方向は一致しておらず、このことから考えると、奈良時代の建物群は3時期存在する可能性がある。

今回の調査成果として、奈良時代の掘立柱建物の検出がひとつの成果といえよう。上沢遺跡ではこれまでにも、奈良時代の銅鏡の出土した井戸、銅製の帶金具の出土等、奈良時代の遺構が多く確認されている。これらを併せて考えれば、何らかの官衙的な遺構の存在を想定することはあながち不可能とは言い切れない。

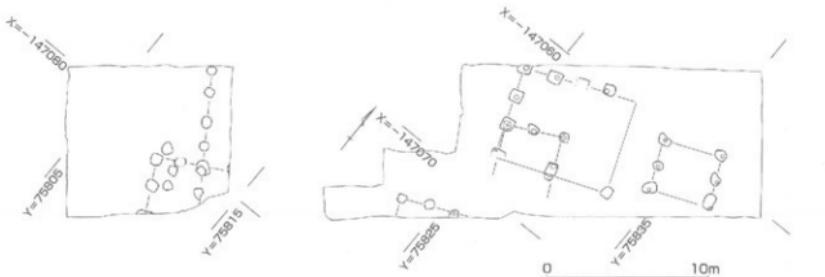


fig. 86 第46次調査検出建物配図



fig. 87
調査地周辺
の状況

第7節 第50-1次調査

1. 調査の概要

調査区の設定

平成14年度の調査は、2ヵ所（第50-1次：80m²、第50-2次：290m²）の調査を実施した。各地区ともに油圧ショベルで表土・整地土の除去を行い、その後は人力で遺物包含層の掘削を行った。掘削残土は構内に仮置きし、調査終了後は重機で埋め戻しを実施した。

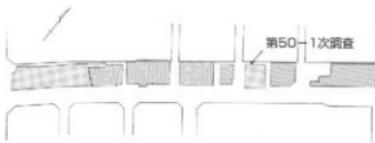
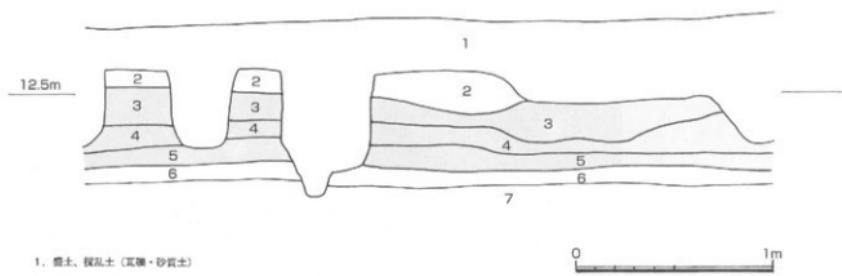


fig. 88 第50-1次調査位図

fig. 89
調査前の状況

2. 基本層序

盛土、搅乱土（瓦礫・砂質土）・灰褐色砂質土・暗灰褐色粘性砂質土・灰褐色中砂～細砂（第1遺構面・遺物取り上げは灰褐色砂質土）・灰褐色砂質土（東半部の第1遺構面）・暗褐色粘性砂質土（第2遺構面）・暗褐色粘質土（第3遺構面）・暗褐色混礫細砂・淡褐色混礫細砂～中砂である。各遺構面の高さは標高11.9～12.1m前後を測る。



1. 盛土、搅乱土（瓦礫・砂質土）
2. 灰褐色砂質土
3. 暗灰褐色中砂～細砂（第1遺構面・遺物取り上げは灰褐色砂質土）
4. 灰褐色粘性砂質土（第2遺構面）
5. 暗褐色粘性砂質土（第3遺構面）
6. 暗褐色混礫細砂
7. 淡褐色混礫細砂～中砂

fig. 90 調査区西壁断面図

3. 検出遺構

(1) 第3遺構面

土器群・ピット

北半部に湿地状の地形が検出され、その部分には土器が大量に投棄されていた。土器群は2群に分かれて出土している（土器群A、B）。この流路は、第46-1次調査の第4遺構面検出の流路とは接続する。土器群の時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭に属する。また、南半部で小規模なピットが、散在して確認された。

断割り調査

第3遺構面の調査完了後、下層の断割り調査を実施したが、淡褐色混疊細砂～粗砂層と黒褐色シルトが堆積しており、遺構は確認されなかった。



fig. 91 第3遺構面平面図



fig. 92
第3遺構面
遺物検出作業



fig. 93 湿地内遺物出土状況図

(2) 第2遺構面

北半部で流路1条、南半部で溝1条および小規模なピットが数基確認された。

流路

流路は検出長が約6m、幅約0.8mで、西～東に流れ、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器と砂礫が堆積している。これは、調査段階では自然流路と考えたが、人工的に掘削された溝の可能性も否定できない。

第46-1次調査の第3遺構面検出の流路と接続する。

S D201

溝 S D201は検出長が約6m、幅約0.3mで、北西～南東に流れる。古墳時代前期の土器と礫が若干出土した。溝の検出位置と出土遺物からみて、この溝は第1遺構面で検出された土坑 SK101と接続すると考えた方がよいであろう。



fig. 94 第2遺構面平面図



fig. 95
第2遺構面
掘削作業

(3) 第1遺構面

土坑1基、ピット10基が検出された。この遺構面は後世の擾乱坑で西側と北側が削られている。埋土内からは古墳時代前期（布留式土器併行期）の土器が、礫と共に多く出土した。この部分は第2遺構面までの堆積層が薄いため、第1遺構面で検出したが、本来は第2遺構面で検出されるべき遺構である。ピットからは、鎌倉時代前半頃の遺物が出土するものがある。



fig. 96 第1遺構面平面図

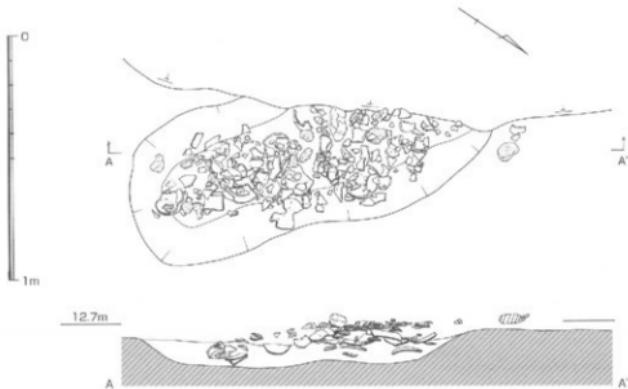


fig. 97 SP101 土器出土状況図

4. 出土遺物

遺物包含層出土土器

第2道構面を形成する暗褐色粘性砂質土および第1道構面となる灰褐色砂質土からは、弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が出土した。181～185, 187は暗褐色粘性砂質土、180, 186, 188は灰褐色砂質土出土である。

181は鉢で、外反する口縁部と平底の底部を持つ。外面にはタタキ目の痕跡が残る。182は有孔鉢で、直線的な体部と内傾する口縁部を持つ。外面はタタキ板による成形で、口縁部にはナデを施す。内面はハケ目調整を行う。181, 182共に底部が穿孔されている。183は台付鉢で、外面はヘラケヅリで調整する。184は小型の鉢で、底部は平らで、外面はヘラミガキ、内面にはハケ目が残る。185は壺で、椭円形の胴部と突出した底部を有する。外面はタタキ板で成形し、一部にハケ目を施す。内面はハケ目整形を行う。187は壺で、外反する口縁部内面に2条の波状文を巡らす。胴部外面にはハケ目、内面には指頭圧痕が残る。

180は小壺状の土器であるが、用途は判らない、内面には指頭圧痕が見られる。186は二重口縁の壺で、口縁端部に細い竹管文と波状文、その下には4条を一単位とした波状文が4段施される。188は壺で、球形の体部にやや尖った底部を持ち、口縁部は外反する。内外面共にハケ目を施す。

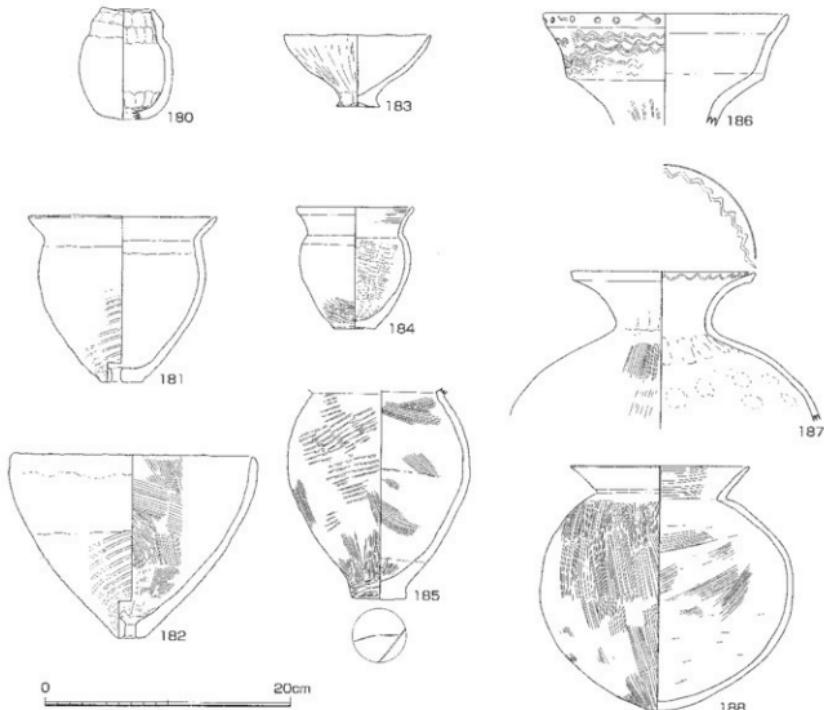


fig. 98 遺物包含層出土土器

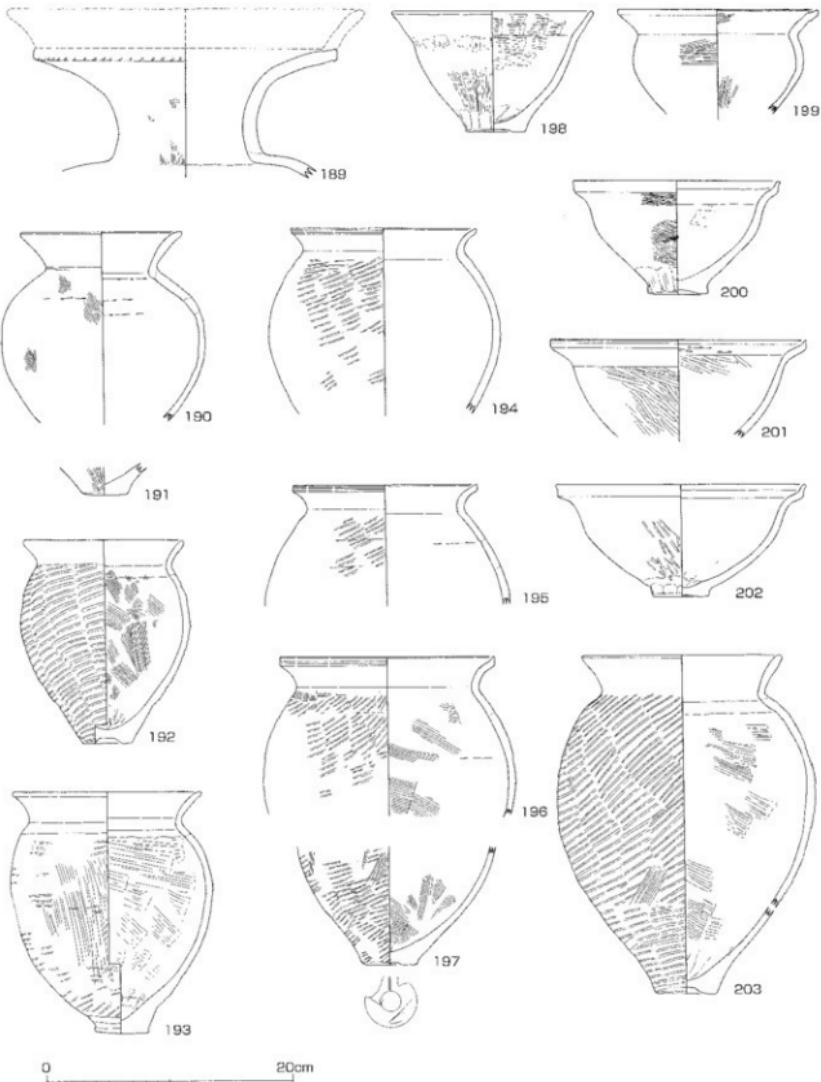


fig. 99 土器群A、B出土土器

土器群A、B出土土器

第3造構面の湿地状地形の中から出土した土器の一群で、取り上げ時に便肩上、A、Bとしたが、遺物整理の過程で、相互に接合するものもあり、一括の遺物群として報告した方がよいと判断した。

189は二重口縁の壺で、端部は欠失している。口縁部の稜の部分に刻み目が施されている。190は広口壺で、球形の胴部に外反する口縁部を持ち、外面にはハケ目が残る。191は壺か甕の底部であろう。

192～197、203は甕で、193、194の胴部は球形に近い。口縁部は外反し、193、203のように口縁端部を丸く収めるもの、194～196のように端面を持つものがある。193の底部はやや突出し、197、203の底部は平底に近くなり、外底面が窪む。197の外面には、木の葉の圧痕が残っている。外面は右上がりまたは平行のタタキ目が施され、部分的にハケ目調整を行っている。内面は板ナデ、ハケ目で器壁の調整を行う。

198～202は鉢で、外反する口縁端部を屈曲させて面を作るもの（200～202）丸く収めるもの（198、199）がある。また、体部と口縁部の境目がやや外反するもの（198）、くびれるもの（199）などがある。また、小型（198、199、200）と中型（201、202）に分類できる。198の外面はハケ目を施すが、その他はヘラミガキで器壁を調整する。内面にはハケ目（198、200）やヘラ磨き（199、201）が見られる。

流路出土土器

第2造構面を流れる流路である。204は甕で、外反した口縁端部は丸く収める。外面はタタキ板で成形した後、ハケ目調整を施す。内面はハケ目が残る。205は大型鉢で、外反する口縁部に面を作る。外面には細かいヘラミガキが見られ、内面の口縁部はヘラミガキ、体部には板ナデまたはハケ目が認められる。

S D201出土土器

第2造構面に掘りこまれた溝で、本末はSK101と接続するものと思われる。出土遺物は僅かである。

206は甕で、球形の胴部に若干外反する口縁部を持つ。胴部外面は縱方向のハケ目、内面は板ナデで調整する。

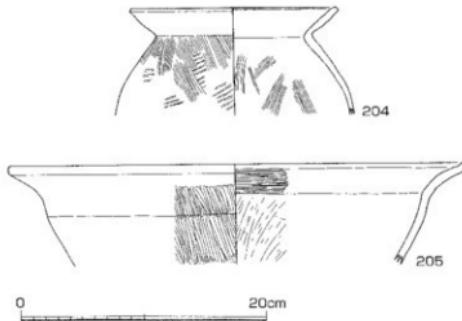


fig.100 流路出土土器

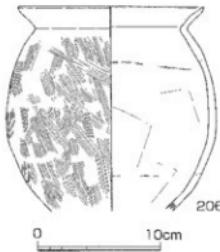


fig.101 S D201出土土器

SK101出土土器

第1造構面の土坑に投棄されていた土器の一群で、古墳時代前期（布留式土器併行期）のものと考えられる。

207、209は壺で、207は楕円形の胴部に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。底部は僅かに作り出される。胴部外面はハケ目の痕跡が残っているが、下半分は被熱によって、煤が附着し調整痕が明瞭でない。内面も一部にハケ目の痕跡が残る。また、粘土紙の接合痕が顕著に認められる。209は下膨れの短い胴部に、直線的

に立ち上がる口縁部を持つ。外面はタタキ板による成形の後に、ハケ目で器壁を調整する。

208, 212は甕で、208は球形に近い胴部に直線的に立ち上がる口縁部を持つ。底部は僅かに平たく作り出す。胴部外面は縦方向のハケ目、内面は板ナデで調整する。212は梢円形の胴部と内湾気味の口縁部を呈する。内外面ともにハケ目（5～6条／1cm）で調整する。

210, 211は壺、皿形の土器で、210は内外面にナデと指頭圧痕が残る。211は内面にはハケ目の痕跡が残るが、外面は磨滅して調整は不明である。213, 214は鉢で、やや内湾気味の胴部に平たい底部が付く。213の外面は上下方向に指ナデを行い、内面はナデで調整する。214は球形の体部に直線的な胴部で、内外面に指頭圧痕と板ナデが見られる。215～218は甕で、215は球形の胴部に、少し外反する口縁部を持つ。底部は、痕跡程度に作られるにすぎない。タタキ目とハケ目が外面に残り、板ナデと指頭圧痕が内面に残っている。216, 217は内湾する口縁部の端面を肥厚させ、球形の体部を持ち、全体に薄く作られている。胴部外面は細かいハケ目（8条／1cm）、内面はヘラケズリを行う布留型の甕である。

218は屈曲して立ち上がる口縁部と、胴部はややいびつな球形で、丸底を呈する甕で、外面はハケ目とナ

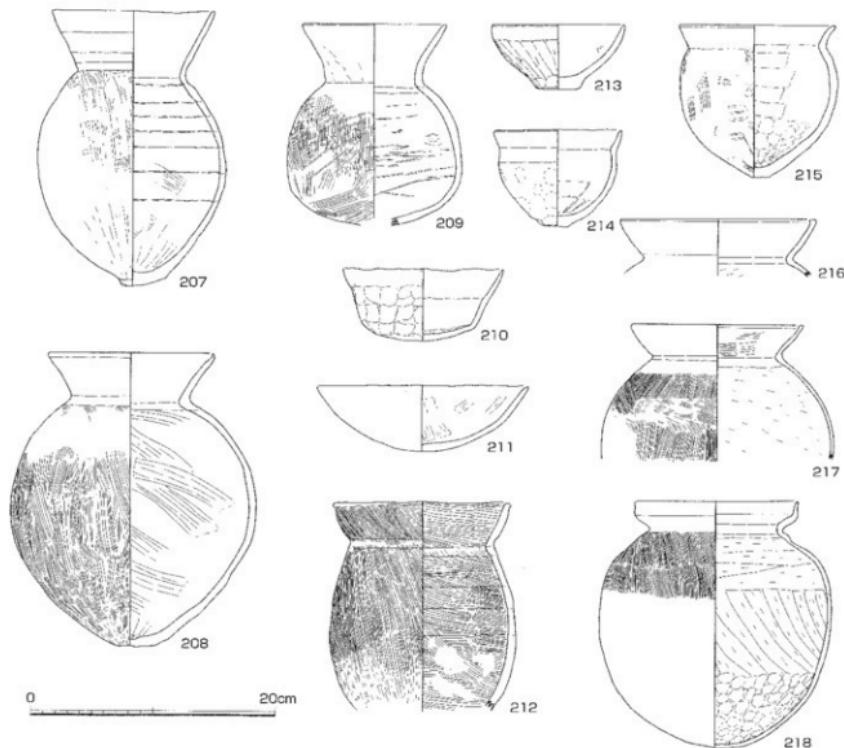


fig.102 SK101出土土器

テ調整、内面は上半分が縦と横のヘラケズリ、下半分には指頭圧痕が残る。色調は黄褐色で、石英、長石粒を含む。吉備型の甕で、搬入品と判断される。

S P101出土土器

第1遭構面のピット（S P101）から、須恵器の甕が出土した。219は直線的立ち上がる口縁部で、回転ナデで形成されている。色調は明灰色である。12～13世紀の東播系の製品である。

5. 小結

1区では、3時期の遭構検出面が確認された。第1面は、中世のピットおよび、古墳時代前期の土坑が検出され、第2面では、弥生時代後期末～古墳時代前期の流路、溝、ピットが確認された。第3面では、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃の湿地状地形と土器群、ピットが発見された。

出土遺物では、S K101から出土した一群の土器が注目される。在地産の土器と共に、布留型の甕や吉備型の搬入品と判断される甕などが出土した。共伴関係を知ることの貴重な資料であると言える。

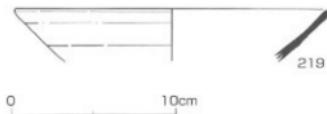


fig.103 S P101出土土器



fig.104
トライやるウイーク
実習状況 (1)
中学生の職場体験
11/11～11/15 4名参加



fig.105
トライやるウイーク
実習状況 (2)

第8節 第50-2次調査

1. 調査の概要

油圧ショベルで表土・整地土の除去を行い、その後は人力で遺物包含層・遺構の掘削を行った。掘削残土の大半は構内に仮置きしたが、一部は仮置きのヤードを近隣に設定し、運搬を行った。調査終了後は重機で埋め戻しを実施した。また、掘削残土置き場確保のため、調査区を東半と西半に区分して調査を実施した。

東半部では遺構が確認されず、西～東に下がる谷地状の地形が確認された。西半部では、真中が高く、西側に下がる地形を呈する。当該調査地付近が、扇状地地形の一番高いところにあたり、このあたりから、東西方向に徐々に下がっていく。真中付近の遺構面の高さは標高13.1m前後を測る。

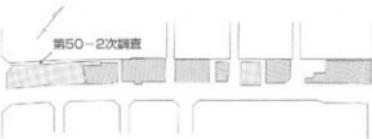


fig.106 第50-2次調査位置図

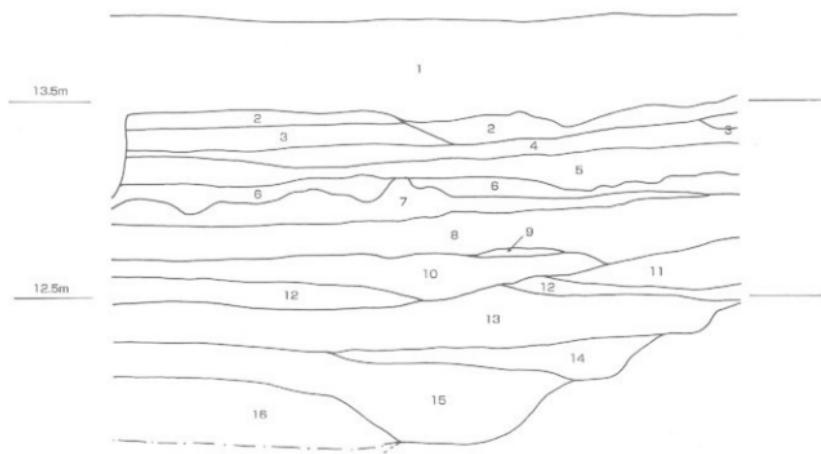


fig.107 調査区配図

fig.108
調査前の状況

2. 基本層序

基本層序は、盛土・撹乱土（瓦礫・砂質土）・黄灰色～灰色系砂質土（中・近世耕作土）・灰褐色粘性砂質土（遺物包含層）・淡灰褐色砂質シルト（西側落ち込み部分堆積物）・暗褐色砂質シルト（〃）・灰色～褐色系中砂～砂礫（近世頃の洪水堆積物）・灰色～黒色シルト～中砂（谷地状地形堆積物）・黄灰褐色中砂～細砂（遺構検出面）である。



(東半部)

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1. 褐土、棕乱土（真透・砂質土） | 9. 淡灰褐色粘性砂質土 |
| 2. 黄褐色砂質土（近代底土？） | 10. 淡灰褐色砂質シルト |
| 3. 黄褐色じり灰色砂質土（耕作土） | 11. 粘透色砂質シルト |
| 4. 黄褐色砂質土（中・近世耕作土） | 12. 粘透色灰褐色砂質シルト |
| 5. 淡色じり灰褐色砂質土（中・近世耕作土） | 13. 黄灰褐色粘透砂 |
| 6. 灰色砂質土（中世頃の耕作土） | 14. 灰色粘透砂～粗砂 |
| 7. 黄褐色粘性砂質土 | 15. 粘色砂質シルト |
| 8. 塗灰褐色粘質土（SD01堆積土） | 16. 灰色砂質土 |

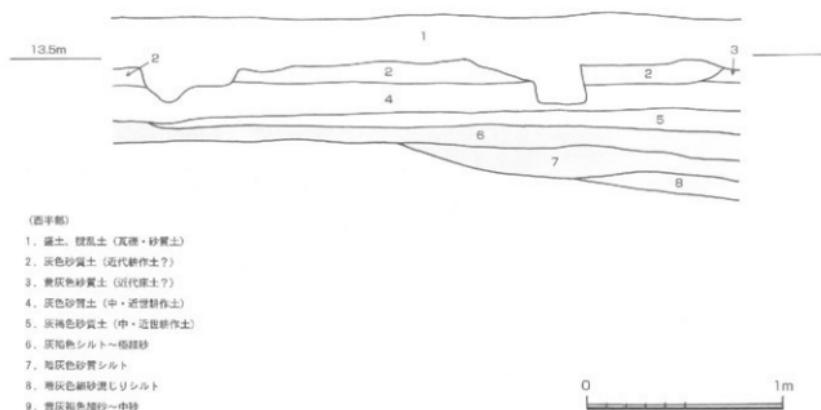


fig.109 調査区南壁断面図

3. 検出遺構

(1) 東半部

東半部では、遺構が確認されず、西～東に下がる谷地状の地形が確認された。この地形にはシルト・細砂～粗砂が互層になって厚く堆積しており、最終的には近代頃の流路となって埋没している。堆積状況を調べるために、調査地内に断面 sondage（トレンチ）を設定して、現地表面からマイナス2.2mまで掘削したが、湧水が激しく、底面を確認することはできなかった。

(2) 東端拡張部

東半部に拡がる谷地状の地形の幅を確認するため、隣接地（第38-3次調査地）に再度トレンチを設定して調査を行った。その結果、谷状の地形から微高地に上がって行くことが判明し、東端の未調査部分ではピット1基が、確認された。

(3) 西半部

西半部は、真中あたりが高く、北東と南西にそれぞれ下がってゆく地形である。遺構は真中付近で検出された。遺構からは弥生時代後期～平安時代の遺物が出土した。

S D01

西側は直線で東側は弧状を呈する溝で、幅0.3～0.8m、長さ10.5m分を検出した。深さは0.1～0.2cm前後で、断面は浅いU字形を呈する。礫や金属溶解用の炉壁片がまとまって出土する部分がある。弥生時代後期末から古墳時代初頭（庄内式土器併行期）土器が出土した。

S D02・03

S D01から派生する溝で、S D03はS K01に取り付く。また、小礫群や鉱滓が出土した。

S K01

一辺5mの方形を呈する可能性のある土坑であるが、大半が調査地外にあるため、精確な形状は明らかでない。また、S D03との接点部分で礫が多く出土した。竪穴住居の可能性はあるが、調査範囲内では周壁溝や柱穴は確認できなかった。埋土上層から、古墳時代初頭（庄内式土器併行期）～古墳時代後期の土器が出土している。

ピット

溝の周辺では、ピットが散在した状態で発見された。溝を取り囲むように確認されたピットもある。ピットからは、炉壁の破片や鉱滓、古墳時代後期～平安時代後半の土器が出土するものがある。

胞衣壺？

西半部の中央では、土師器の甌に、高台付の皿を逆さにして蓋をした状態で出土した。掘形は遺構検出面を0.1mほど掘り込んだ状態で確認されたが、実際は遺物包含層である灰褐色粘性砂質土から掘り込まれていたものと考えられる。甌内の土をX線透過写真で調べたが、固形物は確認できなかった。現在の段階では、胞衣壺の可能性が高いと推定している。土器の形状からみて、平安時代後半のものである。

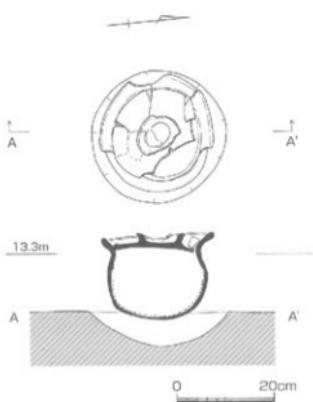


fig.110 胞衣壺？出土状況図

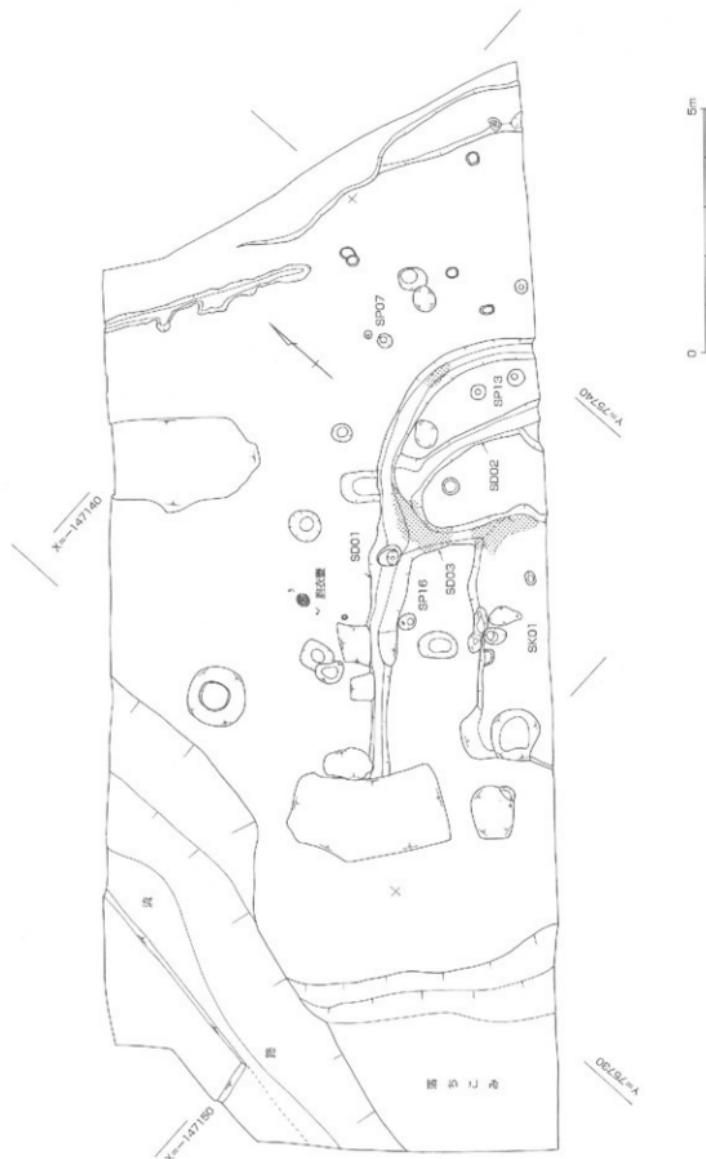


fig.111 漢墓区西半部平面図

落ち込み状地形

西端では、落ち込み状の地形が検出され、南西方向に徐々に下がってゆく。落ち込み中には、遺物包含層と同様の灰褐色粘性砂質土が堆積しており、この中には平安時代後半の土器、瓦が多く含まれていた。東端で検出された谷地状の地形と同様のものであろうと判断される。

流路

また2区の西端では、ほぼ南北方向に延びる流路が検出された。中世耕作土層を削って流れ、その上には、近世～近代頃の耕作土層が堆積していることから、近世頃の洪水による堆積層と推定される。

4. 出土遺物

土坑、ピット、溝出土土器

220はS D01出土の甕で、外反させた口縁部は、端部で折り曲げて面を作る。肩が張る体部と若干突山した底部を持つ。体部外面は右上がりのタタキ目が残り、内面には縦と横方向のハケ目を施す。

222はS K01出土の鉢で、外反した口縁部で、底部は退化してほとんど作り出されていない。外面にハケ目の痕跡が残る。220, 222は、弥生時代後期末～古墳時代初頭のものである。

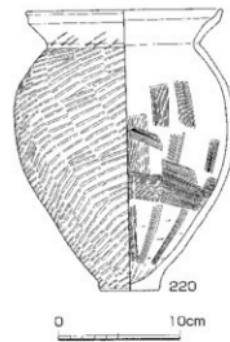


fig.112 土坑、ピット、溝出土土器

223はS K01出土の須恵器壺身で、内面、口縁部、体部はロクロナデ、底部は回転ヘラケズリを施す。

224はS P07出土の須恵器甕の口縁部で、端部をつまみ上げて端面を作る。頸部内面には同心円状のタタキ板の痕跡が残る。223, 224は古墳時代中期末～後期初頭の土器である。

221はS P13出土の土師器の小皿で、「ての字」状に折り曲げた口縁部に、底部には指頭圧痕が残る。平安時代後半のものである。

泡衣壺と考えられる土器

調査区西半部では甕(226)の上に、皿(225)を逆さにして蓋とした状態で出土した。

226は土師壺蓋で、外反する口縁部と球形の胴部に、平底の底部を持つ。胴部上半に縦方向の耳状の把手が取り付く。胴部外面は縦方向のハケ目、内面は板ナデで調整する。底部には指頭圧痕が残る。

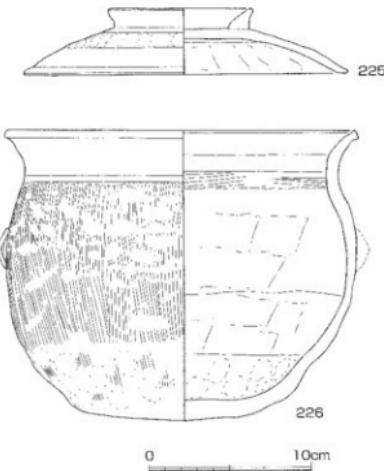
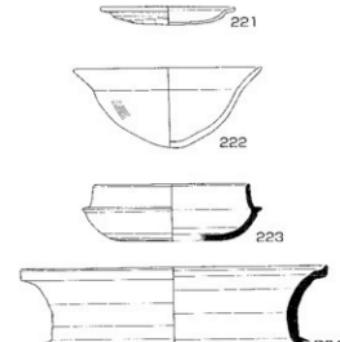


fig.113 泡衣壺と考えられる土器

225は土師器皿で、直線的な体部に断面三角形の高台を貼り付ける。外面には指頭圧痕、横方向のナデ、内面には板ナデを施す。いずれも平安時代後半のものと考えられる。

落ちこみ状地形出土土器、陶器

西端で発見された落ち込み中には、平安時代後半の土器、瓦が多く含まれていた。

227は縁ぬき陶器塊で、外反する口縁部にあまり明瞭でない棱を持つ、高台は削り出して作る。粘土分が多く、硬質の胎土に光沢のある淡緑灰色の釉が、内面から高台外面まで掛かる。

228～230は土師器で、228の皿は底面に指頭圧痕を残し、口縁部は横方向のナデで仕上げる。229は壺で、貼り付け高台に内湾する口縁部を有している。230の壺は、外側に踏ん張る高い高台が特徴である。

231～233は黒色土器塊で、231は外反する口縁部の内端部に浅い沈線をめぐらせる。232は口縁部を丸く收める。器壁が磨滅しているため、調整痕は明瞭でない。いずれも断面三角形の貼り付け高台を持つ。内面に炭素が付着する黒色土器A類である。

234は須恵器鉢で、直線的な体部に、斜めに外方につまみ出した口縁端部を持つ。235、236は円盤状の平高台で、外反する口縁部を持つ須恵器塊である。内面～口縁部、胴部にかけてはロクロナデで成形し、底部は回転ヘラ切り未調整である。

237～240は土師器壺で、球形の胴部に屈曲させて外反する口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみ上げるもの（237）、丸く收めるもの（238）、端面を作るもの（239、240）などが見られる。外面はハケ目と指頭圧痕、内面には板ナデの痕跡が残存しているもの（239、240）がある。

241、242は土師器羽釜である。段を持つ短い立ち上がりの口縁部と鈎を有する。242は直線状の胴部と底部は球状を呈する。胴部～底部外面は、指頭圧痕、縦方向のハケ目、横方向のハケ目を施す。胴部内面は板ナデ、底面は指頭圧痕が残る。241は胴部外面に縦方向のハケ目が残る他は、調整痕は不明瞭である。いずれも胎土には1～3mm大の砂粒を多く含む。

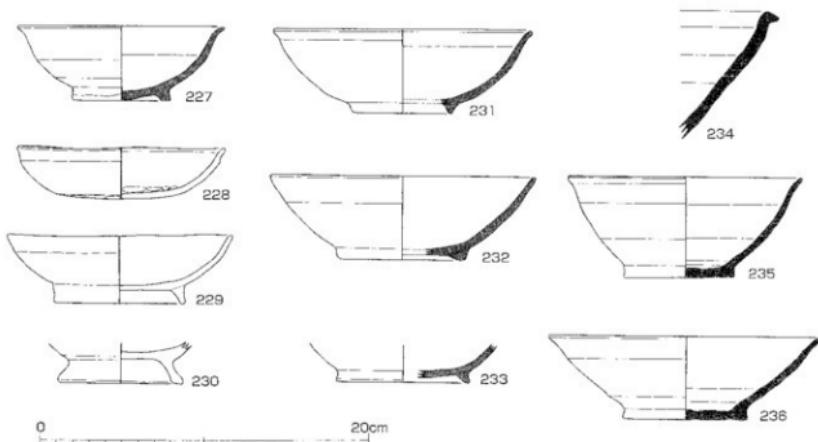


fig.114 落ちこみ状地形出土土器、陶器

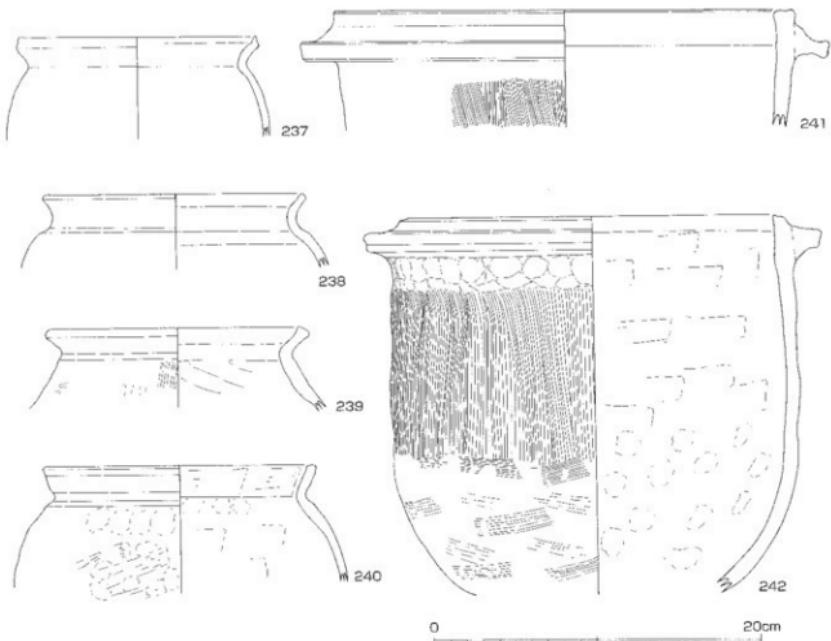


fig.115 落ちこみ状地形出土土器

調査区出土瓦

遺物包含層、落ちこみ状地形および中世耕作土からは、半・丸瓦が出土した。いずれも破片資料であり、瓦全体の形状を窺わせる様なものはない。中世耕作土出土のものは、耕作時に攪乱されたものと想定される。

247は丸瓦で、その他は平瓦である。また、焼成の具合について、247は上師質、それ以外は硬質な須恵質の焼きとなっている。いずれの瓦の胎土も1~5mm大の砂粒を多く含む。

243~246の凹面には布目圧痕、凸面には縄目圧痕が残る。243, 244, 246の端面はヘラ切りで成形する。247の内面には細かい布目痕が残り、端面はヘラ削りで成形する。外面はナデ調整で仕上げる。248の凹面は細かい布目痕が残り、凸面には幅広の格子状の圧痕がみられる。

249は端部が反り上がった平瓦で、端面はヘラ切りで成形する。凹面には、細かい布目痕が残り、凸面はヘラケズリで整形している。

243, 246は中世耕作土より出土、244, 245, 247, 248は、落ちこみ状地形上層の堆積土である灰褐色砂質土より出土した。また、249は落ちこみ状地形下層の堆積土である灰褐色シルト~青灰色極細砂より出土した。

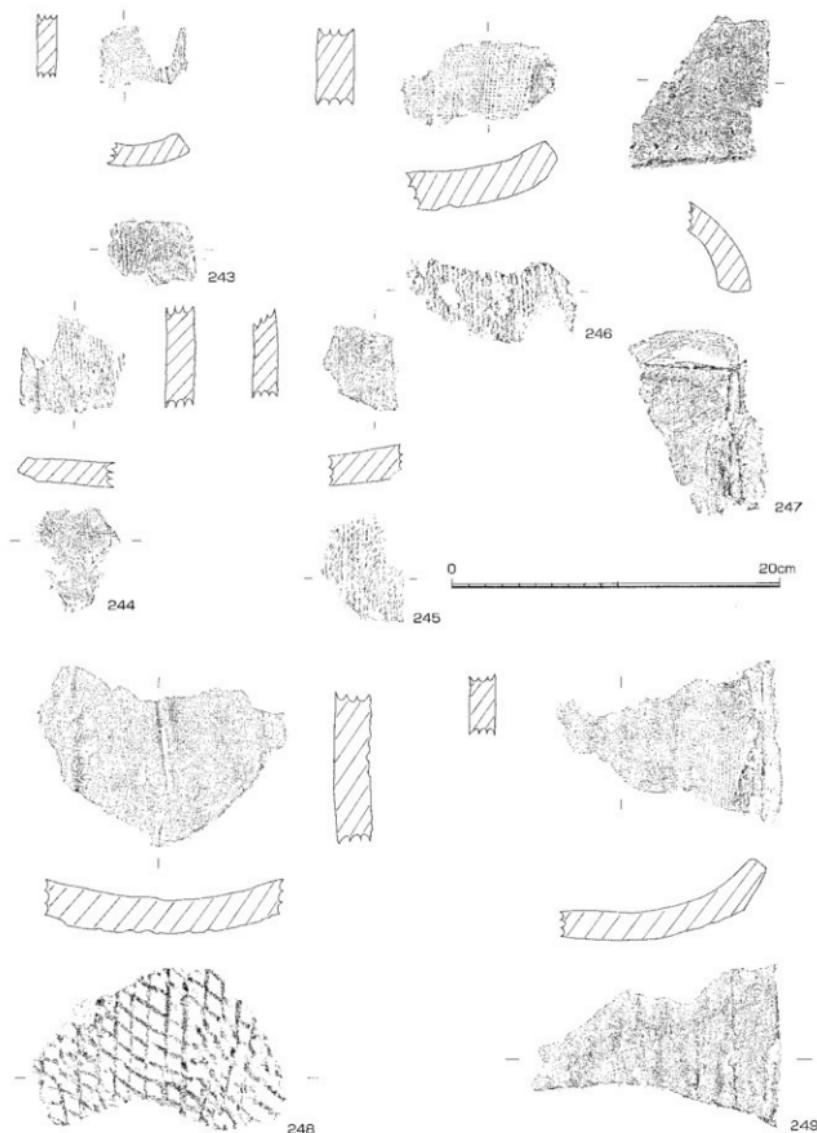


fig.116 調査区出土瓦

調査区出土炉壁、鉱滓

遺物包含層、ピット、溝からは炉壁、鉱滓が出土した。炉壁は同一のものと思われるが、接合できない。

250, 253~258は炉壁、251, 252は鉱滓である。250は、遺物包含層である灰褐色粘性砂質土、251はS D03、252~256はS P16、257, 258はS D01から出土した。炉壁はいずれも高温で熱せられて、赤黒く変色し、局部的に気泡を生じている。また、ガラス状の物質や鉱滓が付着している部分がある。いずれも小破片であるため、炉の形状やどの様なものを溶解したかは明らかでない。時期は確定的ではないが、S D01からは、fig.112の220の土器が共に出土している。これは弥生時代後期末~古墳時代初頭頃の壺である。

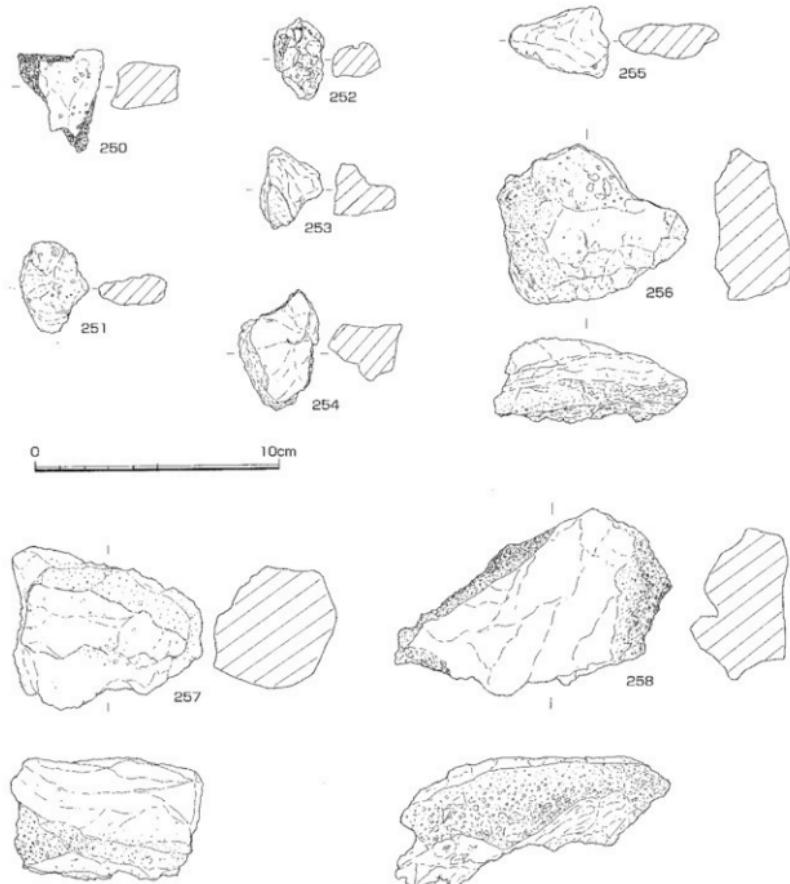


fig.117 調査区出土炉壁、鉱滓

東半部谷地状地形、灰褐色砂質土出土土器

調査区東半部で確認された谷地状地形を断ち割りした下層から、259が出土した。また、中世耕作土である灰褐色砂質土からは、260が発見された。いずれも須恵器の捏鉢の口縁部で、端部を上下に肥厚させて作り出すとともに鎌倉時代の東播系須恵器窯の製品である。



fig.118 東半部出土土器

動物遺存体

東半部南側断ち割りの下層より出土した動物遺存体で、ウシ成獣の右上腕骨遠位端である。遠位端幅は5.4cm以上、骨幹部幅は4.0cmを測る。ビビアナイトを析出し、劣化が著しい。骨体表面も剥離が顕著で、解体痕は確認できなかったが、周辺での家畜利用を示唆する資料である。鎌倉時代頃の土器の細片が共伴した。

5. 小結

当該地区では、弥生時代後期末から平安時代の遺構・遺物が検出された。また、中世ごろに埋没した谷地状の地形や近世頃に形成された洪沢砂層等からみて、この付近は現在よりもかなり地形の起伏が激しい場所であったことが想定される。また、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を伴う溝やピットから、金属溶解用の炉壁の破片が複数発見されていることから、当該時期に冶金作業が行われたことが指摘される。

fig.119
機械掘削作業fig.120
人力掘削作業

第3章 自然科学分析

第1節 上沢遺跡第46-1次調査出土柱材の樹種

三村 崑史（パレオ・ラボ）

1. 試料と方法

ここでは、柱材6点の樹種同定結果を報告する。6点のうち5点は2間×1間の大型の柱堀形をもち、側柱（柱間隔1.6m）の堀立柱建物SB103のものである。時代はすべて飛鳥～奈良時代に該当するものと考えられている。

同定に用いたプレパラートはすでに神戸市埋蔵文化財センターにより作成済みのもので、上記出土材から横断面・放射断面・接線断面の3断面の切片を取りガムクロラールで封入されたものである。同定にあたっては所有の現生標本との対照に拘り、光学顕微鏡にて40～400倍で検鏡した。同定したプレパラートはすべて神戸市埋蔵文化財センターに保管されている。

2. 結果

樹種同定の結果、6点の柱材すべてが針葉樹材であり、そのうち5点にコウヤマキが、1点にカヤが見出された（fig.121）。コウヤマキの5点はすべてSB103の柱材であった。同定の根拠となる材組織の特徴、および分布・材質等は次の通りである。

(1) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 写真図版1a～1c

仮道管と放射柔組織からなる針葉樹材。樹脂道、樹脂細胞、放射仮道管はみられない。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の量は少ない。分野壁孔は窓状で1分野に1つ認められる。

コウヤマキは暖温帯に点在して分布する高木性の常緑針葉樹で、耐陰性は高く生長は遅い。材質は重さ・硬さは中庸であり、均質で加工性・割裂性は良好、水湿に強い。

(2) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. イチイ科 図版2a～2c

仮道管と放射柔組織からなる針葉樹材。仮道管の内壁にはらせん肥厚があり、2本の対を成してまとまっている傾向がある。仮道管は丸みを帯びる。分野壁孔はヒノキ型で小さく、1分野にふつう2個程度。

カヤは高木になる常緑針葉樹で、主に暖温帯に分布する成長の遅く耐陰性の高い種である。材質はやや重硬・弹性・割裂性に優れ、耐湿性が高い。

遺物番号	材の用途	山十位履	樹種	木材台帳番号	遺物台帳番号
93	柱材	S P247	カヤ	W1-8064	R-97
94	柱材	S B103	コウヤマキ	W1 8065	R 106
95	柱材	S B103	コウヤマキ	W1 8066	R 108
96	柱材	S B103	コウヤマキ		R 114
97	柱材	S B103	コウヤマキ		R-115
98	柱材	S B103	コウヤマキ		R-117

fig.121 樹種同定結果

3. 考察

周辺の遺跡における古代～中世の時期に該当する柱材の樹種同定例は比較的行われてきており（例えば、植田 1999；松葉 2000, 2001；パリノ・サーヴェイ株式会社 2001）、コウヤマキ・ヒノキ・クリなどが主な用材として認められている。したがって、いずれも小高木～高木になり大径が得られ丈夫で腐りにくい材、特に通直な針葉樹材が多く選択されているようであり、なかでもコウヤマキは一般的に用いられている傾向にある。このたび確認された樹種もコウヤマキがほとんどであり、共通した傾向である。1点見出されたカヤに関しては周辺遺跡での類例は少ないが、カヤも大径が得られ通直で強度があり、また水湿に耐性があり

腐りにくい材質を有しており、コウヤマキの場合と同様の材質への着目が働き、柱材として選択されたものと推察される。

現在、周辺でのコウヤマキのまとまった自生地は神戸市西端に位置する丹生山の山城に限られるが、本遺跡近隣の松野遺跡における花粉分析結果（新山 2001）からは、高取山などの周囲の山麓に過去にはコウヤマキがふつうにみられたことが読み取れ、木材資源としては比較的豊富であったものと推測される。

また、S B103の柱材はすべてコウヤマキから成っていたが、このようにひとつの建物の柱材に同一の樹種が用いられることはしばしばあり（例えば、松葉 2002）、これは構築の際になるべく同じ材質のもので揃えようとした選択の結果であると考えられる。

引用文献

- 新山雅弘（2001）松野遺跡第5～1次調査の花粉化石群集、「松野遺跡発掘調査報告書第3～7次調査－新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発に伴う－」神戸市教育委員会, 187-192
- パリノ・サーヴェイ株式会社（2001）御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種、「御蔵遺跡 第4・6・14・3次発掘調査報告書 御荘西地区震災復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会, 114-128
- 松葉礼子（2001）二葉町遺跡出土木製品の樹種同定、「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査－新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－」神戸市教育委員会, 141-166
- 松葉礼子（2002）深江北町遺跡第9次調査 出土した木製品の樹種同定、「深江北町遺跡第9次 埋蔵文化財発掘調査報告書－葦屋驛家関連遺跡の調査－」神戸市教育委員会, 104-137
- 植田弥生（1999）白水遺跡第4次調査から出土した木製品の樹種、「白水遺跡第4次－神戸国際港都建設事業神戸市白水特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」神戸市教育委員会, 66-78

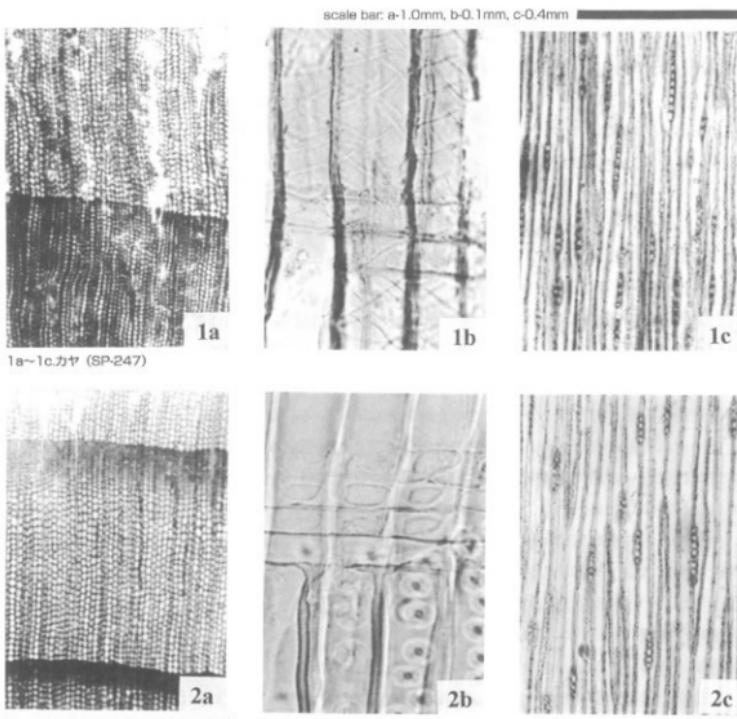


fig.122 第46-1次調査出土柱材・材組織の光学顕微鏡写真 a:横断面 b:放射断面 c:接線断面

第4章　まとめ

第1節　今回の調査で発見された遺構、遺物について

1. 検出遺構

平成12年度から平成14年度にかけて、現地調査を実施した都市計画道路松本線拡幅工事に伴う上沢遺跡の発掘調査では、弥生時代後期末から中・近世に至る遺構、遺物が出土した。それぞれの遺構については、すでに第2章で詳述したため、この項では、それらの遺構をおよその年代毎に集成して、当遺跡の時代毎の変遷を考えてみたい。なお、これらの遺構で出土遺物がなく、年代決定の判断材料を欠くものは、検出された層序や周辺の状況等から、遺構の属する年代を判断した。

(1) 弥生時代後期～古墳時代初頭

fig.123は本報告における弥生時代後期～古墳時代後期の遺構をおよその年代毎に集成した図面である。

この図を見ると、東半分にピット、溝等が集中し、中央から西側は遺構が希薄となる。第38-1次から第50-2次調査にかけての谷地状地形を挟んだ西側では、焼壁片を含む溝が確認されている。調査区の西端では、再び道路（房王寺線）側へドアがてゆく地形となっている。なお、第46-3次調査のS D301、302について、検出された幅は異なるが、第50-1次調査の湿地状地形と接続するものと判断される。

(2) 古墳時代初頭～古墳時代前期

この時代の遺構面については、前代のものと重複するものが多く、確実に別の遺構面として捉えることは難しい個所もある。土地利用の状態としては、前代同様に竪穴住居や溝、ピットが東半分に集中している。中央付近や西側は湿地や谷状の地形が入りこみ、耕作痕や溝が、僅かに見られる程度である。第50-2次調査付近では、ピットが散在している。

(3) 古墳時代後期

当該時期の遺構は、第50-2次調査区で確認されただけであるが、第38-1・2次調査区では遺物包含層からこの時期の遺物が発見されている。本報告において確認された遺構は少ないが、近接した場所に居住地が存在するものと考えられる。

(4) 奈良時代～平安時代前半

fig.124は奈良時代～江戸時代の遺構をおよその年代毎に集成した図面である。

調査区の東半分を中心に、掘立柱建物群、柵列が確認されている。特に第46-1、3次調査で発見された掘立柱建物や柵列は、方位を合わせて造られているものがある。これらの建物群が、官衙的な性格を持つ施設であるかについては、それに結びつく様な出土遺物が、確認できなかった。しかし、周辺地の調査で、奈良時代の銅鏡が出土した井籠組の井戸^①や金属製の帶金具等が発見されており、官衙またはそれに付属する建物が存在する可能性を否定することはできない。また、今回の調査範囲の西端部でも、瓦が若干出土しており、瓦葺きの建物が、近くに存在した可能性を示唆している。

(5) 平安時代後半～鎌倉時代前半

調査地の西半分でピット群や、落ちこみ状の地形が確認されたが、分布はそれほど濃密ではない。

(6) 鎌倉時代後半～江戸時代

耕作に伴う溝や動溝が、調査地各所で確認された。調査地の大半は耕作地として利用されていたようである。また、近世頃の上石流の痕跡と考えられる流路が、第50-2次調査地西端で見つかっている。第38-3～第50-2次調査地にかけての谷状の地形は、近世頃には埋没し、溝としてその名残を留めていた。

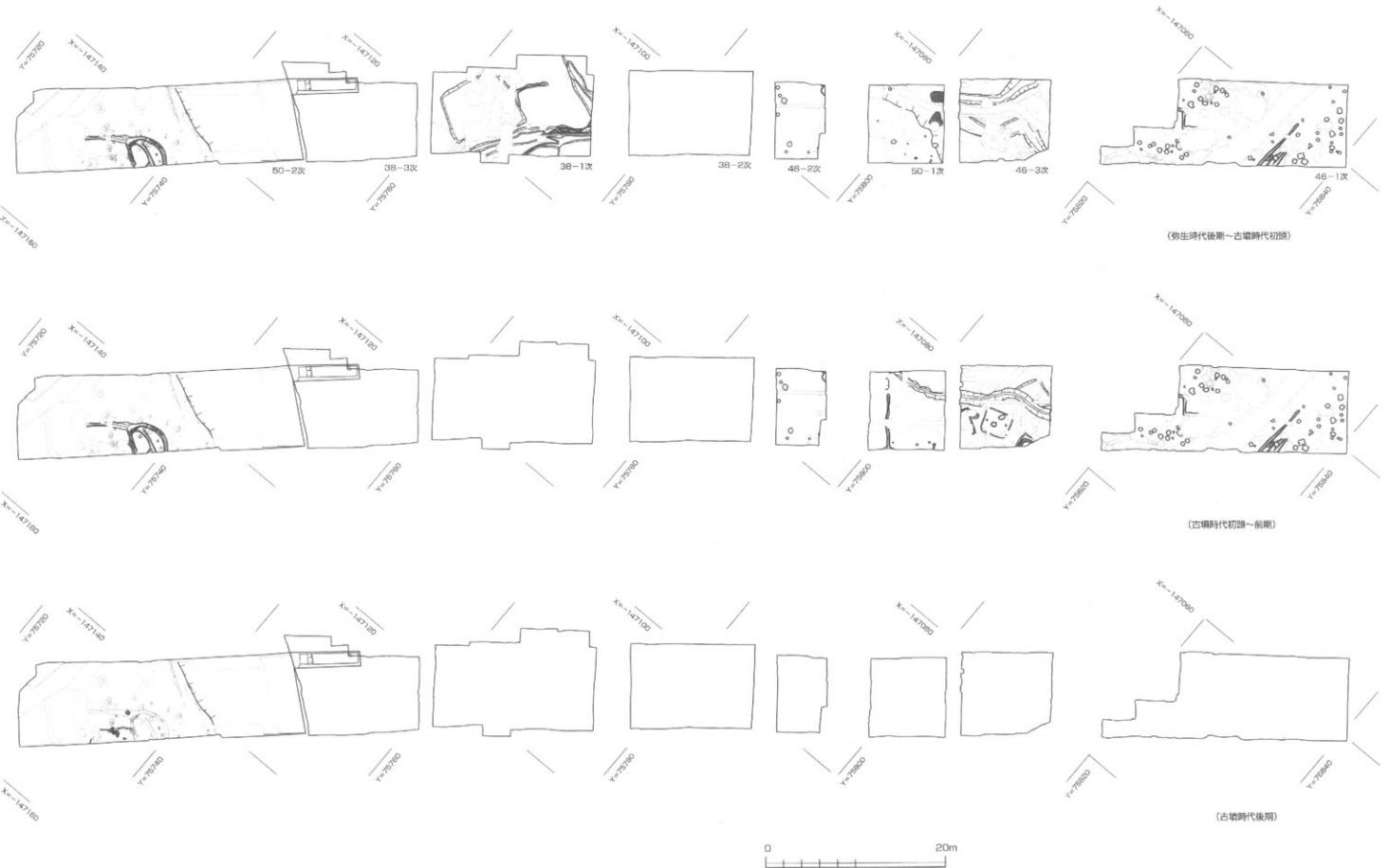
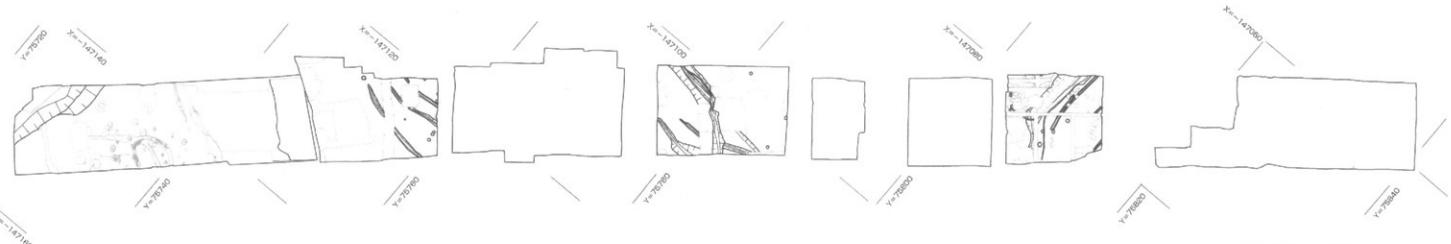
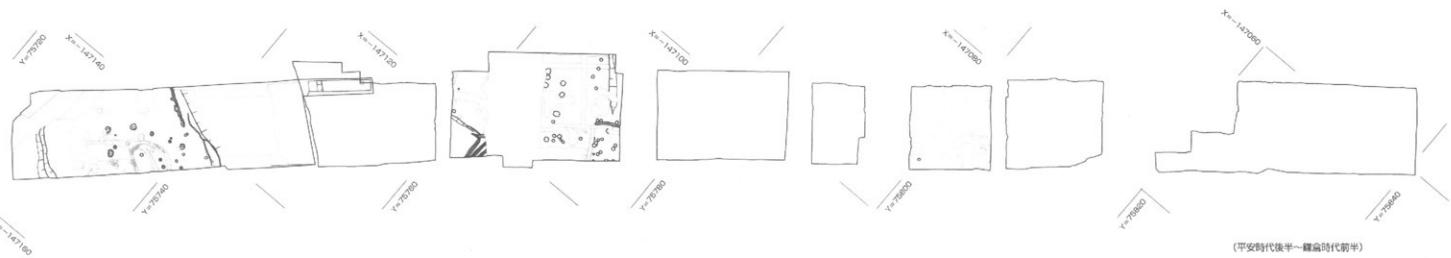
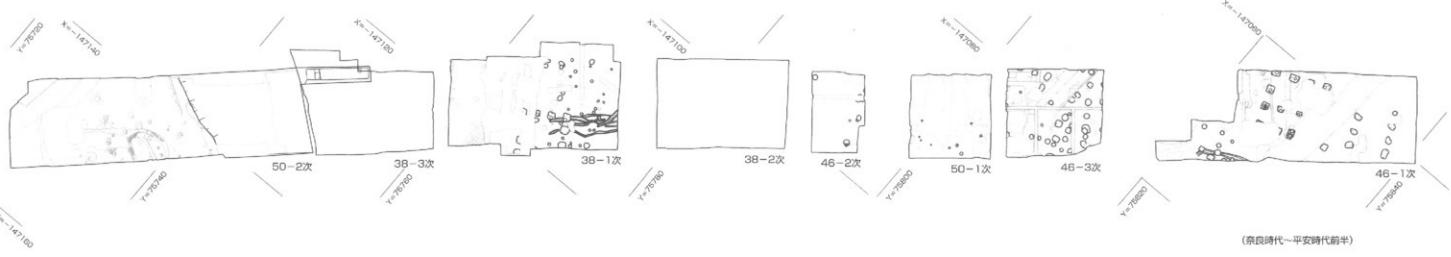


fig.123 第38、46、50次調査遺構集成図(1) 太線は当該時期の遺構



0 20m

fig.124 第38、46、50次調查遺構集成図(2) 太線は当該時期の遺構

2. 上沢遺跡における各時代の居住域の変遷

前項で概説した時代毎の遺構の変遷が、当遺跡内での遺跡の移り変わりと、どのように対応しているかを以下に述べる。fig.125～129は、これまでの主な調査で確認された各時代の遺構・遺物の出土範囲を、第1章fig.5の表をデータベースにして、図上に表現したものである。

図中の網線の薄い部分が遺跡の範囲、濃い部分が当該時期の遺構・遺物が多く検出された個所である。なお、網線の濃い部分については、これまでの点や線的な各調査地から得られた情報を基にして、おおまかに括ったものであり、この範囲内すべてに、当該期の遺構が存在しているということではない。また、未調査の部分も多いため、今後の調査の進展に伴い、範囲が拡がることや、別の個所に同時期の遺構等が、発見される可能性もあることを了解いただきたい。

(1) 弥生時代前期～中期

弥生時代前期～中期の遺構・遺物の集まる個所は、遺跡の南東付近に存在（fig.125）し、本報告の調査地内では確認されない。この時期の居住範囲は広範囲でなく、遺物の出土量も少ないため、拠点的な集落とは認めがたい。ただし、縄文時代後・晚期の遺物と弥生時代前期の土器が混在した流路が確認されており、縄文時代～弥生時代に移り変わる時期に、当遺跡が関わっていたことは注目される。

(2) 弥生時代後期～古墳時代初頭

前段階に比べて、居住範囲はかなり拡大し、遺跡の中央部に広がる（fig.126）。本報告の調査地（黒塗りの範囲）もその中に含まれる。この時期は集落規模が前代よりも大きくなっていること、住居址が多く検出され、遺物の出土量も多い。このことから、遺跡の最初の盛行期であることは間違いない。

また、第50～2次調査で確認された金属の溶解炉破片は、当該時期に冶金作業が当遺跡で行われた証左であると言え、周辺地域の中では、南西に約1kmに位置する長田神社周辺の遺跡と共に、中心的な役割を担っていた集落と考えられる。

(3) 古墳時代前期～後期

当該時期の分布の範囲は、前代よりもさらに拡がり、遺跡の範囲の約2／3程度を占めるようになる（fig.127）。しかし、このことが、集落規模の拡大とは結びついていないようである。遺構の在り方や遺物の量から観ると、むしろ、前代よりも小規模、かつ分散的な居住がなされているように見受けられる。

しかし、この時期の遺構・遺物はさほど多くはなく、現在は大雑把な表示しかできない。今後、調査が進展してゆくと、前期から後期にかけての集落位置の細かい変遷が把握できるのではないかと思われる。

第9次調査において、湿地状地形で発見された大量の滑石製品は、水辺の祭祀が行われたことを推測させる。また、韓式系上器も発見されており、これらの遺物の評価については、今後の課題として残されている。

(4) 飛鳥時代～平安時代前半

前代と比べて範囲は、やや狭まるが検出遺構・出土遺物共に注目すべきものがある（fig.128）。当遺跡の2度目の画期といつてよい段階である。これまでの調査で、当該時期の分布範囲の主に西半部から、飛鳥時代の大礎造を思わせる建物や、繩羽口・鉱滓・焼けた粘土塊という様な鍛冶関連遺物、漆の入った容器等、工房の存在を窺わせるような遺物が出土している。この時期から、拠点的な集落の様相を現すことを示唆する資料である。

奈良時代～平安時代前半の遺構・遺物は遺跡の東半部にあり、多数の掘立柱建物址・土坑・溝などを検出している。また、井籠組の井戸から、銅鏡や小型銅鏡が出土している。また調査に伴い、墨書き器や円面鏡、金属製帶金具・銅製絞貝、重圓文軒丸瓦、土馬、銅の溶解炉片等、官衙付属施設や工房的な施設の存在を窺

わせる資料が発見されている。

また、当遺跡の北西に接して白鳳～平安時代の寺院跡といわれている室内遺跡^②（伝承では房王寺跡）が存在する。伽藍配置等は明確ではないが、これまでに礎石らしき石材や、瓦、塑像の破片が出土している。

これまでに検出された遺構・遺物、この周辺では唯一といえる白鳳～平安時代の寺院跡といわれる室内遺跡が接していることなどから、奈良時代前後の段階では、当遺跡は六甲山南麓西部における中心的な拠点と評価してもよいと考えられる。この段階においては、当遺跡またはその近辺に、郡衙等の公的な施設が設置されていた可能性は高いと言える。

(5) 平安時代後期～中世

当該期の遺構・遺物の分布は、遺跡の範囲の大半を占めるようになる（fig.129）。掘立柱建物址、溝、井戸等を確認しているが、遺構の密度は高くはない。

遺跡の西半部では、平安時代前期と後期の間に、砂礫層が堆積しているところが確認され、規模は不明ながら、洪水によるダメージを受けている（おそらく10世紀頃）。この洪水が、集落に与えた影響は不明であるが、平安時代後期以降、前代の中心的な拠点としての様相は影を失い、漸次、中世的な散村の景観というべきものに変化し、広範囲に遺跡・遺構が分布するようになってゆく。これは、当該時期の八部（やたべ）郡における他の遺跡の状況^③と同様である。

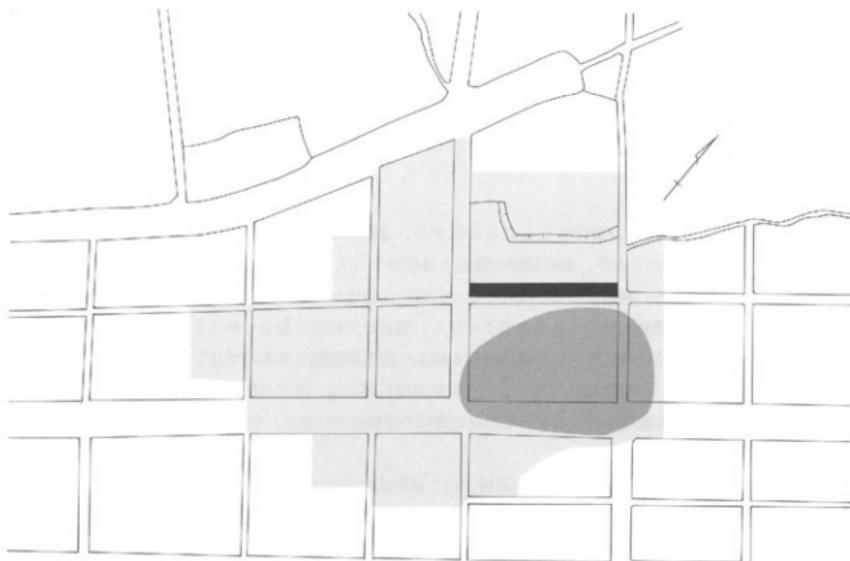


fig.125 居住域の変遷（弥生時代前期～中期） S=1/5,000

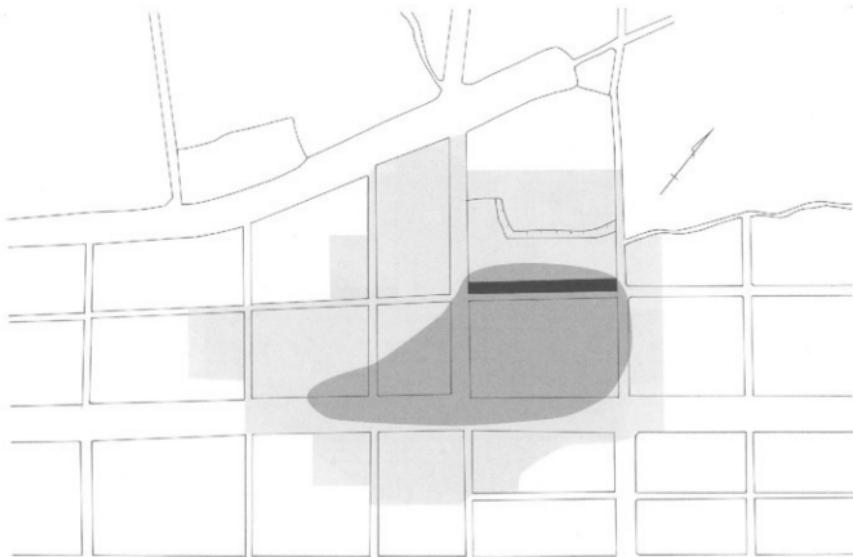


fig.126 居住域の変遷（弥生時代後期～古墳時代初期） S = 1/5,000

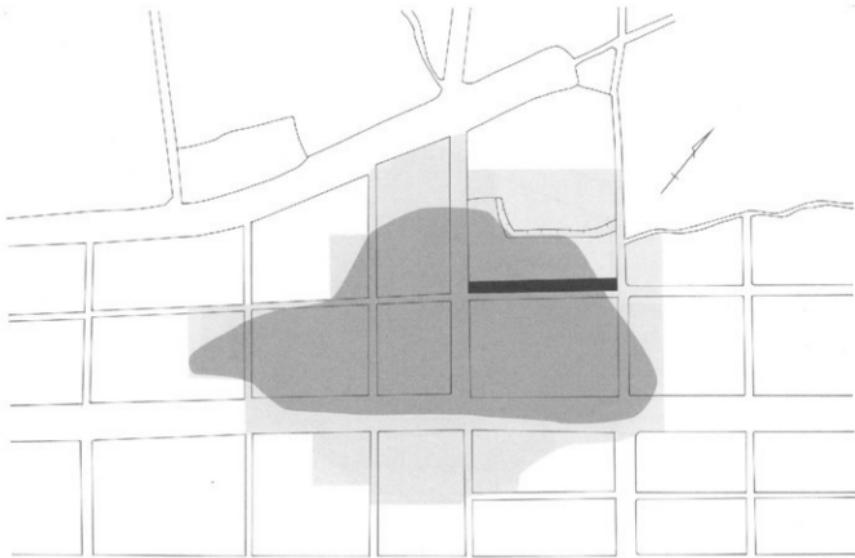


fig.127 居住域の変遷（古墳時代前期～後期） S = 1/5,000

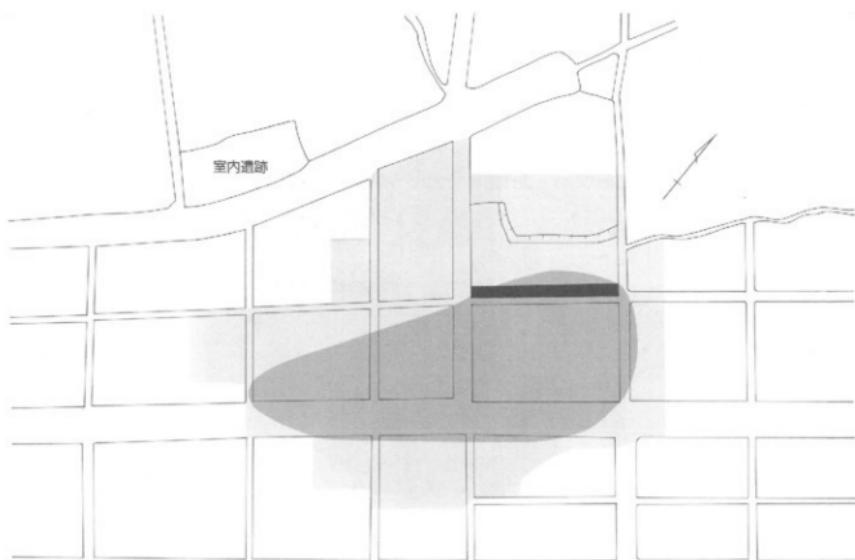


fig.128 居住域の変遷（飛鳥時代～平安時代前半） S = 1/5,000

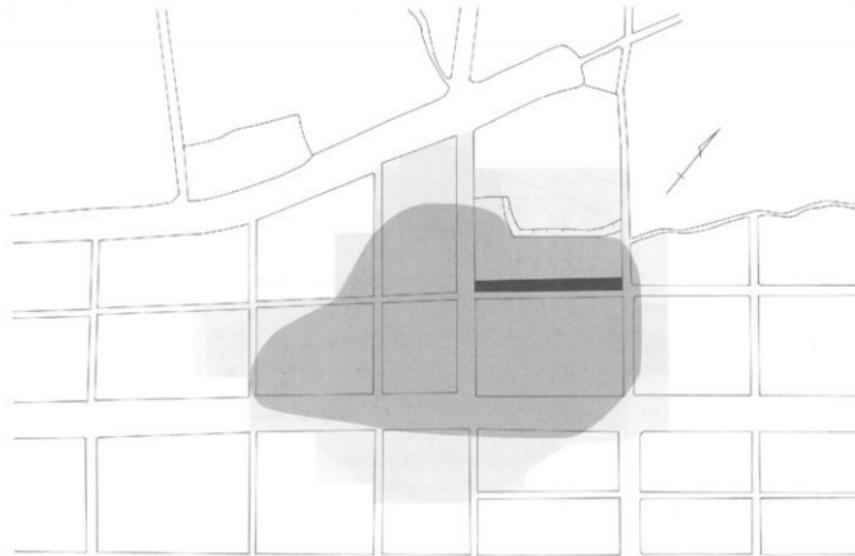


fig.129 居住域の変遷（平安時代後期～中世） S = 1/5,000

3. 出土遺物

本報告内の調査で出土し、掲載された遺物は、ほとんどは土器類であり、その他は砥石と柱材がいくつか掲載されているにすぎない。それら土器の過半を占めるものは、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器、いわゆる庄内式土器併行期のものである。ここでは、当該時期の上器および第50-1次調査で発見されたSK101の出土土器（古墳時代前期・布留式土器併行期）について略述する。

(1) 弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器について

まず、いくつかの問題点を指摘したい。最初に、本報告に掲載された当該時期の土器の出土状況については、溝、流路、遺物包含層からの出土がほとんどであり、ある程度の時期幅が想定され、一括りの高い土器群は、第50-1次調査のSK101出土土器だけであること。また、出土した大半の器形が壺で、器種のヴァリエーションに乏しいこと。さらに、神戸市域における庄内式土器併行期の七器編年は、充分に把握できておらず、特に、弥生時代末と古墳時代初頭の土器を分けうる基準資料が不足していることが挙げられる。

上記の様な状態ではあるが、本報告中の壺の形態変化をみると、i. 体部上半に最大径があり、肩が張る形状から球形化への変化、ii. 突出した底部から平底化、さらに丸底化へ推移するのは読み取れる。これらの変化については、従来説かれている庄内式土器の器形の変化³⁰と対応するものと言えるが、先述した通り、当地域においては、この変化が漸次推移し、時間差として捉えてゆく作業が、現在はまだできていない。

周辺の遺跡から出土した、すでに公表されている土器を参考に、上述のi, iiの変化の推移を対応させてみると、弥生時代後期後半とされる長田神社境内遺跡SB区土器群（シルト層）出土の遺物³¹や、後期末に位置付けされるSD04出土の土器³²、また、後期後半の前葉とされる上沢遺跡第1次調査Ⅲ区SK01出土土器群³³よりも、新しい要素が含まれている土器が多いことが判る。また、庄内期の末頃とされる御藏遺跡SX12302出土の土器群³⁴よりは古い様相を呈している。

以上から、今回の報告で掲載した土器が概ね、弥生時代後期末～庄内期の前半・中頃のものを含むと、現在の段階では、判断するのが妥当と考える。土器の時期の細分については、今後の報告例の増加を待ちたい。

また、この段階における、他地域の土器については、多いとはいはず、第46-2次調査・fig. 60の108の土器（山陽地方の影響を受ける土器）や第46-3次調査・fig. 75の119の土器（北陸系か？³⁵）などだが、僅かに挙げられる。

(2) 第50-1次調査SK101出土の土器について

SK101からの出土土器は、球形の体部に口縁端部が肥厚し、内面をヘラケズリで薄作りに仕上げるという特徴をもつ、布留型の壺（fig. 102・216, 217）、V様式系の壺の形態を受け継ぐ土器（215）、古備地城からの搬入品と考えられる壺（218）などが共伴した一括りの高い土器群である。

218については、川入・上東編年³⁶の亀川上層、高橋護氏の編年³⁷では、X-d, e期に相当するのではないかと考えている。いずれも、庄内期末～布留式期の初めに対応する土器であるといわれている。

当該時期と近辺から出土したほぼ同時期の上器群としては、御城遺跡第21次調査上器編年³⁸、あるいは同遺跡第2調査区SX301山上の一群³⁹や、出土した土器にやや時期幅があるが、戎町遺跡第3次調査SX01⁴⁰の遺物がそれに相当する。六甲山南麓の西半部では、庄内期の半ば頃から、他地域の土器の出土が確認されはじめ、庄内期の終末～布留期にはかなり見受けられるようになるという⁴¹。今回の報告で発見された土器についても、これを追認するものといえる。また、この時期を少し下った段階以降、妙法寺川流域を除いて、集落の変遷をトレースすることが難しくなり⁴²、集落が明確に確認されている古墳時代中期末までの、当該地域の土器の様相は、あまり明らかではない。

4. 終わりに

都市計画道路松本線拡幅工事に伴う発掘調査は、出土資料整理を含めて、足掛け4年にわたって行われました。この間に、阪神淡路大震災によって瓦礫の山、焦土と化した上沢・松木地区では、復興の槌音が響き渡り、被災した家々の多くは再建されて、以前の賑わいを取り戻しつつあります。

震災以降、上沢遺跡およびその周辺では、数多くの発掘調査が行われました。幾千年の眠りから目覚めた埋蔵文化財は、この地域に根づいた人々の歴史を雄弁に物語り、たくさんの新発見を私たちにもたらしてくれました。本書に掲載されたものはそのほんの一部分でありますが、貴重な歴史遺産を次代に伝え、多くの市民の方々にその成果を知っていただく手段として、この報告書を刊行いたしました。今後、この資料が、広く活用され、地域の歴史を明らかにする手立てとなれば、幸いです。

註・参考文献

- ① 口野博史他「上沢遺跡第33次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』2002 神戸市教育委員会
以下、出土資料についてはP.7 fig.5 を参照すること
- ② 水口富太他「室内遺跡」『平成9年度年報』1998 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- ③ 谷正俊編『御藏遺跡V 第26・37・45・51次調査』2003 神戸市教育委員会
- ④ 森岡秀人「弥生終末期の土器と土師器」『季刊考古学第81号』2003 雄山閣で簡潔に要約されている。
- ⑤ 黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』1990 神戸市教育委員会
- ⑥ ⑤と同じ
- ⑦ 阿部敬生編『上沢遺跡発掘調査報告書』1995 神戸市教育委員会
- ⑧ 富山直人・池田毅・川上厚志・阿部功編『御藏遺跡第5, 7, 11~13, 18~22, 24, 28, 29, 31, 33~36, 39, 41, 43次発掘調査報告書』2003 神戸市教育委員会
- ⑨ この土器の环部に見られる特徴に、近似した土器は北陸地方でみられるようであるが、口径に違いが認められる。
堀大介「月影式の成立と終焉」『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』2003 勝利阪府文化財センター
- ⑩ 柳瀬昭彦「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書16』1977 岡山県教育委員会
- ⑪ 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告9』1988 岡山県立博物館
- ⑫ ⑧と同じ
- ⑬ 安田滋編『御藏遺跡第4・6・14・32次発掘調査報告書』2001 神戸市教育委員会
- ⑭ 山本雅和「戎町遺跡第3次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
- ⑮ 神戸市教育委員会 黒田恭正氏に市内出土の土器について、多くの御教示をいただいた。
- ⑯ ⑮と同じ

写 真 図 版



第46-3次調査 SD301出土土器

カラー図版2



第50-1次調査 SK101出土土器



第46-3次調査 SD201出土土器



第50-1次調査 土器群 A,B出土土器





第3遺構面全景
(南西から)



第2遺構面全景
(南西から)



第1遺構面全景
(南西から)

写真図版2

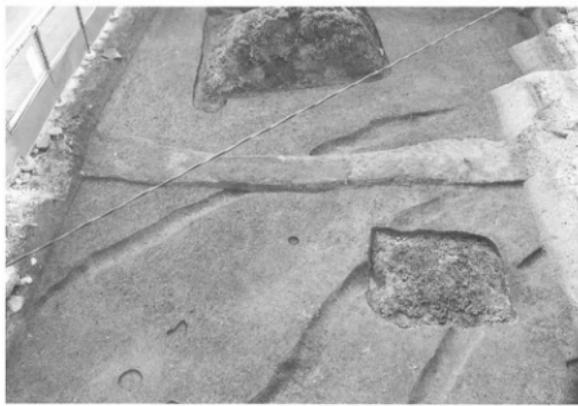
第38-2、3次調査



第38-2次調査区全景
(南西から)



第38-2次調査区全景
(北西から)



第38-3次調査区東半部
(北東から)



第2遺構面全景(北東から)



第1遺構面全景(南西から)



第1遺構面全景(北東から)



SB103検出状況(北東から)

写真図版4

第46-2、3次調査



第46-2次調査 第2層構面全景(南東から)



第46-2次調査 SK201土器出土状況



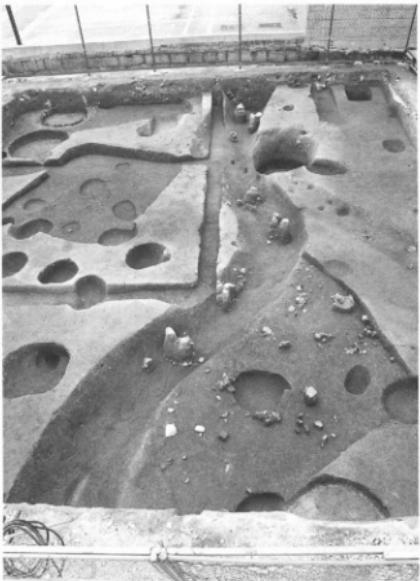
第46-3次調査 第4層構面北半部(北東から)



第46-3次調査 SD301土器出土状況



SB202全景(南西から)



第3遺構面全景(北東から)



SB202全景(東から)



第2遺構面全景(南西から)

写真図版6

第50-1次調査



第3遺構面全景
(北東から)



第2遺構面全景
(北東から)



第1遺構面全景
(北東から)

第50-1、2次調査



第50-1次調査 SK101土器出土状況



第50-1次調査 土器群A,B出土状況



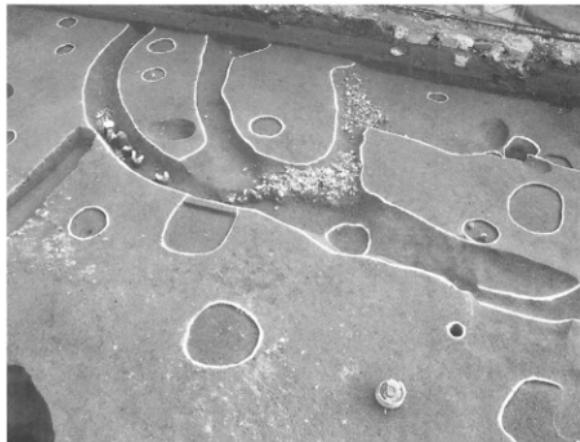
第50-2次調査
東半部南壁
断ち割り

写真図版8

第50-2次調査



調査区西半部全景
(北東から)



溝内小甕群、遺物
出土状況
(北から)



陶衣壺?出土状況



4



8



6



12



5



9

写真図版10

第38-1次調査



14



16



17



24



20

SD202、灰色シルト出土土器



25



26



40



41



42



28



33



29



27



31

写真図版12

第38-2次調査



61



50



58



54



55



53

黒褐色シルト、灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器



65



66



59



64



67



57

灰色シルト、茶褐色シルト混細砂出土土器、砥石

写真図版14

第46-1次調査



88



84



86



83

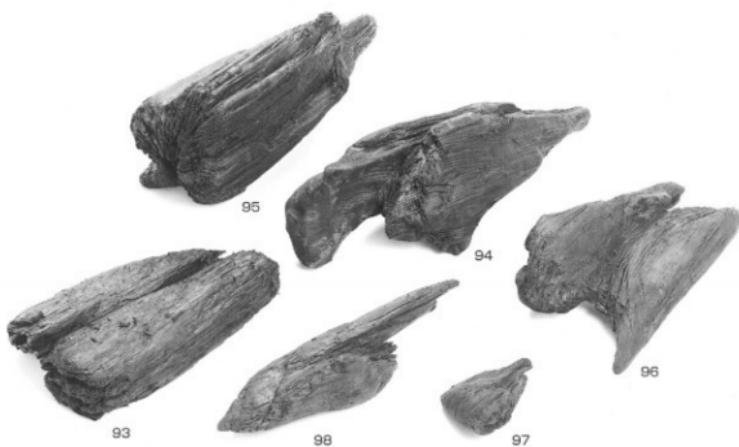


85

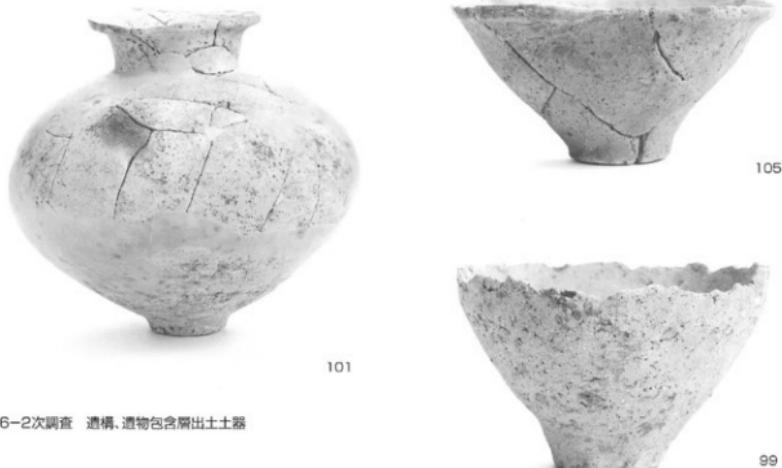


92

遺構、遺物包含層出土土器



第46-1次調査 柱穴、ピット出土柱材



第46-2次調査 遺構、遺物包含層出土土器

写真図版16

第46-2、3次調査



108



119



112



106



118



102

遺物包含層出土土器